

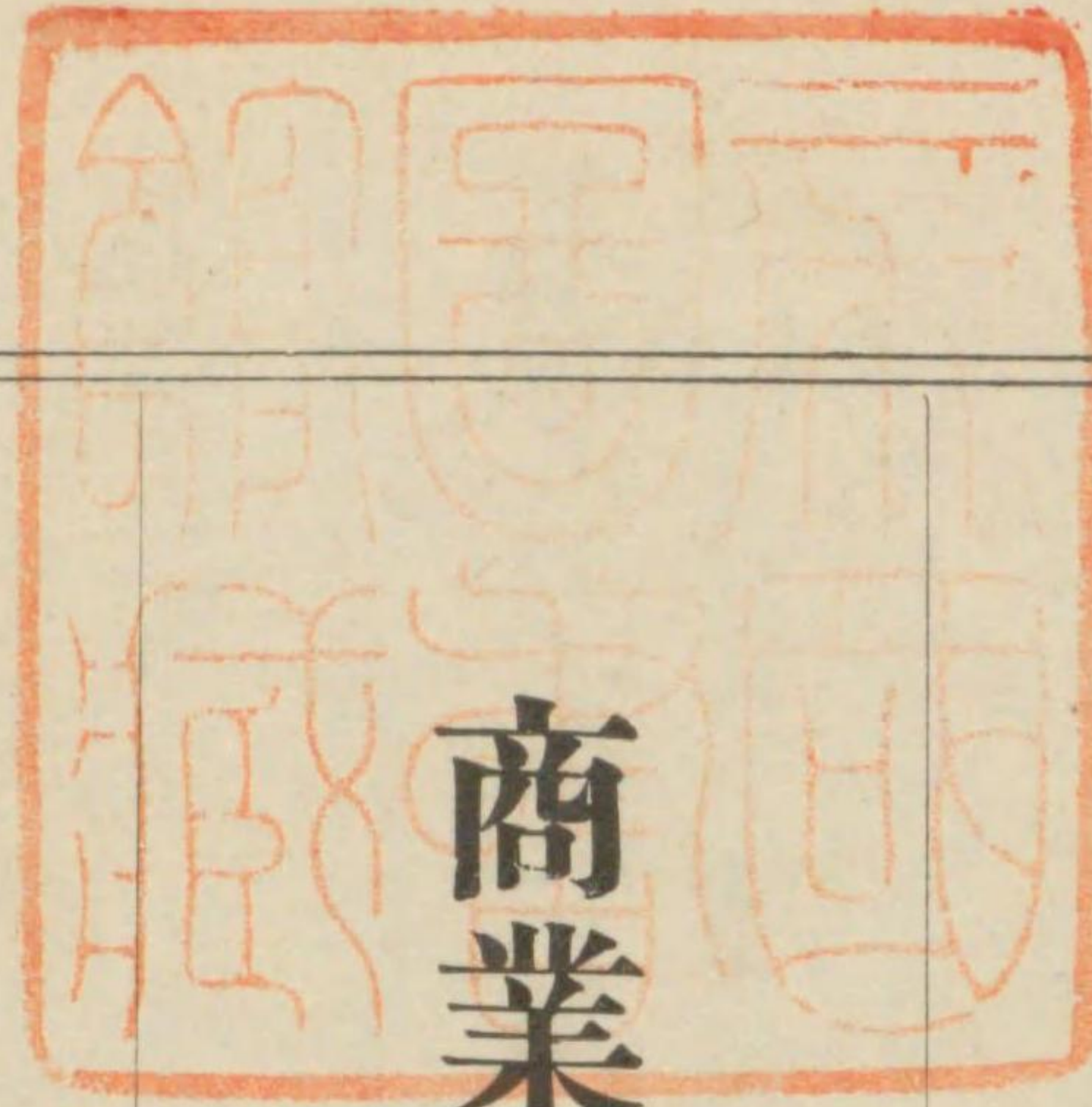
606-347



1200501532481

606

377

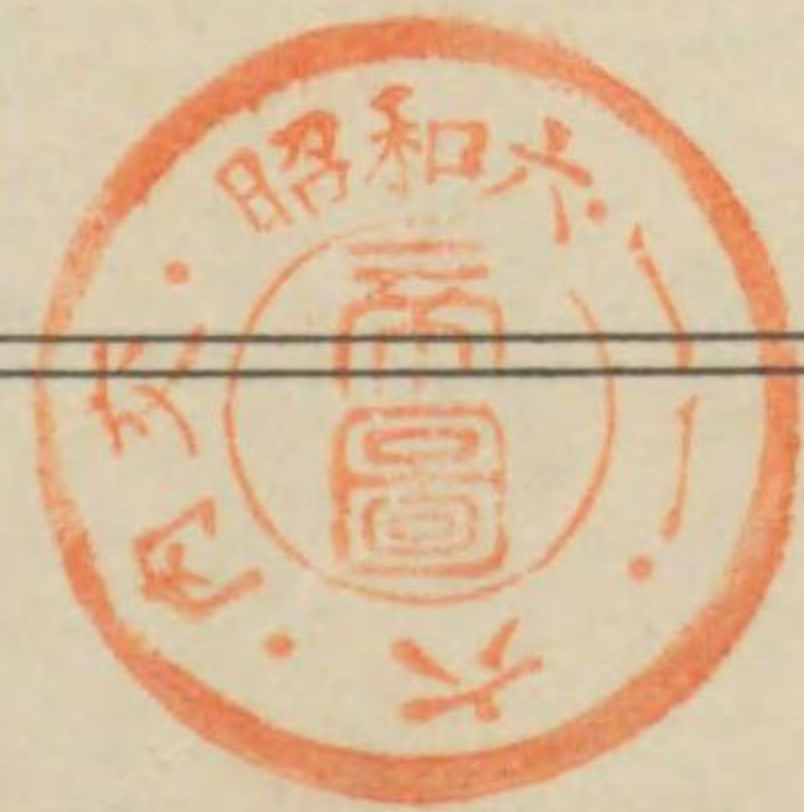


東京商科大学教授
商學博士

藤本幸太郎著

商業統計の常識

千倉書房版



606-347

序

統計學としての學問は漸く十七八世紀以來の事であるが、其事實は何れの國にも古い時代から存してゐたのである。然るに經濟統計（商業統計も其一つ）は人口統計等に比べては遙かに後年の發達に係り、從て其學問としての地位は今日尙ほ幼稚の域を脱しない。然しながら經濟學は從來動もすれば哲學上乃至論理學上の概念論に墮し去つて殆んど實際の用を爲さざるかの觀があつた。然るに最近に至り統計學の發達に依つて漸く斯る缺點を匡救する手段を得たから、斯學の前程に少からぬ光明を投ずることを得るやうになつた。他言を以てすれば經濟學の一般原理が其當否の如何を問はず統計的觀察に基いて精確な實證を爲し得るやうに

なつた。即ち經濟統計は彼の物價、金融、保險、交通、國際貿易、商工經營等一切の商業的、經濟的現象を研究の對象として漸次、其時間的、場所的制約に依る數列から、其内面的な相關關係乃至因果關係を知ることも可能になつて來つつあるのである。

本書載する所は僅かに物價、外國貿易、商業經營の三統計に、統計學の總説を以てした許りであつて「商業統計の常識」としても、尙不備不完の譏りを免れ難いが、幸に商業統計若くば經濟統計の一斑を窺ひ得べき指針とも成らば著者の本懐とする所である。

本書を起稿するに當り、統計學の專攻者たる商學士中村武夫、同伊大知良太郎兩君から多大の援助を受けた、若し兩君の親切な後援がなかつたならば、著者は到底此書を世に送り出すことを得なかつたであらう。

此處に之を特記して兩君の厚意を深謝すると共に學界に於ける兩學士の前途を祝福せんと欲するものである。

昭和六年十月

於中野寓居

著者識

商業統計の常識 目次

第一章 統計學とは何か……………一

第一節 數の世界……………一

第二節 大量觀察……………六

第三節 統計方法……………一四

第一項 比例數……………一七

第二項 平均……………二〇

第三項 圖示法……………二四

— 其の他 —

第四節 商業統計……………三三

第二章 物價統計……………三六

第一節 物價とは何か……………三六

第二節 貨幣價値の變動……………三六

第三節 指數……………四〇

第一項 貨幣價値の測定……………四〇

第二項 指數算出法……………四四

第三項 物價指數の沿革……………四四

第四項 各國に於ける物價指數表……………五二

第五項 物價指數算出上の注意……………五九

第六項 物價指數の効用……………六八

第四節 物價の大勢……………六六

第三章 外國貿易統計……………九

第一節 我國貿易内容の發達……………九

第二節 外國貿易の發達……………一〇四

第三節 外國貿易統計の意義……………一二

第四節 外國貿易統計の材料……………一四

第五節 統計材料の編纂……………一三

第一項 一般貿易及特別貿易……………一三

第二項 品目の分類……………一六

第六節 外國貿易差額と國際貸借……………一四

第四章 商業經營統計……………一三

第一節 商業經營統計上の諸問題……………一六

第二節 商業經營統計の資料……………一七〇

第三節 統計方法による經營諸法則の發見……………一八三

第一項 大數研究……………一八四

第二項 比率研究……………一八七

第三項 相關研究……………一九四

第五章 景氣豫測101

第一節 景氣豫測とは何か101

第二節 景氣豫測の實際105

第三節 景氣豫測法の批評と本書の結論115

目次終

商業統計の常識

第一章 統計學とは何か

第一節 數の世界

統計といふ言葉を耳にすると人は直ぐ、あの無味乾燥な、何となく寄りつき難い數字の塊まりを思ひ浮かべる。雑誌の記事や講演の中で統計が出て來ると、何とはなしに敬遠しがちである。何故、統計は斯う人々に親しまれないのだらうか。人は決して統計を無用のものとは思つて居ないだらう。否其重要さは充分認めて居るにちがひない。例へば我が國にも十年毎に行はれる國勢調査に就てもそれが國家にとつて施政上、極めて重要な役目を果すものだとは誰もが考へて居る。ところが、調査の結果たるあの老大な數字の塊りに對して充分な親しみと理解とを以て臨み得るものは一體どの位あるだらう。多くは新聞紙上で帝國全版圖の人口は約九千萬だなど頷くぐらひが關の山ではあるまいか。あ

とは唯、曠茫々たる數字の沙漠、我關せず焉の見限りである。何故に斯うも統計は人に敬遠されるのだらう。

更に其人達に統計學とは何かと訊ねたら、屹度かう答へるにちがひない。それは其様な數字を作り出す時に必要な種々煩雜な、砂を噛むやうな調査手順の研究をしたり、又さうして出來上つた數字の群れの上に色々と小むづかしい數學的な加工術を施したりする學問であると。統計學を斯う考へることは一應極めて正しい解釋である。けれど、何處までも煩鎖だとか砂を噛む様だとか小むづかしいとかいふ氣持がつきまとつて居るのはどうしたものだらう。何故人は統計學に對して斯うもよそよそしいのだらう。

思ふに此よそよそしさには二つの原因が働いて居るやうである。その二つは全然方向の異なつたもののだが、統計學といふ觀念の中に一しよに混り込んで、其結果、統計學を一つの親しみ難い學問にしてつて居るやうである。其一つは、あの砂を噛む様な無味乾燥な數字の集り（即ち統計）を取扱ふところの統計學は何といふ味氣ない學問だらうといふ考へである。統計學者はシャイロックの様に唯ひたすら數字數字と探し求めて居る。彼はいつでも物指と計算機を携へて、いとも冷やかに四邊を見廻す萬物を其ものさしで測つては彼の手帳へ几帳面に書き附ける。斯うして彼の獲た結果は數字數字、唯數字の記録のみである、と人々は思ひ込み易い。是に於てか人々は統計や統計學に對して煩

鎖を感じ、無味乾燥を覺えて、それを敬遠しがちである。けれどさういふ考へ方は正しくない。少くとも統計學に對する眞の理解ではない。統計は決してそんな冷い數字の塊りでもなければ、死んだ記録の集積でもない。統計學は決して其の様な、機械の如く味氣ない學問ではない。むしろ其處には脈々たる生きた血潮が流れて居る。統計は息の通つた數字の群れである。そして統計學は吾々にもつと親まれていゝ温い學問である。

人は何故、ものの數字を敬遠するのだらう。吾々人間のあたり近所を見廻してみよ。其處にある一切のものは草にせよ樹にせよ雨滴にせよ、又は家にせよ人にせよ人と人との取引にせよ勃發する色々な事件にせよ、すべて形あるもの起り得るものである限り、數としての半面を持つて居る。あらゆるものは一つ二つと勘定することが出来る。故に人が集つて人口となり人口幾何と勘定出来るわけである。何處にも區切りのない時の流れをさへ勝手に刻んで、日を區切り月を分ち年を造り上げて單位とし、わざわざ數の力を藉りて日常生活の便を計つて居る吾々ではないか。更に又、今の世に缺くことの出來ない貨幣にしても、數は其生命である。若し數の世界を離れたとすれば、商人は何によつて其日の賣上高を知ることが出來よう。國家は何によつて其團體生活の方針を定めることが出來よう。斯のやうに數の世界は實にあらゆるものの一面であり、而も極めて重要な一面である。此重要な一面を實際に現はしたものが即ち統計に他ならない。統計は吾々の周圍の一切のものの數量的の半面を吾

々に告げて呉れる。換言すれば、吾々の日常生活の數量的半面は實にまさまさと統計によつて語られるのである。統計のうちには毎日の生活の咳きも噓めも涙も笑みもが潜んで居る。だから統計は生きた數字の群れなのである。また其統計を中心とする統計學はあぢきない學問どころか、むしろ血も涙もある學問であり、元來吾々に極めて親しかるべき學問なのである。

だがそれにも拘はらず尙、人は反駁するかも知れない。統計學にはあの厄介な小むづしい數學が附きまといつて居るのではないかと。實際此の點にこそ、人々が統計學を敬遠する第二の理由がある。統計學は確かに厄介な數學の力を藉りる。集められた統計の上に後述するやうな色々の加工を施して、其の生きた數字群の蠢きや、叫び聲や、踊る足どりをはつきりさせる爲めに統計學は數學の助けを藉りる。正に數學の助けによつて統計學は長年月に亘る人口増加の法則や、小賣商の賣上高の毎月繰り返される變動などを明瞭にすることが出来る。けれど、それは飽くまで手段として助けを藉るのである。複雑な數學を藉りないでも濟む處は敢へて藉りる必要はない。それに厄介な數學がつきまといふからと言つて、吾々は決して統計學を嫌ふべきではない。むしろ厄介な小むづかしさは吾々の理解の不足を意味するものではないか。先に述べた様に、統計が吾々の日常生活の學問であるとするれば、吾々は自ら進んで統計學を理解し、それにつき纏つて居る厄介な小むづかしさを一掃すべきではなからうか。

尙、最後に注意して置かなければならないことがある。統計學が前述のやうに種々と數學の力を藉りるといふ所から、統計學を數學と同等視したり、統計學は數學の一部門であると考へたりする誤りが得て起き易い。成る程兩方とも同じやうに數を取扱ふし、又數に關する取扱ひ方を問題にして居る。けれど統計學と數學とは全く別なものである。二つは互に全くちがつた世界に住んで居る。此事は統計學をよく理解する上に極めて重要な點である。數學で取扱ふ數は其背後に何も無い純粹な數、謂はゞ無名數のやうなものである。ところが統計學ではそんな數は決して扱はない。統計學で扱ふのは何時も何か其の背後にある數、言ひ換へれば何かに就いて勘定した數である。東京市の人口三百萬とか今年の米の收穫高何千萬石といふ風に何時も吾々の周圍に實際に在る何かに就いての「數」である。よく世間で「2に2を足して何時も4になるとは限らない」といふ話を聞くが、統計學で扱はれるのは正にさう云ふ世間の數である。だから、數學がすべてに狂ひのない完全な、謂はゞ神佛の世界のものだとすれば、統計學は誤謬や不完全さに充滿した此世のもの、吾々人間世界のものなのである。故に後にも述べる如く統計學が數學の力を藉りて來ても、それは純粹に數學の世界で働く様には働かない。此處に統計學の悩みがあると共に又その本來の面目もあるのだと思ふ。

以上を要するに、統計學は決して我々から敬遠さるべきものではない。それは完全無缺のために却つて親しみ難い天國のものでもなければ、砂を嚙むやうな單なる記録の灰色地獄のものでもない。寧

それは此世のもの、吾々人間のものである。それは生血の脈うつた煩惱具足の数の學問である。吾々にもつともつと親しまれていゝ學問なのである。

第二節 大量觀察

前節に於て吾々は統計學が數を通して吾々の周圍の諸現象を眺め、吾々の日常生活を観る學問なのを知つた。であるからそれは決して死灰の如き記録の學問ではないと考へて來た。然らばどうしてさうなのか。統計はどうして死灰たるを脱して生の息吹を獲るのだらうか。

同じく數を通して吾々の周圍を観るにしても、そこには二つの自らちがつた觀方がある。例へば一國の外國貿易に就いても、今月の輸出入は幾ら幾らださうだと、唯かう言つてしまへばそれまでである。併し確かにそれも一つの見方である。それは物を一つ一つ、ばらばらに解體して觀る見方、其の一つ一つだけに就いて孤立的に觀る見方である。此場合その孤立した一つに對して特別のねうちを附し、特別の興味を以て望む時は別問題であるけれど、一般にさういふ見方をとる場合、そこに現はれるのはかの死灰の如き數字の記録であらう。砂を噛むやうな支離滅裂な數字であらう。隣りの家で子供が生れたとしても、斯ういふ見方で觀る時は、唯一人の人間が生れたこと、區役所の戸籍面に一つの出生が記録されることに過ぎなくてはなからうか。數の世界はこんなにも味氣ない見方を誘ひ易い

ものだ。けれども吾々は數を通しての見方にもう一つの、もつと潤ひのある見方のあるのを忘れてはならない。先の外國貿易の例にしても、その連月の狀況を順次に悉くおき並べて之を一年全體として、否更に數十ヶ年に亘る全體のうちに觀る時は、今迄死灰のやうに押し黙つて居た毎月の貿易記録が忽ち蘇つて聲を發し、吾々に向つて其國の貿易の消長や、輸出入間のバランスの變動や、はては其國經濟界一般の浮き沈みをも雄辯に如實に語り出すであらう。隣家の子供の出生も之を廣い見地から、例へば一年間の國全體から見れば、一軒一軒としては偶然としか思はれない出生が全體としては一つの眼に見えない法則に支配されて居るのを知つて驚嘆せざるを得ないだらう。即ち季節による出生の割合とか或は生れた子供の男女別比率とかは何と驚くべき規律を吾々に見せて呉れて居るところとだらう。

數を通しての斯ういふ物の見方、詳しく言へば一つ一つを孤立的に觀ず全體として大きな群れとして觀る見方を大量觀察と稱して居る。統計は此大量觀察に基づく數字である。此の大量觀察の方法によつてこそ統計は死灰の數字たるを脱して生きた數字となり、躍動する數字の群れとなり得るのである。實に此の大量觀察こそは統計學の核心であり、生命であり、其生得の武器であるとも言ふことが出來よう。

併し上のやうに言つただけで問題が片づいたのでは決してない。むしろ問題は是からである。唯全

體として観るといつても大きな全體もあれば小さな全體もある。一體どこまでを大量と言ふのだらうか。眞の意味の統計とは何處までを指すのだらうか。此問題は頗る面白い重大な疑問であるが、その疑問を深めてゆくことは本書の範圍を越える。だから此處では唯、大量觀察の働きをよりはつきりさせるために、かの白耳義の有名な統計學者アドルフ・ケトレー（一七九六—一八七四）の用ひた巧妙な比喩を紹介するに止めよう。

大きな黑板の上に白墨で一つの圓が描かれて居る。今この圓周の一ヶ所をば黑板に眼を押しつける位にしてちつと見詰めるものとする。此場合、其圓が如何に上手に描かれてあつたとしても、見えるのは唯亂雑に分散する白墨の白い點ばかりであらう。ところが今少しく黑板から眼を離して之を眺める時は描かれた圓のもつと澤山の部分が眼に入つて來ることとなり、始め亂雑に分散して居た白點が一定の孤線の上に平等に振り當てられて居るのが分るだらう。然るに更に遠く離れて之を眺めるならば一つ一つの白點は遂に見えなくなつて、一つの滑らかな白い圓周が黑板の上に現はれるだらう。

此例にも見るやうに、大量觀察は近視を捨て、遠眼に就く態度である。小の虫をも殺さずして而も大の虫を益々生かす心意氣である。統計學は實に、此大量觀察法を己が獨特の法杖とし、人間生活を繞る一切の現象の法則を達觀しようと努力する。

然らば大量觀察のさういふ働きは一體何處から出て來るのだらうか。何故大量觀察による時は一つ一つをばら／＼に眺める時と違つてさうした働きが現はれるのだらうか。是は次いで起る當然の疑問にちがひない。

大量觀察の持つ此働きの根源は大數法則と稱せられる一つの原理である。従つて又、是は統計學の依つて立つ所の究極的な原理である。此大數法則を詳細に研究することは或ひは常識の範圍を越えるかも知れない。併し吾々は淺薄な常識ではなく堅實な常識、確信ある常識を求め度い。だから吾々は統計學の眞の姿を見届けるために暫らく此根本原理たる大數法則を検討してみよう。

これには豫め所謂確率論の知識が必要になつて來る。確率論は普通、公算論とも蓋然論とも稱されて居る。今こゝに一つの銅貨があるとする。其の銅貨を手につかんで床の上へ投げ出す時、一體、表が出るだらうか裏が出るだらうか。それは神ならぬ身の知る由もあるまい。けれど是だけは言へるであらう。無意識につかんで投げた銅貨が表になり易いか裏になり易いか、言ひ換へれば表の出さうな割合と裏の出さうな割合と何れが大きいか。勿論この場合、兩方の割合は等しい。表も裏も半分づゝ $\frac{1}{2}$ づゝの割合で出さうである。此の $\frac{1}{2}$ といふ割合を表の出る（或ひは裏の出る）確率と言ふ。確率は時に公算とも、確からしさとも、蓋然率とも稱されるが、要するに或る一つの事がらが豫め起きさうな割合のことである。骰子を振つて例へば一の目の出る確率は $\frac{1}{6}$ である。二の目の出る確率も $\frac{1}{6}$ である。三の目も $\frac{1}{6}$ である。かうして一から六までの目の出る確率を合計すれば1に

なる。と言ふことは、骰子さいころを振れば、屹度いどどれかの目が出るといふことを表はして居る。確率が1だと
いふことは「必ず」を表はし「確實」を意味して居る。従つて確率 $\frac{1}{2}$ は半分だけの「確からしさ」
を示して居る。斯ういふ確率を、もつと複雑な場合にまでも數學の力によつて求めようとするのが確
率論である。

確率論によつて求められる確率は物により事によつて豫め定まつて居るものである。銅貨を投げて
表の出る確率は、銅貨に裏表の二面しかない以上、きまつて $\frac{1}{2}$ であらう。それは銅貨を實際投げ
て見ずとも分つて居る。其の確率は吾々の経験と關係がない。故に通常この様な確率論によつて計算
された確率を先驗的確率とか客觀的確率とか名付けて居る。けれど此處で注意しなければならぬこ
とは、銅貨を投げて表の出る（先驗的）確率が $\frac{1}{2}$ だからと言つても、實際銅貨を投げると常に一
回おきに表が出ると言ふのでもなく、二回投げらうちに屹度一度は表が出ると言ふわけでもない。第
一回は裏、第二回も裏、第三回も裏といふやうな事も起り得ようし、又、最初のうち續けざまに表ば
かり起きる場合もあるだらう。先驗的確率が $\frac{1}{2}$ であると言ふ眞の意味は斯うである。即ち投げる
回数を非常に多くする時は實際に表の出る割合が大體 $\frac{1}{2}$ （先驗的確率）に近くなるといふのであ
る。今、一つの銅貨を取つて實際にS回だけ投げて見たとする。其の結果、表の出たのがM回だつた
とする。この場合實際に表の出た割合 $\frac{M}{S}$ （之を前の先驗的確率に對して經驗的確率と稱する）は

投げた回数Sが非常に大きいならば其の先驗的確率たる $\frac{1}{2}$ に極めて近い値をとると言ふのであ
る。ピュフォンといふ人が實驗した結果によれば銅貨を四〇四〇回投げた中、表は二〇四八回裏は一
九九二回出たと言ふ。是は大體五一對四九の比で表と裏とが出たことになり、全體に對して表の出た
割合は $\frac{51}{100}$ 、即ち $\frac{1}{2}$ に極めて近い。投げる回数をもつと多くすれば、もつと $\frac{1}{2}$ に近づくだ
らう。骰子さいころを振つて一の目が出る確率が $\frac{1}{6}$ であるといふことも同様な意味である。

さて大數法則に戻らう。もう此處まで來ればわけはない。大數法則とは今述べて來たやうな一種の
原理を指すのである。即ち或る事柄の起る回数Sの割合は、之を觀察する回数nなるにつれて其の
先驗的確率に接近するといふ原理である。更に言ひ換へれば、觀察回数nの極めて大きいときは經驗的
確率と先驗的確率とは大略一致する傾向を有つといふ原理である。吾々が大量觀察を行ふ際に働き出
すのは他でもない此大數法則なのである。勿論、吾々が統計學で大量觀察を行ふ場合には銅貨や骰子さいころ
を投げる場合の様に確率論によつて其先驗的確率が豫め分つては居ない。それが分つて居ないからこ
そ大量觀察を行ふ必要があるのである。もし始めから、恰度銅貨や骰子さいころの場合のやうに其の先驗的確
率が分つて居るとしたら、何もわざわざ大量觀察を行つて先驗的確率を窺ひ知らうとする必要はな
い。吾々が或る現象に就いて大量觀察を行ふのは、つまり恰度銅貨や骰子さいころの場合とは逆に大數法則を
利用して實際の數多くの觀察によつて知り得た經驗的確率から未知の先驗的確率を窺ひ、それによつ

て其の現象の奥に横たはる法則、其現象を支配しつゝある原因を尋ねようが爲めである。次第に眼を遠ざけて黑板の白圓周を見つげ出さうとする爲めである。

此處に一つの具體的な例を示さう。大正元年に於ける我國の出生兒總數の中、男兒は女兒に比べて幾らか多く生れて居る。其の比は女兒一〇〇に對して男兒一〇四・一であつた。此の比は一種の經驗的確率又はその變形と見ることが出来るし、而も日本全國の出生に關する大量觀察の結果であるから大數法則に従つて是は大約男兒出生の先驗的確率を表はして居ると考へることが出来る。其證據には大正元年に續く連年の出生割合を見よ。

大正 元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年
一〇四・一	一〇四・四	一〇四・九	一〇四・二	一〇四・三	一〇四・二	一〇四・三	同	同	同	同	同	同	同
一〇四・九	一〇四・五	一〇四・五	一〇四・〇	一〇四・四	一〇四・二	一〇四・二	一〇四・二	一〇四・二	一〇四・二	一〇四・二	一〇四・二	一〇四・二	一〇三・五

大量觀察に依る此の事實を前にして、吾々は唯驚嘆するばかりである。此の場合、先驗的確率は常

に一定であり、従つて出生の男女別を支配する所の事情が不變であることが分るであらう。恰も骸子さいこの面が常に變らず平等な六面であるやうに。

現象を支配する事情にして一定ならば其の先驗的確率は一定にさだまる。事情が變化すれば、それも次第に變つて来る。併し變つて來るとは言ふものの、それは變つたなりに定まるのである。先驗的確率であることには變りがない。大量觀察はいつでも實際の觀察によつて知り得た經驗的確率から此の先驗的確率を推知することを目的とする。そして此先驗的確率は吾々に其現象を支配して居る事情、或る意味で法則ともいへるところのものを推察させて呉れるのである。統計學は此大量觀察を己が獨特の武器として持つて居るのである。統計學はいつでも此の大量觀察を通して吾々人間をめぐる諸現象の通則を窺ひ知らうと努力する、學問なのである。統計學で取扱ふ多くの數字即ち統計には、たとひ其の表面はどう見えても其根柢深く以上の様な大數法則の考へが常に嚴として横たはつて居るのである。

併し乍ら、最後に述べなければならぬ注意がある。統計學は大量觀察によつて現象を支配して居る法則を見出さうと努力する。けれど我々の周圍の現象はそんなに完全な大量觀察を許すものではない。吾々には何處までを大量といつてよいのかさへ分らない。だから如何に大數法則が働いたとしても經驗的確率と先驗的確率との間の距離は可成りに大きい。従つて統計學の努力は普通の場合完全に

は報ひられない。此點にわが統計學の根本的な悩みがある。統計學は大量觀察の力によつて灰色の記録の學から救ひ出されると同時に、以上のやうな現實のしがらみのため、かの青色に透徹した數學にはなり得ないのである。それにも拘はらず、此人間の世界から彼の完き神佛の世界を望み見ようとする統計學の努力は實に尊い努力と謂はなければならぬだらう。

第三節 統計方法

統計學は吾々人間の日常生活に就いての色々な事實を數字の力によつて判然と示して呉れ、而も大量觀察といふ武器によつて其の數字の中から何かしら法則めいたものを見出さうとする。是が以上の二節の説く所であつた。それによつても分る通り、統計學は物事を數字的に而も大量的に觀察して其の物事の性質をはつきりさせようとする學問なのである。従つて統計學の際立つた特徴はさういふ研究方法にある。統計學者の中でも或る者は統計學を以て人間社會を研究する所の一種の社會學であるとし、或る者は之に反對して統計學は單に人間社會のみならず自然現象をも取扱ふところの一つの獨特なる研究方法に他ならぬと主張して居る。けれど孰れにしても統計學の特徴とする所は其獨特なる方法にあるのである。

此處に謂ふ所の獨特なる方法とは前節に述べた大量觀察を基礎とし中心とすること勿論である。

が、大量觀察が總べてなのではない。大量觀察によつて吾々は或る現象に就いての一群の數字を手に入れる。そして是等の數字が大量觀察の結果である限り、前述のやうに大數法則が働いて其處に何か法則めいたものが浮かんで來るわけである。否、精確に言へば、何かさうしたものが現はれて來る可能性が生ずる譯である。吾々は此可能性を利用して、それらの數字の上に色々と加工を施し細工を加へて、其現はれる筈の法則をハツキリ現はさうと努力する。さういふ努力も亦、統計學で研究される所である。だから統計學の特徴とする獨特の方法とは先づ大量觀察法、次に之と並んで之を基礎とした種々な解析方法、此兩者の綜合したものを指すわけである。此綜合を吾々は統計方法と呼んで居る。併し通常は、大量觀察によつて作り出された數字即ち統計を種々と分析して利用するところの解析方法を統計方法と呼び、此解析方法によつて物事を研究することを統計的研究と呼んで居る様である。本書で直接必要なもの寧ろ此解析方法なのである。此の意味での統計的研究は最近極めて著しい進歩を示した。複雑な數學の助力によつて解析方法は著しく發達し、其揚句は後章にも述べる様に統計的研究によつてあの込入つた經濟界の景氣不氣を豫測しようとする企てさへ現はれるに至つて居る。だが吾々は統計方法を濫用してはならない。むやみに剃刀かみそりを振りまはしてはいけない。統計方法の濫用は屢々吾々を途方もない迷路の中へ引き込んでゆく。統計方法の根柢には常に大量觀察がなければならぬことをゆめ、忘れてはならぬ。此事を注意するためにこそ我々は前の二節の遠路をわざわざ

さ迂回して来たのである。前二節で述べられた考へを常に思ひ浮かべながら吾々は統計的研究を行ふ必要がある。以下、統計的研究に普通用ひられる極く一般的な解析方法に就いて其の大略をスケッチして見よう。

先づ吾々は大量観察によつて或る現象に就いての一群れの数字を手に入れる。此の一群れの群らがり方は、同じ時に於ける同種現象の集りでもよければ、又一つの現象の時間的経過に沿うた数字の集りでもよい。例へば東京市に於ける小賣商（恐らく非常な數に昇るであらう）の或る一日の賣上高を各商店に就いて調べた数字の群れでもよければ、或る一軒の店の毎日の賣上高を例へば一年間だけ調べ上げた結果でもよい。後の様な場合の数字を時の順序に配列したものは一般に時系列と呼ばれ、其の分析方法は最近素晴らしい發達を遂げて居る。兎もあれ斯うして獲た一群の数字は最初の調査の計畫に従つて一定の隊伍を整へて居る場合が多い。若し隊伍なき時は先づ之を與へなければならぬ。例へば、先に擧げた東京市の小賣商の賣上高の場合の数字なら、小賣商の種別によつて分類され、各々の種別の合計ぐらひは出て居ようと言ふものである。そして大體、此手續きまでを大量観察法の領域と言ふことが出来よう。

さて、是からが統計解析法の始まりである。通常吾々は原數のまゝにすらし、と整列した数字群に満足しない。其群れ全體の構造をもつと端的に判然と知らうがために、其の原數の上に色々な操作を加

へる。例へば東京市の小賣商の一日賣上高を原數のまゝ、小賣品種別にした分類を、先づパーセント（%）によつて表はして全部の小賣商の總計賣上高一〇〇%の中、例へば食料品小賣商の分は三〇%といふやうに全體並びに他の部分との關係を一目瞭然たらしめたり、次に各小賣種別に就いて其種別に屬する小賣商の一軒あたり平均賣上高を計算することによつて各種別間の繁盛振りの比較を容易ならしめたり、更に是等の數字關係を色々な形式の圖表に描き換へ我々の眼に直接訴へて其の數字群の現はす現象をより判然と示したりする。斯のやうな初步的な、とはいへ極めて重大な解析方法は、此の例でも見る通り、大體、比例數に依る法、平均法、及び圖示法の三者である。是等の初步的な方法は其計算が簡単な加減乗除のみを以て足りる割合に其効果は極めて大きいばかりでなく、後述するやうな種々の、もつと複雑な解析方法の根柢に横たはる基礎的な方法である。以下項を分つて此三者を簡単に説明しよう。

第一項 比例數

パーセントと言へば誰でも知つて居よう。パーセントは比例數の代表的なものである。比例數は原數（或ひは絶對數）の缺點を補はうとする一種の努力である。

統計數字は普通それを單獨に絶對數のまゝ示すよりも、それを他の數字と比較しつゝ見ることが重要である。否却つて比較することによつて始めて統計は價值を持つて來るのである。故に、比較は統

計學の魂であるとさへ言はれて居る。此重要な比較を行ふに當つて絶対數のまゝでは困難を伴ふ場合が多い。新聞などによく發表される銀行の貸借對照表貸借對照表が其好例であらう。あの、絶対數のまゝ並べられた六、七桁の金額を見て、果して吾々は直ちに其銀行の内容をはつきりと窺ひ知ることが出来るであらうか。

絶対數は普通、金額の場合なら一圓といふ單位で計られて居る。だから絶対數同志の比較は直接その二つの比較ではなくして、其の單位（一圓）を通しての間接の比較に他ならぬ。之を直接に比較するためには其の廻り遠い單位を捨てる必要がある。此働きをするものこそ比例數なのである。比例數は數と數との直接の接觸である。そこには絶対的絶対的な單位がない。故に相對數である。一數を以て他數を除した數である。普通、此の場合に百分率パーセントが用ひられる。（稀には千分率パーミルが用られることもある。）パーセントの計算法は言ふ迄もなく次式による。比較される方の數(A)に對して比較しようとする方の數(B)の百分率を求むれば、

$$A : B = 100 : x$$

$$x = \frac{B}{A} \times 100$$

一數を他數で除するといつても其處に二通りの區別がある。それに従つて比例數も形式的に二種類となる譯である。即ち、

- (1) 分子と分母とが全く互ひに獨立して居る數の場合（即ち對立比）
 - (2) 分母の中に分子の數も含まれて居る場合、即ち全體を分母、部分を分子とする場合（構成比）
- (1)の對立比の例としては面積と人口との比例即ち人口密度とか、結婚數と離婚數との比即ち離婚率とかをも擧げることが出来るし、又商業統計の方面では經營費と収益高との比率其他貸借對照表貸借對照表や損益計算書の各項目間の諸比率などを擧げることが出来る。是等の比率の重要さは此處に喋々するまでもない。だが對立比の中で特に重要なのは其特殊の場合である所の指數指數である。是は相對立して並んで居る多くの數の中の一つを基準ベース一〇〇とする對立比である。假りに次のやうな數列があるとし例へば其の始めの數を一〇〇として指數に換算すれば、

(原 數)	(指數)
15,000	100
16,500	110
17,200	115
18,900	126
17,500	117
15,300	102
14,800	99
14,600	97
14,200	95

〔計算例〕

$$15,000 : 100 = 16,500 : x$$

$$x = \frac{16,500}{15,000} \times 100 = 110$$

勿論、何處を取つて基準ベース一〇〇としてもよいし、或る場合には數個の數の平均を基準ベースとすることもある。指數は或る現象の歴史的關係を知る上に特に重要である。種々な指數があるけれども其中最重要なのは所謂物價指數である。是に就いては第二章に詳述する。

(2)の構成比の例としては人口總數を一〇〇%とし其うち男が五一%、女が四九%などと表はす場合

をも擧げることが出来る。此場合、若し基準を女にとり第二節の終りの例の様にならば女一〇〇に付き男一〇四と表せば是は(1)の對立比になるのである。商業方面に用ひられた構成比としては所謂資本構成比など其好適例であらう。是に關しては尙第四章經營統計で述べようと思ふ。

第二項 平均

平均は日常の會話のうちにもよく出て来る言葉である。此級の平均點は何十點だとか、あの品物は一日平均どの位賣れるとかいふ風に漠然ながら一般によく知られた觀念である。此平均の觀念は統計學では實に重大な役目を演ずるのであつて、統計學は平均の學なりともいはれて居る程である。

平均は或る大量の中心點を一個の數字を以て表はさうとする努力である。表はされた中心點を平均値(中數値或ひは單に平均)と稱する。平均値は其大量の中心的な値を表はすことによつて其大量の代表者となり、典型となる。故に平均値を時にタイプとも呼ぶ。

統計學で普通用ひられる平均に大體次の四つがある。即ち算術平均、幾何平均、中央値、並數。

(1) 算術平均

通常、平均と呼ばれて居るのは此算術平均のことである。それほど是は廣く知られ、又それだけ多く用ひられて居る平均である。實例を以て其求め方を示せば、

月曜日	高上賣	¥	354.-
火曜日	同		321.-
水曜日	同		298.-
木曜日	同		275.-
金曜日	同		281.-
土曜日	同		368.-
日曜日	同		147.-
計	7日	¥	2044.-

の一週間に於ける
 一日平均高上賣
 (算術平均)
 $\frac{2044}{7} = 292$ 圓

要するに總計と項數とさへ分つて居れば其の割算で算術平均は求められる。

ところが次の様な場合は如何だらう。假りに米が百俵あるとする。その中三十俵は一俵三十圓の時、二十俵は二十五圓の時、残りの五十俵は二十圓の時買ひ入れたものとすれば、平均一俵幾らになるだらうか。此の場合、

$$\frac{30 \times 25 + 20 \times 20}{3} = 25$$

と計算して二十五圓が平均値段だとするのは誤りである。正しい平均を求めるためには、

$$\frac{30 \times 25 + 20 \times 20 + 50 \times 10}{100} = 24$$

と計算しなければならぬ。此のやうに、平均しようとする各項へ重み(此の例では俵數)を乗じて合計し、之を重みの合計で割つて求めた平均を秤量算術平均と言ふ。之に對して始めのやうな唯の算術平均を單純算術平均と呼ぶ。物價指數の作製の際にも秤量算術平均を用ひることがある。

(2) 何幾平均

單純算術平均の時の數字を其のまゝ用ひて幾何平均を求めると次のやうになる。

$$\sqrt[7]{354 \times 321 \times 298 \times 275 \times 281 \times 368 \times 147} = 231.8 \text{mm}$$

算術平均に比べて斯んなにも計算が面倒である。通常之には對數表を用ひて計算する。算術平均と孰れがよいかは場合によつて異なるけれど物價指數に用ひられた場合については第二章に論じてある。幾何平均にも重みを附した秤量平均がある。

(3) 中夫値——又はメデイアンとも呼ばれる。

5, 5, 5, 6, 6, 6, 6, 6, 6, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 8, 8, 8, 8, 8, 8, 9, 9, 10. 是は一人の勞働者が一ヶ月(三十一日)の間働いた毎日の能率を或る標準で測つて之を大きさの順に並べたものである。此大きさの順に並べられた數の中央、即ち端から數へて第十六番目の數、即ち7を此勞働者の能率の中央値と言ふ。若し項の數が偶數であれば、即ち例へば三十日の月であるとすれば第十五番目と第十六番目の數字の算術平均を中央値とする。斯のやうにして中央値は實在する中央の値である。此の點前の二つの平均と性質を異にする。而も計算は殆ど不要な程簡單である上に、極端に大きな或ひは極端に小さな項の影響を受けないので、可成り屢々用ひられて居る。たゞ數學的な取扱ひの出来ないことは残念である。

(4) 並數^{なみすう}。

例へば軍隊で軍服を豫め數多く作つておく爲めに甲種合格者の平均身長を知らうとする。此のためには算術平均や幾何平均では不適當である。何となればそれ等は抽象的な、實際にはない値を取るの^で、さういふ平均身長に合はせた軍服は恐らく誰にもびつたりと適合しないだらう。然らば中央値^{メディアン}では如何だらう。是は成る程實際に存する値ではあるけれど、此中央値に當るものが極く少數しか居ない場合もあり得るといふ憾みがある。斯ういふ際の平均値には並^ミ數^ミを選ぶがよい。並に數、一名モ^モードは多數の中で最も頻繁に現はれる數である。だからモードに合はせて作つた型は最も多くの人に適合するだらう。尤も、實際の大量の場合には算術平均も幾何平均もメデイアンもモードも大體に於て等しい値をとる。

以上四つの平均の他にも尙、例へば調和平均とか反調和平均とか或ひは意味の少し變つた所では四分位數とかがあるけれど、是等はあまり用ひられない様であるから此處には説明を略さうと思ふ。更に平均に關聯して散布度(即ち平均された各値が平均のまはりに如何様に配列して居るか、換言すれば代表値である所の平均がどれだけ代表値の役目を果して居るか(の程度)の問題がある。よく用ひられる散布度測定法には標準偏差とか平均偏差とかがあり、就中標準偏差は算術平均と共に統計解析法の基礎を形作るといはれる程、統計學上重要なものであるけれど、専門に亘るのを恐れて此處では唯

さういふ方法のあることだけを紹介しておくことにしよう。

第三項 圖示法

以上の諸手段は相對數であれ平均數であれ、すべて數字として記述され、數字の形のまゝ吾々に迫つた。それは絶對數の缺陷を補つて餘りがあつた。方法としてのそれ程重大な役目をそれらは演じて來た。けれども此處には更に、益々それらの功績を發揚せしめ、畫龍點睛の感あらしめる所の一つの技術がある。曰く圖示法、比例數や平均數によつても數字間の關係は遙かに把み易くはなつた。けれど圖示法は吾々の視覺に直接訴へて益々容易にそれを把ましめる。従つて圖示法は統計の大衆化にとつて動かし難い最高手段である。

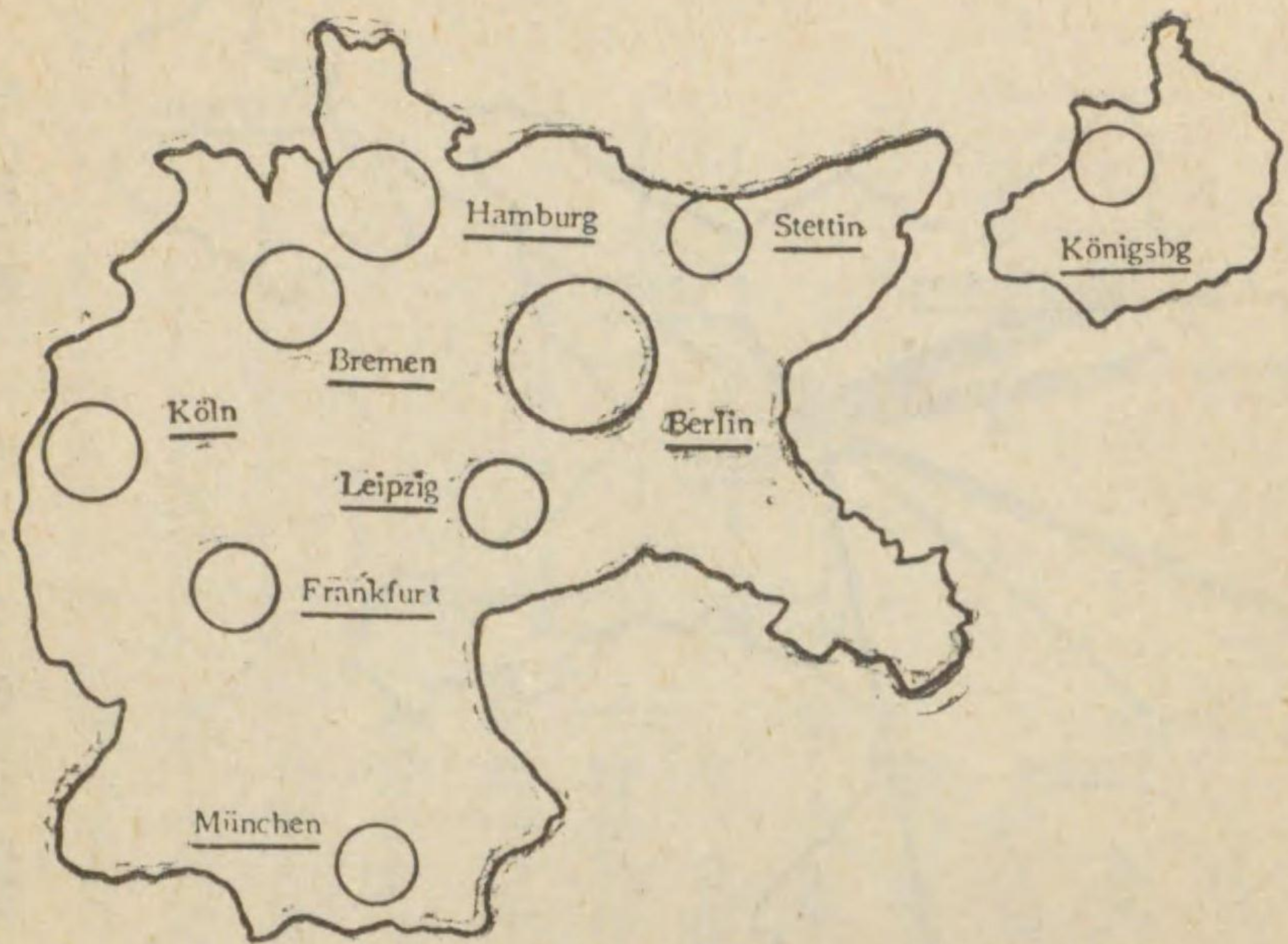
圖示法にも其種類は數多ある。唯あまり變化を好んで複雑な圖示を選ぶことは禁物である。一見直ちに其の數字關係を把ましめるのが其の目的である以上、圖示法には成るべく簡単な圖を選ぶがよい。

普通用ひられるものに次の様な種類がある。

(1) 形態圖示法

是は統計數字の大小比較を物の繪姿の大小によつて表はさうとする。列國の軍備を比較するのに大小さまざまの兵士の姿を描いて之を示して居る圖を展覽會などでよく見掛けるではないか。是は大い

第一圖 各市に於ける小賣總賣上高



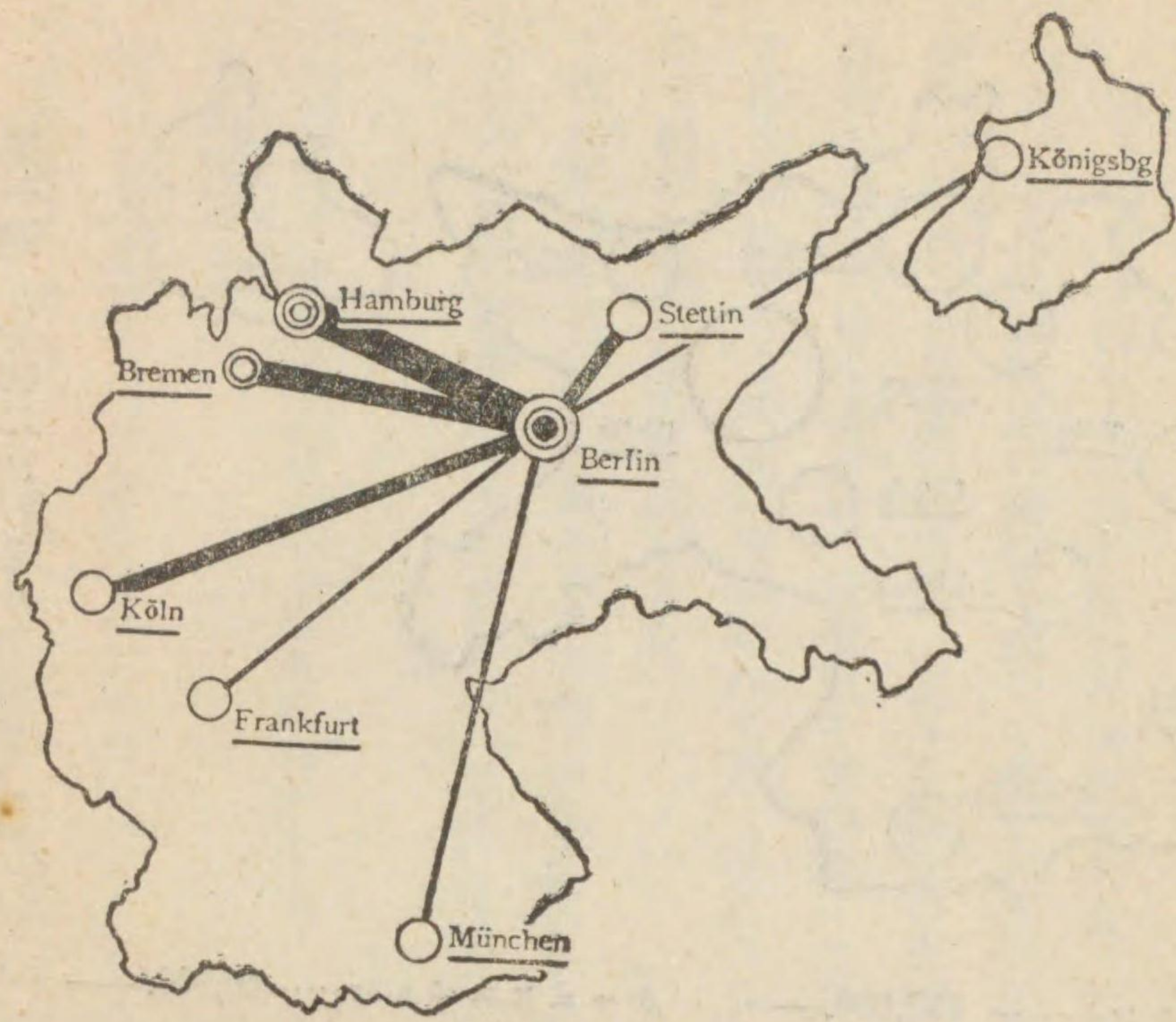
ベルリン..... 150,000.—	ケーニヒスベルヒ.....40,000.—
ブレーメン..... 100,000.—	ライプチツヒ.....60,000.—
フランクフルト...60,000.—	ミュンヘン.....50,000.—
ハンブルグ..... 120,000.—	ステツチン.....50,000.—
ケルン.....80,000.—	

に大衆向きとでも言ふのであらうが、不精確たるを免れないのは當然である。描かれた兵士の身長によつて各國の兵備の状態を示して居るのか、それとも又身體全體の面積——何と奇妙な言葉ではないか——で之を表して居るのか。畢竟ピクトグラムは大衆に阿り過ぎた圖示法であつて成るべく避けるに越したことはない。強いて之を用ひる時には其繪の基礎になつて居る數字を附記しておく必要がある。

(2) 統計地圖

是は地圖を臺として其上に色

第二圖 ベルリンよりの貨物輸送

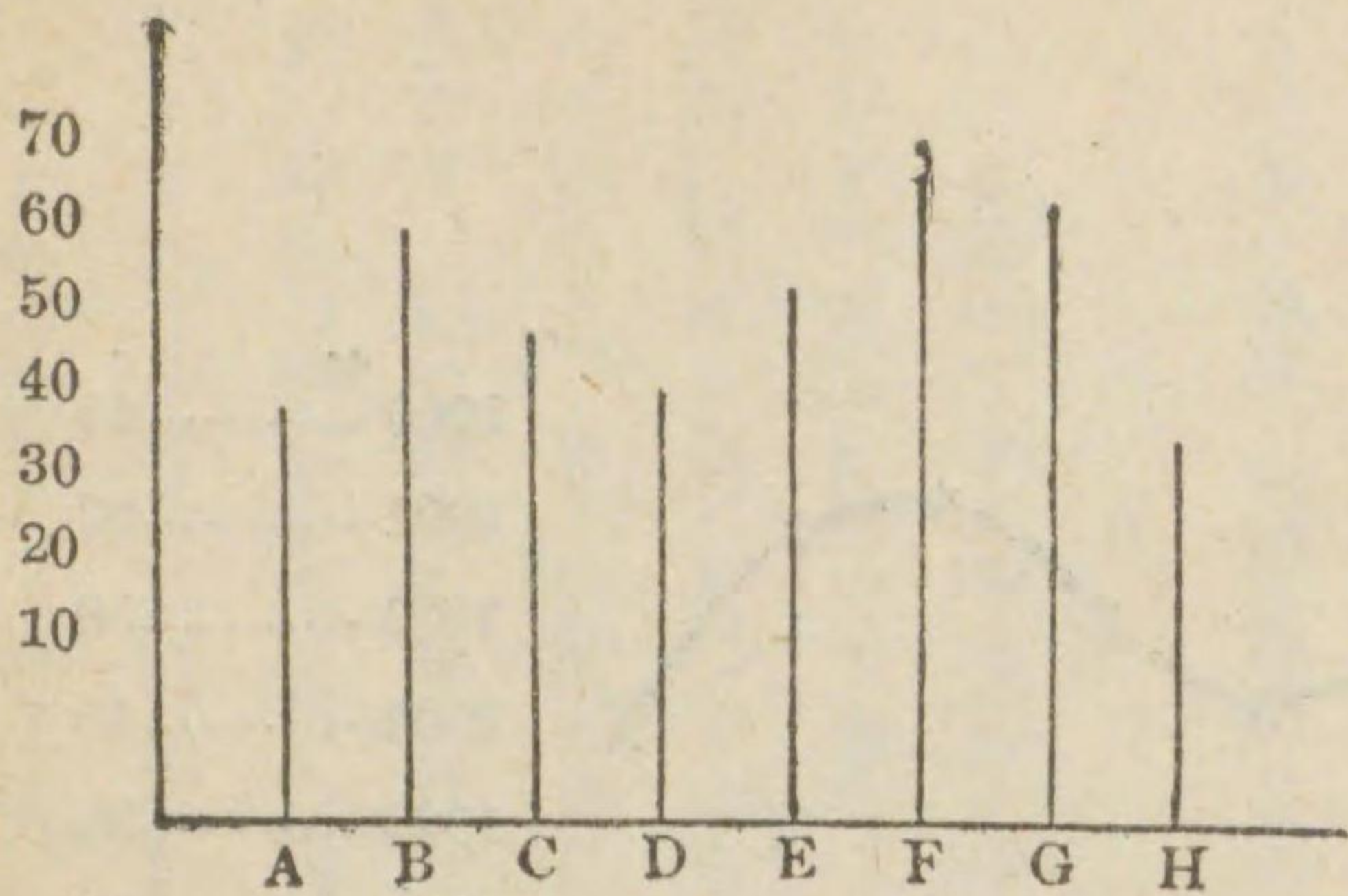


ブレーメンへ	300	ケーニヒスベルヒ	50
フランクフルト	100	ミュンヘン	50
ハンブルグ	500	ステツチン	200
ケルン	150		

採その他の工夫を用ひて統計數字を圖示する方法である。従つて地方別、國別などの場所的統計に限つて用ひられる。色採の濃淡を以て各地方の人口密度を表はすのは通常見られる所である。商業方面に應用されたカルトグラムの二三の例を次に示さう。第一圖は圓の面積の大小により、第二圖は結びつけた線の太さによつて夫々の數値の大小を表はし、一見して比較を便ならしめ、全體の數字關係を容易に理解せしめて居る。

(3) ダイアグラム 幾何圖示法

A	40
B	60
C	50
D	45
E	55
F	70
G	65
H	40



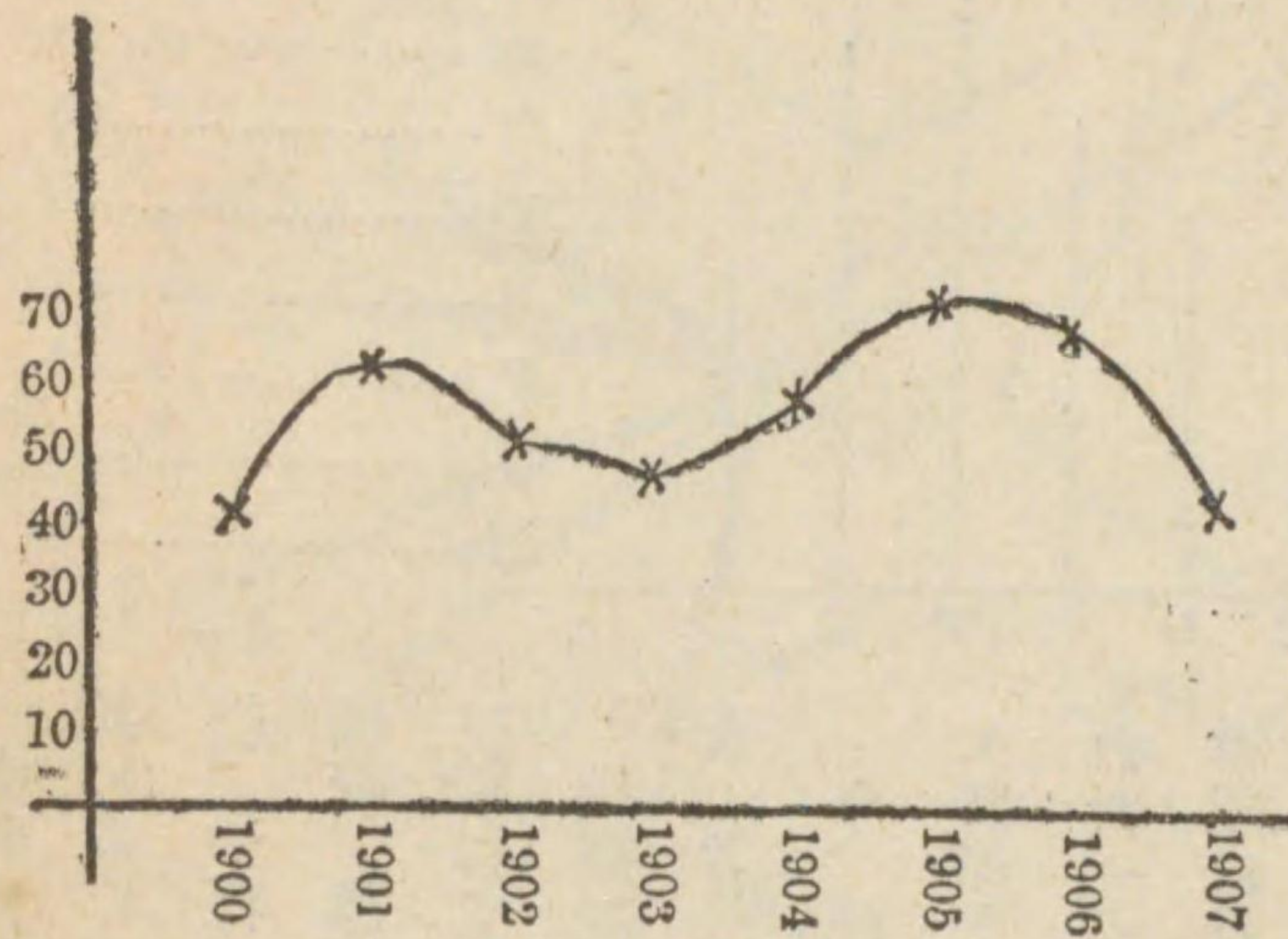
是は幾何學的に正確に描かれた圖形を以て圖示する方法であつて其ために普通、方眼紙を用ひる。幾何學の圖形の基礎としては點、線、平面、立體などがあるから、それに従つてダイアグラムにも點圖表、線圖表、面圖表、體圖表などがあるけれども、通常有効に用ひられて居るのは線圖表と面圖表である。

線圖表は直線の長さによつて數字關係を表はすものであつて、通常、方眼紙に上圖のやうに描かれる。

今、此横軸を以て時の經過を表はすものとすれば、線圖表によつて時參列の數字が表はされ得ることになるし、更に其の際、立てられた一つ一つの直線の上端を結びつける時には其處に所謂統計曲線が現はれる。(次頁の圖)

此統計曲線は爾後の複雑なる統計解析法、特に時系列の解析法に對して研究の素地を使用する所の重要な圖示法である。線圖表に就いては尙、度數分布圖や對數圖表の取扱ひなど色々問題は残つて居る。専門書に就いて研究せられんことを俟つ。

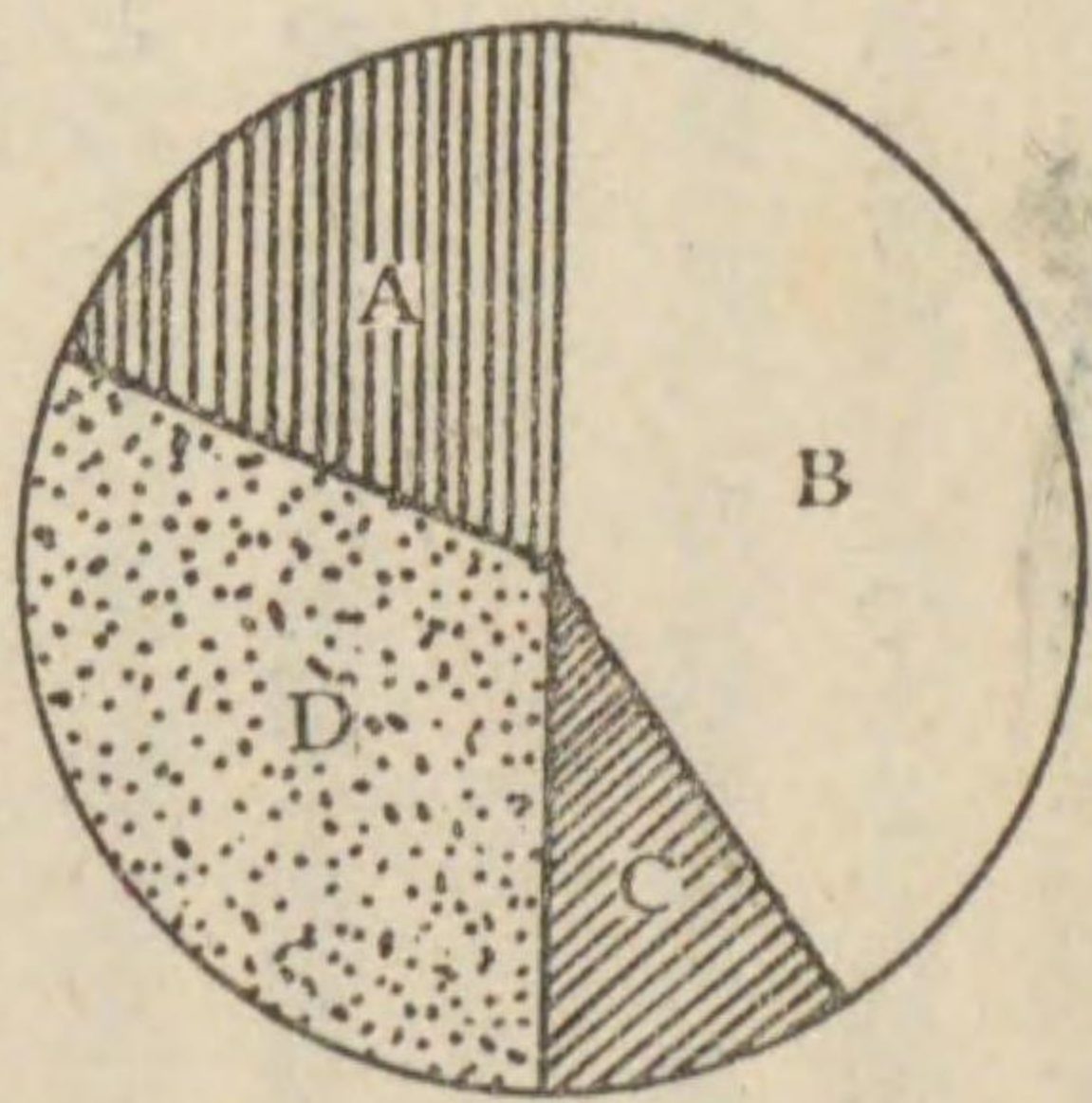
年	1900	1901	1902	1903	1904	1905	1906	1907
値	40	60	50	45	55	70	65	40



次に面圖表は幾何學的に描かれた平面の面積によつて統計數字を表示しようとする企てであつて、前掲カルトグラム第一圖に用ひられた圓は此面圖表に屬して居る。併し面圖表が主として用ひられるのは或る數字群の構成關係を示さ

甲 圖

A 商 品	20,000圓
B 商 品	40,000
C 商 品	10,000
D 商 品	30,000
全商品總計	100,000圓



うとする場合である。普通は甲圖の形式が多く採用されて居る。是をパイダイアグラムと稱する。従つて是は經營統計に於て資本構成比などの研究に盛んに利用されて居る。最近では百分率のパイダイアグラムを描くために、圓の中心角を百等分した扇眼紙なるものも作られて居る。以上極めて簡単に圖示法の大略を述べて來たが圖示法に就いてもつと深く知り度い向きには次のやうな比較的平易に書かれた好參考書が出て居る。

猪間驥一氏著 經濟圖表の見方、書き方使ひ方 東洋經濟新報社 昭和三年再版

以上に述べて來た所は初歩的な基本的な統計解析法である。統計學はそれらの基礎の上に更に數多の有益な解析法を持つて居る。その中でも特に重要なものは時系列の解析法である。統計學が興味を經濟問題に向ける様になつてから時系列の研究は殊に隆盛に趣いた。蓋し經濟問題研究の必然的な要求からであらう。吾々は第五章に於て時參列解析に關する中心問題である所の景氣豫測の問題を述べるに當つて、此の時系列解析法を一瞥しようと思つて居る。

更に現代の統計學は一つの絢爛な解析法を持つて居る。即ち二つの異なつた大量間の依存關係を測定しようとする所の相關係數が是である。依存關係とは世の中によくある『一方が…すればする程他方がそれに連れて…する』といふ關係である。さういふ關係は、それが數量的である限り、すべ

て其二つの現象間の相関々係として其の程度を測ることが出来る。相関係数は今の所、統計學に於ける因果研究の、完全とは行かないまでも、殆ど究極的な最高手段である。私は此統計方法中の花形を便宜上第四章經營統計の終節に紹介するつもりである。

統計學は吾々の日常生活を取り巻く諸現象を把へ、分析し、玩味し、見透す爲めに今迄述べたやうな斯くも多くの武器を抱いて居る。而も是等すべては大量觀察を基礎としての方法であることは先にも述べた。併し乍ら吾々は完全な意味の大量觀察をさう減多に行ひ得るものではない。あの大規模な國勢調査ですら眞の意味の大量觀察であるとは言ひ切れまい。たゞ眞の大量觀察に甚だ近いと言ひ得るばかりであらう。又、物事によつては大量觀察の全然出来ない場合もある。斯のやうにして大量觀察の不可能又は困難なる場合それに代るべき簡略法が生れて來るのは當然である。以下簡單にその通常行はれる種類を述べて此の節を終らう。

① 推算 所謂一斑を以て全豹を知るの類である。けれども是が可能であるならば統計學は始めから必要がなくなつて了ふだらう。推算の一例として農作物の收穫統計を擧げるならば、先づ第一に耕地全體の面積を調査し、次の其の中で平均作柄さくがらと見られる地を選定して坪刈つぼがしを行ふか或ひは専門家の經驗によつて單位面積の收穫率を求めかして之を全面積に乗ずる。さうして全收穫高を推知しようとする。斯ういふ推算方法は極めて不健全であるにも拘らず通常家畜統計や物價統計などに屢々用ひられて居る。

② アンケート 是は精確な數字の調査を行ふ代りに専門家の意見を聽いてまはる方法である。その方が寧ろ早道だと思はれるからである。とはいへ統計學の異端邪道であることに變りはない。

③ 標本調査法 原語でサンプリングと呼ばれる。大量現象のうちから典型的と思はれる若干數だけを選び出して仔細に分析し、其の結果を始めの大量全體の判斷の一資料に供しようとする方法である。(1)の推算と外觀は相似して居るが其の内容は全く別で、確率論に基づいた相當効果ある手段である。是が適當に行はれる時は本來の大量觀察と大差なき結果が求められる。或は寧ろ逆に、通常なされて居る大量觀察は或意味で概ね此のサンプリングに過ぎないとも言ひ得るだらう。家計調査は概ね此方法で行はれるし、現に我が國では國勢調査の全體の結果を綜合發表する前に豫め『サンプリング抽象方法による』一部の結果を發表して居る。

第四節 商業統計

以上に述べ來つた統計方法を自由に使ひこなしして統計學は吾々人間の日常生活を取り巻いて居る色々な現象にぶつかつてゆく。統計方法を用ひてもよい處、換言すれば大量觀察の可能な處ならば如何なる處へでも統計學は乗り出してゆくことが出来る。だから吾々は統計學を社會事象の研究に限る必

要を別に認めない。自然現象の上にも統計學は自由に乗り出してゆくことが出来る。それが數量的に而も大量的に把へ得る限り、自然現象であつてもやはり統計學の天地である。現に人體測定學や天文學や心理學などの方面に於ける統計方法の華々しき活躍を見よ。先に簡単に紹介しておいた所の統計方法の花形、相關々係測定法などは寧ろ其方面から案出されたものなのである。

けれども統計方法は社會現象の研究に際して特別の意義と重要さを持つて來ることに注意しなければならぬ。自然現象の研究に當つては所謂實驗が之を援けて呉れる。自然科学者はフラスコやピーカーやブンゼン燈や排氣ポンプなどを具へた實驗室を持つて居る。ところが社會科學者にはそれが無い。社會現象に就いては多くの場合實驗が不可能である。そこには唯、大量觀察を武器とする統計方法が許されるばかりである。斯のやうにして統計方法は社會現象の實驗方法に當るわけである。ここに統計學の特別な任務がある。だから通常、統計學は主として、社會現象を數量的に研究する學問なりと謂はれて居るのである。

げにや、其はぢめ(十七世紀の中頃)統計學は國家に關する顯著事項の學として此世に生れ出た。それが近代的な形をとつて來た頃にも、統計學は専ら人口問題ばかりを取扱つて來た。けれど世の經濟狀態の進むと共に統計學は次第と經濟問題に興味を向けて來た。ところが、數量的な問題を中心とする經濟現象こそは實に統計方法の適用せらるべき好天地であつたのである。而も現代に至つて經濟問

題は机上の空論ではなく實際の數字によつて實證的に研究せられるの必要が痛感せられるや、統計學は殆ど専ら經濟現象の研究を行ふ學問となり了はせた觀がある。經濟統計は今や統計學の花形たると同時に經濟學に對する重大部署を受持つに至つて居る。

本書が主題として居る商業統計といふのは此經濟統計の一部である。從來、商業統計なる文字はあまり見當らなかつた。けれども此處では以上のやうな經濟統計の一部として、商業に關する統計的研究といふ意味である。言ふまでもなく商業は財の流通過程であり、通常は營利が之に伴ふ。然らば商業に關する統計的研究には如何なものを含むのであるか。

財は通常數量か金額かで表はされて居る。其の財の流通過程であるからには一切の商事は統計的研究を許すわけであり、營利を以て行はれる商事並びにそれに關するものはすべて商業統計の範圍に入り得る筈である。だから物價統計、金融統計、市場統計、倉庫統計、經營統計、貿易統計、等々すべて商業統計のうちに含まれるわけである。けれど其すべてを此小著の中に述べつくすことは出來ないし又其必要もないことと思ふから、此處では單に其うちの代表的なものを選んで之を論じ、他は賢明なる讀者の應用に委ねることとした。

第一に如何なる商業も、物々交換の昔は知らず貨幣經濟の現代に於ては、いづれも價格を中心として行はれる。そこで價格に關する統計的研究が先づ述べられなければならないのだが、個々の商品に

ついで一々其價格の研究を行ふことは固より本書のよくする所ではない。吾々は、それ故に、綜合價格としての物價指數に關して先づ論じて見た(第二章)。

營利を目的とする商業は、どんな種類のものであつても、いづれも一つの企業と觀ることが出来る。それを更にその活動の方面から觀れば一つの經營となるであらう。銀行業然り、保險業然り、倉庫業然り、運送業然り、賣買業固より然り。であるから私は、第二に商業經營統計といふ名の下には等商業形態のいづれにも共通なる形式的な研究を選んだ(第四章)。それは何の業別にも屬さない。又一つの實在經營に就いての具體的な研究でもない。唯、一般に經營統計は如何に研究さるべきかに就いて、中味のない空箱のやうな形式的な統計常識ばかりである。中味は讀者自らの研究によつて充たして頂き度い。けれど此事は統計學といふ學問の性質から來るものではなからうか。

第三に選出したのは外國貿易統計である(第三章)。個人個人の經營や個々の會社が國內とする取引に對して、外國貿易は國と國との取引、即ち國民經濟と國民經濟との間の商業である。此貿易統計は前の商業經營統計と異なり、税關を通じて國家の力が大いに參與する統計分野であるので特に一章を割いて之に與へた。

最後に是はむしろ經濟統計一般の問題に屬すべきではあるけれど、國內國外を問はず、すべて商業を行ふものにとつて重大なる關心事であるからと思つて採り上げたものに景氣豫測の問題がある(第

五章)。特にハアヴァード景氣指數を取り上げて其の作製方法の輪廓を一通り描き出して見た。

用ひられる所の統計方法は一であつても、之を用ひるべき天地は數限りない。之を用ひる夫々の方面の異なるに従つて統計方法も幾分づつの修正を受け變化を蒙つて來る。或る方面で華々しく用ひられる統計方法が、他の方面では殆ど影をひそめて了ふこともあるだらう。吾々は以上の四章によつて商業統計の全班を盡したとは決して考へない。残された重要問題は數限りなくあるにちがひない。本書によつて述べられる所は、たゞ商業統計の二三の範例に過ぎない。であるから讀者が、第一章の根本思想の上に立ち第二章以下を手本として、各々興味を感じ關心を持つ方面にどしどしと統計的研究を加へて戴き度いと思つて居る。商業統計は、否一般に統計學なるものは知る學問ではなくして分析する學問であると信ずるから。

第二章 物價統計

第一節 物價とは何か

物價統計のことを論ずるには其前に先づ物價とは如何なるものかといふことを説明しておかねばならない。我々は歐洲戦争中には物價が上つたといひ、又最近は物價が非常に下つたといふ。然し單に米の値段が下つただけでは物價が下つたとは云はない。即ち物價とは單純に「物の價」といふ意味ではないので、單純な「物の價」といふ意味ならば價格といふ言葉が用ゐられる。例へば此の帽子は一個三圓であるといふならば其帽子の價格が三圓なのであつて、帽子の物價が三圓であるといふのではない。即ち個々の價は價格であつて物價ではなく、物價たる爲には多數貨物の價格が必要なのである。尙詳しく云へば物價なるものは、世上一般に取引される多種多様の貨物の價格を綜合したものである。かの經濟學者が物價には複數の觀念を伴ふといふのは即ち是である。例へば米も味噌も醤油も生糸も木材も石炭も其他多數の商品が下落し、假令少數の商品が騰貴し、又は保合もつちあひであつても總體に於て下落したときは始めて物價が下落したと稱し得るのである。勿論商品の種類は無數であつて之を

全部調査して物價の騰落を決定することは實際上殆んど不可能であるから、事實上に於ては物價の大勢に關係の深い重要商品だけ採つて其決定の材料とする。例へば日本銀行小賣物價調によれば食糧品四十二種、燃料燈火六種、服飾用品二十種、雜類三十二種合計百種を選定してゐるのである。

さて、之で極めて大體ながら物價の觀念が得られたことと思ふが、然らば此物價の研究は如何なる目的の爲に行はれるかといへば、要するに其第一の目的は貨幣價値の變動を測定するにあるのである。物價指數研究の中興の祖とも云はれるジェヴォンスの如きも、物價指數研究の目的を物價其ものの研究に置かずして、寧ろ物價に映つた貨幣價値の研究に置いてゐたのである。第二、第三の目的としては景氣變動の觀察、勞働者其他の生計費變動の測定、長期貸借決濟の標準、異地間に於ける貨幣價値の比較等を擧げることが出来る。

然らば、第一の目的たる貨幣價値變動の測定といふ場合の貨幣價値とは如何なるものかといへば之は要するに貨幣の購買力を指すのである。即ち貨幣の價値が増加したといふのは一定額の貨幣で以前より多數の同一貨物を購買し得ることをいふのである、従つて貨幣の價値が増加したことは貨物の價値が下落したことになるのである。そして此場合貨幣の價値は一個の貨物に對して増加しても、多數の貨物に對して増加しなければ貨幣全體として價値が本當に増加したといふことは出来ないであらう。即ち多數の貨物の價格である物價が下つたとき、始めて貨幣の價値は増加したといふべきであ

る。斯くの如く物價の高低と貨幣價値の増減とは反對の關係にあるのであつて物價を研究することは取りも直さず貨幣價値の變動狀態を明かにすることとなるのである。依て今物價統計について詳しく論述するに當り、其前に豫め物價統計の目的とする貨幣價値の變動に就て少しく説明を試みることにしよう。

第二節 貨幣價値の變動

物價が世の中の景氣、不景氣に應じて常に上下してゐることは平生吾々の經驗する所であるが一個の種類の違ふ貨物に就いていへば必ずしも同様に上下してゐるものでないことはいふまでもない。例へば或商品の價格は一割騰貴しても他の商品の價格は二割騰貴することもあり、又或商品の價格は騰貴したにも拘らず、他の商品の價格は下落することさへもある。此様に個々の財貨に就いていへば其價格の變動の有様は多種多様であつて變轉極まりないものであるが各財貨を取り纏め、大量觀察してみれば先に變轉極まりない様に見えた個々の財貨の價格も經濟界の一般的趨勢に依て左右される傾向があり、各財貨の價格は略同様の傾向を以て騰落してゐることを發見するのである。即ち個々の價格の變動と一般物價との關係はフィッシャー教授の言葉を藉りていへば恰も波の起伏と潮の干満との關係の如く、前者即ち波は、一波々々に付て云へば各々高さを異にするが、大勢としてみれば結局

潮の上下に歸着する様に、物の價格に就ても大量觀察をすれば個々の財貨の騰落は消え去つて大勢の狀態のみが残るのである。貨幣價値の測定は此原理を應用したのであつて、個々の財貨の價格を綜合して適當に平均した數字を比較すること、即ち後述する物價指數を應用することに依て貨幣價値の増減を測定するのである。

さて、次に貨幣價値が如何なる譯で變動し、又如何なる影響を一般社會に及ぼすかといふ理論は貨幣論上の重要問題であつて其安定性を維持する事は理論としても政策としても非常に六ヶ敷い問題なのであるが、今次に貨幣價値の變動が一國の經濟社會に如何なる影響を及ぼすかを説明する爲に假に給料生活者の家計を例にとつて説明してみよう。給料生活者といふものは其收入たる給料が大體一定してをり物價が上つたといつても直様給料が増額されるものでもなく、又下つたといつても直ちに減俸されるものでない。従つて其生活狀態は物價の上下に依て左右されるものであるといふべきである。即ち貨幣價値の下落した場合、換言すれば物價の上つた場合は如何といふに例へば物價が二倍となれば一定の給料では騰貴前の半分しか物が買へないこととなり、換言すれば給料が半額に減俸されたことゝ等しくなるのである。然し乍ら其反對に若し物價が半分以下落したとすれば一定の給料では下落前の二倍物が買へることとなり、即ち給料は倍額に昇給されたことゝ等しくなるのである。尤も嚴格にいへば物價が倍になつたからと云つて生活内容が直ちに半分になるといふことは出來ぬ。何と

なれば食料品、被服、薪炭等は一般物價の騰貴と略同程度に騰貴するが、家賃、交通費、教育費、税金等は之に伴つて直ちに同様に騰貴するものではないからである。然し乍ら要するに、給料生活者は物價騰貴の際には罪なくして減俸され、物價下落の際には功なくして増俸された結果と同様となることは事實といはねばならぬ。扱之を實際の數字例へば日銀調査の物價指數に就てみれば戦前大正三年七月には一〇〇であつた物價が六年後の大正九年三月には三三八に上り、又大正九年三月を一〇〇とする物價は更に六年後の大正十五年三月には五七に下落した(大正三年七月を一〇〇とすれば一九五)。然し乍ら日本は物價の變動といつても此位の程度に止まつたのであるが、不換紙幣の濫發によつて惹起された戦後の獨逸の物價騰貴は實に慘澹たるものであつた。即ち一九一九年一月には一弗對八馬克二六であつた爲替相場が一九二三年十二月には四兆二千億馬克に慘落し、之と同様物價も形容し難い程の暴騰を演じたのである。殊に其劇甚を極めた一九二三年十一月の頃は刻一刻物價が昂騰し、英國の經濟學者ケインズの如きは其著「貨幣制度改革論」(Monetary reform) に於て當時の事情を次の様に形容してゐる。「ウキーンで物價騰貴が劇甚を極めた際には、用心深いものはバーでビールを注文するときもビールの氣の抜けるのを我慢して二、三杯同時に注文して卓上に並べておいて貰つた。といふのは一杯飲み終つてから次の分を注文するやうにすると、其間にビールの値段が上る恐れがあつたからで……」と。

勿論之は一個の比喩に過ぎないが、物價騰貴の影響が如何に細かい所まで及ぶかを最も寫實的に物語つてゐるといふことが出来る。

次にはやゝ分析的に一國の經濟社會に對する貨幣價値の變動の影響を述べてみよう。

(一) 貨幣價値下落の場合

(イ) 定額債務者の利益

貨幣價値の下落した場合、即ち逆に云へば一般の物價が騰貴した場合は如何といふに、先づ定額の債務を負ふ者は其負債が低減せられたこととなつて利益をするのである。こゝにいふ定額の債務を負ふ者といふのは例へば納税者とか、或は幾許かの金額を借りた一般の債務者とか乃至は法律、習慣又は契約に従つて定額の支拂をなすべき者の如きを指すのである。例へば或る人が一年を期限とし、年利八分を以て百圓の貸借を爲したとすれば債務者は一年の終に百八圓を債權者に渡して其の貸借を棒引し得るわけであるが、其の間に貨幣價値が二割方下落したとすれば債務者の返済する百八圓の貨幣は其貨幣面では同じく百八圓であつても實質に於ては一年前貸借成立當時の八十六圓四十錢の購買力しか有しないこととなる。

$$108.00 - (108.00 \times 0.2) = 86.40$$

依て債務者は借入れた當時の貨幣を以て購ひ得たよりも少量の貨物を賣却して債務を免れることが

出来る故、貨幣價值の下落したゞけ負擔は輕減されたわけとなるのである。而して公法人や私法人の場合の債務は其期間が普通長期に亘る爲め、其受ける利益は殊に著しい。

(口) 企業者の利益の増加。

物價が漸次に騰貴してゆくときは企業者殊に製造業者は物價の騰貴前に仕入れた原料や貯藏された製品等の自然的値上りに依て意外の利益を享けるのである。然し乍ら商人は製造業者と異り商品の廻轉度數が頻繁で商品の貯藏される期間も短かいから、代價の騰貴した物を買ひ、同じく騰貴した代價を以て賣却することゝなる爲め物價騰貴に依て受ける利益は僅少である。製造業者は原料品や貯藏品の値上りに依て利益を受けるばかりでなく、賃銀騰貴の速度は一般物價騰貴の速度よりも遅れる爲め、賃銀の騰貴に追付くまでは安價な賃銀を以て高價なる製品を製造し得ることゝなり賃銀の點に於ても亦利益を受けるのである。斯く物價騰貴は製造業者に對し二重三重の利益を與へる爲め物價騰貴の場合には自然企業が旺盛活潑となり、甚しい場合には投機熱さへも起して事業に對して過度の資本投下を促すに至るのである。

(ハ) 財政に對する影響。

物價が騰貴したときは一國財政に如何なる影響を及ぼすかといふに第一に官業収入及官有財産の收入は一般企業の場合と同様増加することは明かである。次に租税中從量税法によるものは價格と關係がない爲め影響を受けることがないが、從價税法によるものは課税せられる物件たる動産不動産の値上に因つて其収入税額は増加するのである。然し乍ら又一方に於て一般經費中法律又は契約によつて金額の確定しないもの例へば用度品購入費、労働雇傭に關する經費の如きものは膨脹せざるを得なくなる。

(ニ) 定額債權者の損失。

前述したやうに定額の債務を負ふ者が物價騰貴に依て利益を受ける一方に於ては定額の債權を有する者は損失を被らざるを得ない。例へば官公吏其他公債、社債、年金證書の所有者、貸金業者、保險者及被保險者等の法律、契約等によつて定額の金錢を受ける者等はいふに及ばず、一般の労働者も亦賃銀の騰貴の速度が物價騰貴の速度に及ばない爲め損失を被るのである。たゞこゝに注意すべきは定額の給與を受ける者も兵卒、僕婢家内労働者等の様に^{なかば}現物給與を受ける者はそれだけ物價騰貴の影響を受けないことはいふまでもない。

(三) 貨幣價值騰貴の場合

以上述べた所と反對に貨幣の價值が騰貴したとき、即ち物價が下落したときは前の場合と正反對の結果を現はすのであつて、産業の不振、債務者並に定額支拂の義務を負ふ者の負擔増加、債權者並に定額給與を受ける者の利益、一般經費の減少、官業収入の減少、租税殊に從價税法によるもの收入

減となつて現はれるのである。

第三節 指数

第一項 貨幣價値の測定

(一) 貨幣價値測定の困難

貨幣價値の變動が如何に經濟社會に影響を及ぼすかといふことは前節に述べた通りであるが、然らば其貨幣價値の高低は如何にして測定することが出来るかといふに、之は却々困難な問題なのである。若し凡ての貨物の價格が一齊に騰貴し、又は一齊に下落するならば貨幣價値の變動を測定するのは容易な業であるが斯の場合には實際に於て起り得るものではない。即ち或る貨物の價格は騰貴しても他の貨物の價格は下落することもあらうし、尙又其の騰貴や下落の程度も物に依て千差萬別であるからである。依て假令各價格が一齊に騰貴し又は一齊に下落したとしても、其變動の程度を測定することは容易な業ではないのである。又物價は貨幣と關係なく、貨物自身で變動の原因を起すことがある。例へば政治上又は社會上の制度改革、新開地への移住、新市場の開設、流行の變動、新生産法の發明、海陸に於ける交通運輸の進歩等、貨幣とは無關係に貨物自身其價値を左右することがあるから、單獨に貨物の代價に生じた變動だけでは直ちに貨幣價値の高低を測定する標準となることは出来ないのである。

(二) 貨幣價値の測定法

併し乍ら多數の貨物を選んで其物價を平均すれば、

(イ) 戦争、流行、嗜好の變遷等による特殊の貨物に対する需要の増加は社會全體の消費力が之に伴はない限り、他種の貨物に対する需要を減じ、畢竟一方に於ける物價の騰貴は他方に於ける物價の下落を引起すこととなり、全體の平均數に於ては以前と同様の物價を表はすこととなるであらう。

(ロ) 生産費の増減より生ずる物價の變動は其作用が廣く各種の貨物に及ぶ場合には、必ずや貨幣の材料の生産にも其影響を及ぼすべき故、假令其貨物と貨幣の材料の變動とは程度が異なるにしても結局、生産費の減少した貨物の價値は同じく生産費の減少した金屬を材料とする貨幣を以て測定せられることとなり、全國に於ては生産費の變動が消滅せしめられる故に、此場合にも貨幣の價値は差支なく測定することが出来るのである。

扱、此様にして算出された物價の平均數の變動を具體的に知る爲には或る年の物價の平均數を基準として之を通常一〇〇とし、次に比較すべき年の平均數を之と對照して其の割合を求め、例へば六割の騰貴があつたならば一六〇といふ數字を以て表はすのである。而してかゝる數字を稱して物價指數 (Index number of prices) と稱する。

物價指數には廣い意味と狭い意味とがある。狭い意味の物價指數とは例へば各種の商品の様有形財の價格のみを本として作られた指數を指し廣い意味の物價指數とは尙此外に賃銀指數や生計費指數の如き抽象的な指數をも包含したものを指すのである。そして一般に物價指數といふことは狹義の物價指數のみを指すのであつて本書に於ても専ら此意味の物價指數のみに關して述べてゐるのである。

第二項 指數算出法

(一) 物價指數算出法。

指數算出法は或時期に於ける多數の價格を記録し、之を標準として他の時期に於ける價格と比較對照して其變動を知るのであるが、今説明の便宜上、先づ指數算出の實例を掲げてみよう。

品名	單位	1880年ノ物價	同指數	1890年ノ物價	同指數	1900年ノ物價	同指數	
鐵	ト	25.00	100	23.00	92	26.50	106	
穀物	ブツシユル	.50	100	.45	90	.55	110	
小麦	ブツシユル	.90	100	.92	102	.95	105	
羊毛	キソ	.30	100	.25	83.5	.27	90	
石灰	ト	2.00	100	1.80	90	2.10	105	
砂糖	ビユル	15.00	100	14.50	96.5	13.65	91	
			6) 600		6) 554		6) 607	
			100				92.33	101.17

即ち今鐵についてみれば基準年度たる一八八〇年の一噸の價格は二十五弗であつたものが一八九〇年には二十三弗となり、従つて指數は九二となつた。

$$25.00 : 23.00 = 100 : x \quad x = 92$$

之と同様一九〇〇年には價格は二十六弗五十仙となつて指數は一〇六となつた。穀物小麦其他に就ても之と同様の計算を試み、畢竟一八九〇年の各指數の合計は五五四となるのである。依て之を商品數の六を以て除し、九二・三三なる數字を得た。之れ即ち一八九〇年の物價指數である。之を基準年度たる一八八〇年と比較すれば七・六七%の下落があつたことが分る。而して一九〇〇年の物價指數は同様の方法によつて一〇一・一七となり、之を基準年度と比較すれば一・一七%の騰貴があつたことが分るのである。

(二) 物價指數の性質。

物價指數は大體此の様にして算出されるのであるが前述した様に貨物の價格は時の経過に従つて或るものは騰貴し、或るものは下落し、而も其の騰落の程度も千差萬別であるから貨幣價値の變動を知らうとするならば勢ひ多數の貨物に就て觀察せねばならぬ。即ち僅か一二種の貨物を捉へ來つて其騰落の程度を深く檢しても貨幣價値變動の真相を窺ふことは出來ないのであつて、是れ多數の重要貨物を網羅して物價指數が發明された所以なのである。

以上は物價指數調製方法の極く大體であるが尙ほ其詳細を説明するに當り先づ其沿革と各國に於ける物價指數の種類並に物價指數に對する批評の大勢を紹介することゝしよう。

第三項 物價指數の沿革

(一) 日本に於ける物價論

物價指數の研究は相當古くから行はれたものである。尤も指數といふ言葉を、今日用ひられてゐる様に嚴格に解するならば、それは極く新しいことであるが此言葉をもつと廣い意味に解してたゞ種々の物價を比較するといふ意味にとるならば餘程以前から研究されてゐるといふことが出来る。即ち我國に於ても既に足利時代に室町殿日記^{むろまちのひつぎ}、御湯殿日記^{かゆどのひつぎ}等の中に物價に關する記録が散見し、又徳川時代に入つては彼の有名な松平定信の物價論なるものがある。又佐藤信淵は物價餘論簽書なるものを著し、明治初年に至つては西村兼文なる人が文武天皇元年より嘉永二年に至る物價を調査して本朝物價表なる一書を著した。然し乍ら是等は何れも單なる物價の比較に止まつたのであつて日本に於ては終に物價指數の端緒は得られなかつたのである。

(二) 初期の物價指數

然るに泰西にあつては、物價指數と名け得るものが相當古くから存在し、其中、最古のものと稱せられるものは一六七五年の出版にかゝるライス・ヴォーアン (Rice Vaughan) 氏の著作「鑄貨並に鑄

造論」の中に載せられた物價の比較である。即ち氏は一三五二年に於ける穀類、家畜、魚、布帛、リンネル、獸皮等の諸商品の市價を基準とし、之と、是より約三百年後の一六五〇年の是等商品の市價とを百分比例で比較し、物價變動の状態を明かにしたのである。

之に次いで古いものは一七〇七年に出たフリートウッド (Freetwood) 氏の實貨事略であつて氏は此中に一四四〇—一八〇年の間に五磅を以て購ひ得た穀物、肉類、酒類、布帛の分量を調査し、又一七〇七年時代に此分量を購入するに必要な金額を調べて前者と比較したものを掲げてゐる。

此二氏に次ぐものは佛蘭西にあつてはジュトー (Dutoit) 伊太利にあつてはカーリ (Carli) であるが英國ではエベリン (Evelyn) を擧げることが出来る。エベリン氏は一七九八年「度量衡の標準決定に關する研究」と題する論文を公にし、其末尾に彼の英國史上に有名な「ノルマンの征服」以來當時までの物價表を掲げ其平均價格を以て貨幣價値の變動を測つた。

(三) 十九世紀前半に於ける物價指數

十九世紀に入つてからは、物價指數の研究は著しい進歩を示した。即ちアーサー・ヤング (Arthur Young) は一八一二年に「英國に於ける貨幣價値の累増に關する研究」なる一書を著し新に秤量平均を加味した研究を發表したのである。ヤングの秤量法は小麦五、大麥及燕麥二、其他の食料品四、勞働賃銀五、石炭、鐵、羊毛各一といふ割合である。

ヤングに次いでロー (Lowe) スクロープ (Scrope) ヘンリー・ジェームス (Henry James) ポーター (Porter) 等の諸氏が輩出して大いに物價指數の效用を鼓吹したが、殊にロー、スクロープ、ポーターの三氏は平均物價を以て貨幣價值の變動を測らんとしたことによりジェボンズによつて物價指數本位説なりと稱せられたのである。ポーターの著書「國家の進展」中には一八三三年乃至三七年に於ける五十種の重要貨物を掲げたが之等諸氏の物價指數は何れも僅々數ヶ年に亘つたに過ぎないものであつた。現今に至るまで繼續した物價指數表の中最も古く且つ最も有名なものは「倫敦エコノミスト雜誌」社の表であつて之はニューマーチ (Newmarch) なる人の創設にかゝり一八五二、五四、及五六年の分を缺く外は一八五〇年より現今に至るまでの年々の物價を掲げてある。

(四) 十九世紀後半に於ける物價指數

斯の如く物價指數の研究は次第に旺盛となり、平均物價によつて貨幣價值の變動を測らんとする説はロー、スクロープ、ポーター等によつて唱道せられたが未だ一般學者によつて研究せられる程には至つてゐなかつた。然るに一八四九年以來かの有名な濠洲及カリフォルニア金坑の發見によつて歐洲の物價が大騰貴を示すや物價問題は俄に世人の注目する所となり、學者、政治家も亦此問題を大いに研究するに至つたのである。就中、貨幣學者として有名なジェボンズ (Jevons) は貨幣價值の暴落を目前に見て貨幣の本質につき大いに疑を懷き一八六三年遂に起つて物價指數本位説を主張し、ツーク

著「物價史」及「エコノミスト表」を基礎として自ら物價指數表を作製し、之に依て貸借の公平を得せしめんとした。彼の一八六三年に著した論文は「金の價值の下落と其社會に及ぼす影響」といふのであつて次で六五年には「一七八二年以來の物價の變動並に通貨の價值に就て」といふ論文を著し又六九年五月には「エコノミスト」に於て「金の下落」を論じた。ジェボンズの研究は當時最も正確なるものであつて其計算方法にはヤングの如き秤量法を用ひなかつたけれども指數の算出には幾何平均が用ひられ、之等の論文はジェボンズ物價指數の三大論文と稱せられ學界に於て貴重なものとされてゐる。

此ジェボンズに次いで物價指數の研究をした人は財政學者として有名なサー・ロバート・ギッフエン (Sir Robert Giffen) である。彼は一八八〇年より八六年に亘つて財政に關する諸多の論文を公にしたがジェボンズと異り輸出入品を基礎として計算した。宛も當時物價問題が當時の經濟學者を最も刺戟した爲め遂に一八八六年には大英學術獎勵會なるものが生れ主として英國物價の統計的研究を行ふに至つた。其會の委員は當時の傑れた經濟學者を網羅し、毎年一回宛報告を行ふこととしたのである。今其委員の氏名を挙げれば次の如し。

バーン、エツヂウオース、フォックスウエル、ロバート、ギッフエン、アルフレッド、マーシャル、マーチン、ニコルソン、バルグレイブ、シヂウキツク

過去に於ける物價指數研究の發達は大體以上の如くであるが尙ほ近年の物價指數表の中最も重要視せられるものは英國のソーアーベック及獨逸のゼートベア兩氏の表である。其等については尙項を改めて詳述しよう。

第四項 各國に於ける物價指數表

(一) 英國

各國中物價指數表に於て最も古い歴史を有するものは前述の如く英國であるが、其の英國に於ける主たる指數表を挙げれば「ロンドンエコノミスト」(London Economist) ジェボンス、マルホール、ソーアーベック諸氏の四表となる。

(イ) エコノミスト表

エコノミストの物價表はニューマーチ氏の創成にかゝるものであつて物價指數表を組織した最初のものであり、且又當時之と比肩するものがなかつたので世人に最もよく知られてゐるものである。一八四六年より一八五〇年に至る平均物價を基準一〇〇と定め、其後各年の物價を之に對する比例數として表はした。(但一八五二、五四及五六年の分を除く)最初は毎年一月一日の物價を採用したが後には一月一日及七月一日の二回の相場を採用した。其採用した商品數は珈琲、砂糖、茶、煙草、小麥、肉、孟買産棉花、ベルナンブコ棉花、絹、麻、羊毛、藍、油、木材、獸脂、皮革、銅、鐵、鉛、錫、綿絲、

綿布の二十二種であつた。

之に對する非難の主なるものは(一)調査時期僅かに一年中二回に過ぎざること、(二)調査貨物が少數なる爲め一貨物の價格の變動が全體に對し著しい影響を及ぼすべきこと、(三)綿に關する同種の貨物が四種ある爲め棉花の騰落が全體に對し著しい影響を及ぼすこと、(四)單純な算術平均をとり、秤量法をとらなかつたことは失當であること、等である。バーン(Bourne)氏は依てエコノミスト表に訂正を加へ棉花は之を一とし、更に石炭を加へた物價表を作製した。然し乍ら此事業は一八七九年以後は繼續しなかつた。

パルグレーブ(Palgrave)氏は第四の非難をした人であつて氏は秤量法を用ゐ、且つ一八六五年より調査を始めた印度物價と比較する爲め、エコノミスト表を一八六五―六九年間の平均物價を以て基準としたものに改めた。

かゝる種々の非難が加へられた爲め一九一一年以後エコノミスト表は其構造を改め、一九〇一年乃至五年の五ヶ年間平均物價を基準一〇〇とし、貨物も四十四種に増加した。即ち其貨物は大別して穀物及肉類、嗜好品及調味料、織物原料、礦物、雜類の五部類とし、各部類に左の四十四種の貨物を屬せしめたのである。

一、小麥 英國産、外國産の二種)、小麥粉、大麥、燕麥、馬鈴薯、米、牛肉、羊肉、豚肉。

- 二、茶、珈琲、砂糖(甘蔗糖、甜菜糖の二種)、牛酪、煙草。
- 三、棉花(下等品と中等品の二種)、綿絲、綿布、羊毛(英國産と濠洲産の二種)、生絲、亞麻、大麻、黃麻。
- 四、銑鐵、鋼鐵、鍊鐵、石炭(蒸汽用と家庭用の二種)、鉛、錫、銅。
- 五、木材(バルチック産と米國産の二種)、皮革、石油、植物油、菜種、牛脂、藍、硝子、ゴム。

然るに一九二九年一月よりは更に品種を五十八種に増加し、其平均方法も一九二八年十二月より従來の算術平均を廢して新に幾何平均を用ふるに至つた。而して其改めた際此の兩法に依て如何なる數字的相違を來すかを示す爲に同雜誌に一九二〇年乃至二七年の物價指數を掲げてゐる。

年次	算術的平均指數	幾何的平均指數
一九一三(基準)	一〇〇、〇	一〇〇、〇
二〇	二八三、二	二五九、八
二一	一八一、〇	一七二、七
二二	一五九、五	一五四、〇
二三	一六二、一	一五四、四
二四	一七三、九	一六五、七
二五	一六六、五	一六二、一
二六	一五二、八	一四八、八
二七	一四七、九	一四三、七

又一八四五—五〇年を基準とする算術平均指數を挙げれば次の如し。

(一九二八、二九兩年度分は一九二七年を二〇〇とする幾何平均であるが便宜上換

算して掲げる)

年次	指數
1845-50	100
1860	123
1873	134
1880	117
1900	98
1901	97
1902	89
1903	91
1904	100
1905	97
1906	106
1907	114
1908	105
1909	100
1910	109
1911	114
1912	117
1913	125
1914	119
1915	127
1916	165
1917	223
1918	266
1919	277
1920	335
1921	226
1922	199
1923	203
1924	217
1925	208
1926	191
1927	185
1928	181
1929	170

(口)ジエボンス氏表

ジエボンス氏表には二つある。一は一八六三年の金價下落に對する論文中の所載にかゝるものであつて二は一八六五年の調製になるものである。前者は主として「エコノミスト」により三十九種の貨物を選び、之を六種に分け、一八四五—五〇年の六ヶ年の平均價格を基準一〇〇とし、五一年以降六二年に至る連年の相場の高低を示したものである。後者は一七八二年より一八六五年に至る四十種の重要貨物の表であつて一八四四年までの相場は主としてツーク、ニューマーチ氏の物價表により調製し其以後の相場は第一表と同じく主として「エコノミスト」に據つたのである。而して其相場は一年間の平均のこともあるが多くの場合は三月に於ける最高最低の中間相場をとつたのである。

計算の方法は幾何平均を採用したが全部幾何平均によつたわけではない。即ち或る同種類の貨物の各月の平均價格を出すには常に算術平均により、是等を集めて又算術平均により一ヶ年の平均價格を

出し、最後に各貨物の平均割合より總貨物の平均割合（即ち總物價指數）を算出するときに始めて幾何平均法を用いたのである。

(ハ)マルホール氏表

マルホール氏は一八八五年「一八五〇年以後の價格史」と題する一書を著し在來の物價指數は適當なる秤量法が施されてゐない爲め信頼すべからざることを論じて、之に代へるに商業平均法を以てすべきことを主張した。此商業平均法とは或る時期に於ける商業取引の總額を捉へ、之と他の時期に於ける同種同量の貨物の總價額とを比較し、以て物價の高低を知らうとする方法である。此方法によつて作つた氏の表は英國の商務省統計中より五十種の重要輸入品を抽出し、一八四一—一五〇年に至る十年間の總價格を計算し、之を標準として一八五四年より八四年に至る三十年間の物價の高低を示したものである。

(ニ)ソーアーベック氏表

ソーアーベック氏の表は、一八四六年に始まり中途スタチスト社が繼續して今日に至つてゐる物價表であつて、其最初のものは一八八六年英國統計學會雜誌に掲げられたものである。其の調査材料とした物價は或は政府の報告より得た各年の平均もあり、或はエコノミスト誌其他の新聞雜誌又は個人商店から得た物價を平均したものもある。調査した貨物は之を六級に分け一八六七—七七年平均物價

基準一〇〇として他の年に於ける平均物價と比較してゐる。而して其貨物は生産高、輸入高を合して百萬磅以上となるものゝみ四十五種を選び、單純算術平均法によつて之を計算したのである。今創始當時よりの指數を挙げれば左の如くである。

一八六七—七七年一〇〇

年次	指數	年次	指數
1860	99	1895	62
1861	98	1896	61
1862	101	1897	62
1863	103	1898	64
1864	105	1899	68
1865	101	1900	75
1866	102	1901	70
1867	100	1902	69
1868	99	1903	69
1869	98	1904	70
1870	96	1905	72
1871	100	1906	77
1872	109	1907	80
1873	111	1908	74
1874	102	1909	74
1875	96	1910	78
1876	95	1911	79
1877	94	1912	85
1878	87	1913	84
1879	83	1914	85
1880	88	1915	108
1881	85	1916	135
1882	84	1917	174
1883	82	1918	190
1884	76	1919	203
1885	72	1920	251
1886	69	1921	158
1887	68	1922	131
1888	70	1923	129
1889	72	1924	140
1890	72	1925	136
1891	72	1926	127
1892	68	1927	123
1893	68	1928	121
1894	63	1929	104

ソーアーベック氏表はエコノミスト表と並んで現今學者實際家によつて汎く引用せられるが貨物の選擇其宜しきを得ず食品及原料品のみを選び而も其原料品たる貨物は一般貨物を代表すべきものでないこと、材料を得た由來が分明せざること、掲載した相場場の統一を缺き、或る場合は一年の平均價

格をとり又或る場合は唯だ一年中の或る一日に於ける相場を表はすこと等々種々の點に於て學問上の非難を免れないのである。近年ソーアーベック氏其業を廢めスタチスト社之を承繼することゝなつた。

(ホ)商務省物價表第一表

英國に於ては尙以上の外に商務省の物價表なるものがある。之は卸賣相場を用ゐ、一八七一年以降の分を算出してゐるが一九〇三年の報告にはジェボンス(一八〇一—四六)ソーアーベック(一八四六—七一)及商務省の指數を用ゐて一八〇一—一九〇二に至る百二年間の圖表を示してゐる。毎年「レボアガゼット」一月號に掲げ現今其取扱商品の數は四十七種に達してゐる。平均は秤量算術平均であるが左に貨物類別の名稱物品數及秤量値の表を掲げよう。

類別	物品數	秤量値類別計
第一類	石炭及金屬	六
第二類	纖維物(但原料品)	六
第三類	飲食物	七三
第四類	イ、穀物	一三一
	ロ、肉、魚及乳製品	一六一
第四類	ハ、茶、煙草、麥粉、砂糖	三八
	雜類	一〇
合計		四三・五

合計

四七

五〇六

(ヘ)商務省物價表第二表

同商務省に於ては更に一九二〇年一月以降毎月其の機關誌「商務省商業雜誌」に百五十種の貨物よりなる卸賣物價指數を發表してゐる。これは次の様に全貨物を先づ食料品と其他の貨物に分ち更に之を八部類に分類してゐるのである。

類別	物品數
第一類	食料品
	イ、穀物
	ロ、獸肉及魚肉
	ハ、其他
第二類	其他
	ニ、鐵並鋼
	ホ、其他の礦物
	ヘ、木綿
	ト、其他の織物原料
	チ、雜品
合計	一五〇

此指數の計算法は幾何平均であり、一九〇〇年を以て基準年度とし一八七一年まで遡つて指數を計

算してゐる。今其數字を挙げれば次の如し。

年次	指數
1900	100.0
1901	96.9
1902	96.5
1903	99.9
1904	98.3
1905	97.6
1906	100.5
1907	105.7
1908	102.8
1909	104.1
1910	108.8
1911	109.4
1912	114.9
1913	116.5
1914	117.2
1915	143.9
1916	186.5
1917	234.0
1918	267.4
1919	296.3
1920	357.7
1921	229.5
1922	185.2
1923	185.0
1924	191.8
1925	185.2
1926	172.4
1927	165.4
1928	163.1
1929	159.6

尙商務省には右の外に小賣相場の物價指數があつて一九一四年七月以來毎月「レボアガゼット」誌上に發表する。其商品は食料品のみを採用し現今二十三種に上る。

(二) 獨逸

獨逸に於ける物價指數表の主なるものを挙げればラスバイレス (Laspeyres) パーシエ (Pasche) ボルヒト (Borcht) コンラード (Conrad) クラール (Kral) ゼートベイヤ (Soebear) ハイニンツ (Heinz) 諸氏の表及獨逸統計局指數表となる。

(イ) ラスバイレス表

ラスバイレス氏は一八六四年「國民經濟學及統計學時報」中の一論文に於て一八五一年乃至六三年の漢堡に於ける物價の研究を公にした。氏の表は一八五七年まではゼートベイヤの「物價統計論」の調査を借り餘は漢堡取引所相場を基とし、ゼートベイヤの方法に従つて自ら作製したものである。即ち毎月第一金曜日

に於ける相場を集め、算術平均を用ゐて毎年の平均價格を算出したものであつて基準としては一八三一—四〇年の平均相場を採用した。併し貨物によつて右十年間の平均を得ることが出来ない場合には四一—五〇年の平均價格を基準とし、尙其平均を得ることが出来ないときは五一—六〇年の平均相場をとつて基準としたのである。用ひた貨物は合計四十八種であるが製造品の如きは殆んど度外視し、主として原料品及野生品のみを採用してゐる。

(ロ) パーシエ表

ラスバイレス表は一八六三年までの物價指數なので其後の指數はパーシエ氏によつて算出された。即ちパーシエはラスバイレスと同一の材料により一八六八—七二年までの表を作つて一八七四年之を公にしたのである。尤もパ氏の選擇した貨物は必ずしもラ氏の選擇したものとは符合しない。パ氏はラスバイレス表中十七種の貨物を削除し、新に十六種の貨物を加へたのであつて基準年度は一八四七—六七年の二十一年である。氏の作製した表には二種あつて第一種のは單に算術平均を以て算出したものであるが第二種のは選擇した四十七種の貨物中更に二十二種の貨物を抽出して六類に分け消費高を秤量値とした一種の秤量法を用ゐて算出してゐるのである。

(ハ) ボルヒト表

ボルヒト氏は更にパーシエの第二表を承繼し一八八〇年迄の表を作り之を公にした。氏は此外尙一

つの別表を調製したが即ち之は四七―六七年に至る二十一年間の平均物價を基準として、之と一八六八年以降毎三年の平均物價とを比較し更に一八四七―七五年の平均物價を基準として、之と一八八〇年に於ける貨物消費高を一八七六―八〇年の五ヶ年間の平均價格を以て計算したものと比較して掲出したものである。

(二)コンラード表

コンラード氏はパーシエの選擇した四十七種の貨物につき一八四七―五〇、一八五一―六〇、一八六一―七〇、一八七一―八〇、一八八一―九〇、一八九一―九五、一八九六―九九年の各期の物價表を作製した。然し乍ら單に右各期に於ける各貨物の相場を表示し、後一八四七―七〇年に於ける各貨物の平均價格を基準として一八七一―八〇、八一―九五、一八九六―九七及一八九八年の各期に於ける各貨物の相場の高低を算出したに止まり綜合的指數を計しなかつた。右の外氏は三種の表を作製して之を公にした。

(ホ)クラール表

クラール氏は其著「獨逸帝國に於ける貨幣の價值及物價の變動」と題する書中に於て一八七一年の相場を基準とし、一八四五―五〇年以降一八八四年に至る二百六十五種の漢堡物價の高低表を算出したのである。其計算の方法はエコノミスト表と同様である。

(ハ)ゼートベイヤ表

ゼートベイヤ氏漢堡物價高低表は各種物價指數中最も有名なものの一である。氏の表は一八五一―八八年に至る百十四種の商品につき物價指數を算出したものであつて其材料は漢堡貿易統計局、漢堡市廳年報等に據つてゐる。一八八八年漢堡が獨逸關稅同盟に加はる迄同港が自由港であつた間は其輸入貨物は三百個に及び陸上、海上双方より入るものにつき統計が作製せられたが、一八八八年關稅同盟に加はるに及んでは統計局の記録に登載されるものは單に海上より來るものに限られ、陸上より來る貨物の相場は調査すること不能に陥つた爲めゼートベイヤ表も同年以後は從來通り作製することが出来なくなつたのである。然し乍ら氏は一八九二年に至り一八八六―九〇年の期間に對する表を作つて其缺を補つた。氏の計算方法は單純な算術平均を用ゐて秤量法を採らず基準年度は一八四七―五〇年であつて百十四種の貨物を八類に分け一八五一年以降毎年の高低及五ヶ年毎の平均、高低の比例を表示してゐるのである。

今氏の選擇した貨物百十四種の名稱を擧げれば次の如し。

- (一)小麥、小麥粉、ライ麥、ライ挽麥、燕麥、大麥、麥芽、蕎麥、豌豆、白豆、馬鈴薯、ホップ、クローバ豆
 菜種、菜種油、亞麻仁油、油糖、粗糖、精糖、酒類。
 (二)牛肉、犢肉、羊肉、豚肉、牛乳、乾酪、牛酪、油、豚油、獸皮、獸皮、鞣皮、馬毛、剛毛、羽毛、獸骨、

- 水牛角、膠、鶏卵、鰵、乾魚、鯨油。
- (三) 乾葡萄、巴旦杏、乾梅、オリーブ油、葡萄酒、シャンパン酒。
- (四) 珈琲、ココア、胡椒、蒲桃、肉桂、米、苳麪、啞力酒、ラム酒、苩、藍、洋紅、蘇於木、花梨木、マホガニー、籐、棕櫚油、象牙。
- (五) 石炭、鐵鑛、棒鐵、鋼、鉛、錫、亜鉛、銅、水銀、硫黃、智利硝石、鹽、石炭、セメント。
- (六) 木綿、羊毛、亞麻、大麻、絹、繩索、布屑。
- (七) 人造窒素肥料、彈性ゴム、ガタベルカ、樹脂、眞珠灰、瀝青、加里、曹達、ステアリン、蠟燭、タール、蠟。
- (八) 綿絲、白地織物、捺染織物、木綿靴下、縫針、ガラス、ボタン、麻絲、白地麻布、帆布、毛絲、毛織物、フランネル、絨氈。

次に一八五一年以降毎五ヶ年の總平均指數を示せば左の如くである。

年次	總平均指數	年次	總平均指數
一八四七—五〇	一〇〇、〇〇	一八七一—七五	一三三、二九
一八五一—五五	一一二、二二	一八七六—八〇	一二三、〇七
一八五六—六〇	一二〇、九一	一八八一—八五	一一七、六八
一八六一—六五	一二三、五九	一八八六—九〇	一〇四、四六
一八六六—七〇	一二三、五七	一八九一	一〇九、一九

(ト) ハイנטツ表

一八九二年ゼートベイヤが卒去した後、漢堡貿易統計局長ハイנטツ氏は一八八八年の變動以後尙調査し得る貨物を集め、信賴し得る物價指數表を作製せんことを企てた。依て氏は古い記録により漢堡海上輸入品百八十種を選び一八五〇—九一年までの相場を集め、之を表掲してフォルクナー氏のアルドリツチ報告表の材料に供したのである。商品百八十種の中七十種はゼートベイヤ表中にあるもので右の外ハイנטツは百十種を加へたのであるが、之はたゞ相場を記録したに止まり、其高低の比例を作らなかつた爲め、之より總平均指數を得るには尙多大の勞力を要する。

(チ) 獨逸統計局指數表

獨逸統計局より發行される卸賣物價指數表は現今各國に於て最も多く引用されるものであるが、基準年度は一八六〇—七〇年に亘り指數は一八六〇年より算出されてゐる。品數は三十八種で生活必需品、内國商品、外國商品の三方面の見地から蒐集されてゐる。

- (一) 裸麥、小麥、大麥、燕麥、馬鈴薯。
- (二) 牛肉、ヘット、砂糖、牛肉、豚肉、魚類二種。
- (三) ホップ、カ、オ、珈琲、茶、胡椒。
- (四) 牡牛皮、牝牛皮、犢皮、靴革、ボツクス革。
- (五) 木綿、綿絲、綿布、亞麻絲、黃麻、黃麻絲。
- (六) 鉛、銅、錫、亞鉛、アルミニウム、ニツケル、石油。

(七) 鐵、石炭二種。

右の中一、二、三は生活用品、一、二、七は内國商品、三、四、五、六は外國商品の見地より集められたのである。而して指數の計算方法は一九〇八―一二年の國民消費高の價額を秤量値とした秤量算術平均によつてゐる。秤量値は次の如し。

第一類、三〇。第二類、一〇。第三類、三。第四類、一。第五類、四。第六類、三。第七類、一五。
歐洲戰爭前までの指數を示せば次の如し。

年次	指數	年次	指數
1860	99	1887	73
1861	100	1888	79
1862	96	1889	87
1863	94	1890	93
1864	94	1891	91
1865	96	1892	87
1866	101	1893	81
1867	110	1894	75
1868	109	1895	73
1869	103	1896	74
1870	96	1897	80
1871	103	1898	85
1872	116	1899	85
1873	125	1900	91
1874	119	1901	85
1875	110	1902	84
1876	107	1903	83
1877	109	1904	87
1878	98	1905	90
1879	89	1906	92
1880	100	1907	103
1881	96	1908	97
1882	91	1909	96
1883	90	1910	94
1884	82	1911	99
1885	78	1912	112
1886	73	1913	97

然るに一九一三年以後は此年の平均物價を一〇〇として計算することゝなつた。

年次	指數
一九一三	一〇〇
一九一四	一〇五
一九一五	一四二
一九一六	一五二
一九一七	一七九
一九一八	二一九
一九一九	四一五
一九二〇	一、四八六
一九二一	一、九一一
一九二二	三四、一八二
一九二三	一六、六一五、二〇八、〇四〇、四四〇

一九二三年の指數がかくも莫大な數字を示した所以は獨逸政府の紙幣の濫發によるものであつて、かゝる莫大な數字となつては貨幣の價値も、物價指數の意義も全然没却せられたことゝなる故、遂に一九二三年十月以來はレンテンマルク紙幣による幣制整理が進行し、次で翌一九二四年十月にはライヒスマルクによる新本位制度が樹立され、爾來金マルクを以て計量されることゝなつたのである。従つて獨逸統計局の物價指數も此の新制度、金マルクの評價によつて作製されることゝなり一九一三年を基準とし一九一四年以降の分が計算された。今金マルクによる物價指數を示せば次の如し。(一九

二六以降は四捨五入)

年次	指数	年次	指数
一九一三	一〇〇、〇	一九二二	八二、〇
一九一四	一〇三、四	一九二三	八五、一
一九一五	一二二、四	一九二四	一二二、五
一九一六	一一六、一	一九二五	一三〇、四
一九一七	一一四、五	一九二六	一三四、〇
一九一八	一五三、六	一九二七	一三八、〇
一九一九	九六、九	一九二八	一、四〇〇
一九二〇	一〇五、八	一九二九	一三七、〇
一九二一	八二、七		

(三)米 國

米國に於ける物價指數表としてはフォルクナー氏監輯にかゝるアルドリッチ報告、フォルクナー第二表。勞働統計局指數表。ブラッドストリート表。ダン表。アナリスト表。ギブソン表等を擧げることが出来る。

(イ)アルドリッチ報告表

フォルクナー教授監輯の下に一八九三年アルドリッチ氏の手に成つた本表は元老院財政委員會報告

に掲載された。之は一八四〇—一九一年に亘る九十種の貨物表と、一八六〇—一九一年に亘る二百二十三種の貨物表より成るのであつて本表が斯くも多數貨物について調査を行つたことは他の物價指數表よりも優れてゐる所である。材料は商工業者の帳簿より取り、毎年一月一日の相場を以て其年の相場としてゐる。併し冬期に於て特に高價となる貨物は他期の相場に依て之を示したのである。基準は一八六〇年の相場を以てした。其の理由は一八六〇年以前に於ては米國の經濟界の變動が著しく、基準とするに不適當であつたに反し、六〇年前後は物價の變動が甚だ僅少であつたからである。尙氏は此表に於て普通の算術平均によるものと、秤量平均によるものとの二欄を掲げてゐる。其秤量値は合衆國勞働委員の報告による二千五百六十一の家族の消費豫算に準據した。

(ロ)フォルクナー第二表

アルドリッチ報告は一八九一年を以て終つた。然し乍らフォルクナーは勞働局より依頼されて更に一八九〇年より一九〇〇年に至る卸賣相場の高低を調査し、九十九種の重要貨物に對して物價指數表を作製した。之をフォルクナー第二表と稱する。之は前掲アルドリッチ報告の業を繼續せんとしたものであるが其後經濟社會の進歩は大いに消費貨物の變遷を來し、調査材料の蒐集も亦前例に従ふことが出来なかつたので其内容もアルドリッチ報告と全然同一とすることは出来なかつた。今其の差異の主なる點を擧げれば貨物の數はアルドリッチ表は二百二十三種であつたが此表は九十九種となり、又前

表は各貨物を皆同様に扱ひ同一の重みを附したのであるが、後表に於ては同種類の貨物は之を集めて平均を出し其平均に一つの重みを附けた。又基準相場及年々の相場も前表は一月一日の相場のみをとつたのであるが後表は基準相場には一八九〇年一月より九二年一月に至る九期の平均相場をとり、又年々の相場は一年四期の平均相場をとつた。又其計算法に於ては普通の算術平均によるものと、秤量算術平均によるものとの二種を掲げたことは前表と同様である。

(ハ)労働統計局指數表

労働統計局の指數の中卸賣相場に關するものは一八九〇年に始まり其商品數は一九一三年までは二百五十乃至二百六十種、一九一四―一六年は三百四十種であつたが一九一七年以後は左の如く三百二十八種となつた。

商品類別	所屬物品數
農産物	三二
食料品類	九一
布帛及衣服	七七
燃料及燈料	二一
金屬及金屬製品	二五
木材及建築材料	三〇
化學製品及藥品	一八

家具類	雜品	合計
一三	二一	三二八

小賣相場に關するものは一九〇七年に始まり折々別冊として刊行する。其選擇して商品は食料品のみであつて二十二種に上る。

(ニ)ブラッド・ストリート表

此表は紐育市「ブラッド・ストリート」經濟雜誌社の調査に成る卸賣指數であつて一八九二年を開始期とし、毎月發表するものである。現在は百六種の商品につき毎月一日に於ける一封度毎の價格を算出して其實數合計を發表する方法をとつてゐる。従つて物價指數としてはいはゞ未完成のものであつて、利用者が普通の物價指數に換算するには此の實數から或る年度を基準とする比例數を自ら計算しなければならぬ。今其商品數を示せば次の如し。

商品類別	所屬物品數
一、パン原料品類	七
二、肉類	四
三、食料品	二四
四、果實	五

五、皮革類	一四
六、織物類	一一
七、鐵物	一三
八、石炭コークス	四
九、油脂	六
十、船舶需要品	三
十一、建築用品	八
十二、化學製品	一
十三、雜品	七

(ホ)ダン表

之は紐育市ダン商會の營業部が其機關誌「ダン時報」に毎月發表する物價指數であつて、其調査年度は一八六〇年に始まる。商品は約二百種であつて各商品の價格にはそれぞれ一人一年分の消費高の秤量が施されてある。

(ヘ)アナリスト表

之は紐育週刊金融雜誌「アナリスト」社の發表するものであつてダン表と同じく卸賣價格を以て指數算出の基礎としたものである。一九一三年一月に始まり毎月發表する。商品は主として米國の模範的家計簿から得た二十五種の重要生活必需品を選んだものである。一八九〇—一八九九年の相場平均

を基準一〇〇とし指數は單純なる算術平均である。

(ト)ギブソン表

ギブソン表は紐育市卸賣物價の指數表であつて、現在のものは一九一二年に始まり毎週土曜日「マーケットレター」中に發表する。食料品のみ二十二種(植物性食物十三種、動物性食物九種)を採用し秤量法はダン表に倣つた。

以上は英米獨の物價指數に就て述べたのであるが此外佛、伊、蘭、白等凡そ文明國と稱せられる國に於て指數のない所はなく、物價統計のない國は文明國とは稱し得られざるの狀態となつた。終に本邦の物價指數について一言する。

(四)日本

我國に於ける物價指數の主なるものは日本銀行物價指數表、商工省物價指數表、東京商工會議所物價指數表、東洋經濟新報社の物價指數表等であるが尙ほ此外にダイヤモンド社物價指數、三井銀行卸賣物價指數表、大阪朝日新聞社の大阪卸賣物價指數表、各大都市商工會議所の物價指數表等がある。

(イ)日本銀行物價指數表。

日本銀行の物價指數は東京市に於ける重要商品の物價指數であつて明治三十三年(西曆一九〇〇年)十月を一〇〇とし、五十六種商品の各月平均卸相場に對し單純算術平均を用ゐて算出したものであ

る。選擇した商品中には同種類に屬するものもあるが之は畢竟秤量を施したものと見ていい。其商品は次の如し。

米、大麥、裸麥、小麥、大豆、小豆、小麥粉、牛肉、硫酸安母尼亞、魚肥、油、糟、砂糖、製茶、鹽、味噌、醬油、日本酒、鯉節、鶏卵、油、西洋蓂、生絲、羽二重、絹半巾、甲斐絹、絹裏地、眞綿、綿絲、白木綿、金巾、縹綿、麻、フランネル、羅紗、モスリン、毛織絲、藍、木材、洋鐵、洋釘、銅、鉛、石材、煉瓦、瓦、セメント、疊表、板硝子、日本紙、洋紙、苛性曹達、皮革、燐寸、石炭、石油、炭、薪。

今明治三十三年以後の物價指數を掲げれば次の如し。

年次	指數
明治33	100.00
34	95.57
35	96.90
36	103.09
37	108.36
38	116.36
39	119.75
40	129.29
41	124.55
42	118.76
43	120.30
44	124.70
大正1	132.07
2	132.34
3	126.31
4	127.84
5	154.57
6	194.50
7	254.77
8	311.98
9	343.19
10	265.09
11	259.00
12	263.48
13	273.20
14	267.84
昭和1	236.65
2	224.63
3	226.10
4	219.83
5	181.00

又大正十三年以降の月次平均指數を挙げれば次の如し。

	同十三年	同十四年	同十五年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
一月	278.96	282.71	254.23	224.41	224.11	227.86	201.4
二月	274.82	277.86	249.23	226.75	223.88	226.20	199.8
三月	272.09	270.32	243.89	226.55	223.88	226.23	195.9
四月	273.36	266.86	238.91	225.11	224.48	225.13	192.8
五月	271.11	263.75	234.57	226.20	226.88	223.00	189.4
六月	263.95	264.43	234.75	227.05	223.46	221.71	181.2
七月	258.39	261.36	236.46	224.64	223.18	219.57	176.6
八月	264.75	264.79	234.04	221.57	224.98	218.45	175.6
九月	273.14	266.11	232.18	223.59	229.82	217.54	171.5
十月	281.75	265.14	230.39	224.71	229.71	216.21	164.6
十一月	283.57	261.46	226.87	222.86	229.07	211.09	162.2
十二月	282.45	256.23	224.32	222.32	229.75	204.96	160.8
平均	273.20	267.84	236.65	224.63	226.10	219.83	181.0

各商品の相場はあらかじめ一定の商店、會社、組合事務所等に配付して置いた毎月上、中、下旬の平均相場を記入せしめ、是を蒐集して決定するのである。

尙、日本銀行では此卸賣指數の外に東京小賣物價指數を出してゐる。之は大正三年七月（歐洲戰爭勃發の月）の物價を一〇〇として算出したものであつて品目數は食料品四十二、燃料燈火六、服飾用品二十、其他三十二合計百種であり、卸賣指數と同じく單純算術平均法によつてゐるのである。

(口) 商工省物價指數表

日本銀行物價指數は東京市のみに関するものであるけれども商工省物價指數は全國一般に関するものである。而も此の指數は本邦指數中最も古いものであつて其の創始は明治十七年にかゝる。然し乍ら歴史が古いだけに其の構造は屢々改造され、明治十七年より現今まで一貫して比較することは困難である。即ち明治十七年乃至三十二年までは各府縣廳三十一



地方に命じて二十五品目の貨物の価格を申達せしめ、之を基礎として全國指數を算出してゐたのであるが、地方官廳がかゝる調査を行ふことは不適當であつた爲め其材料の中には不完全なりと思はれるものが多かつた。其結果明治三十三年に之を改め、二十六都市の商業會議所から材料を集めることゝし、此年度を基準として品目も五十二に増加した。然し乍ら之では未だ品目が少く重要商品で之に採用されてゐないものが多數あることを發見し、遂に大正八年五月限り廢止されて第三の物貨指數を調製することゝなつた。これは八十七品目で、調査地方は前に比し半減し、東京、大阪、神戸、京都、名古屋、横濱、廣島、金澤、仙臺、小樽、福岡、新潟、高知の十三都市となつたのである。然し乍ら此指數も其基礎年度たる明治三十三年は餘りに古く、指數を表はす數字が益々膨大となるといふ理由で大正十二年又其調製を中止することゝなつたのである。四回目に改められた物貨指數の基礎指數一〇〇は大正十年乃至十二年の全三年平均價格を以て之に當てたのであり且つ其品目數も日本銀行指數と同じく五十六種に減少した。然し其品目は日本銀行指數の商品とはやゝ異なるのである。

(ハ)東京商工會議所物價指數

此指數も前者同様其構造が變遷してゐる。即ち最初の組織は明治三十三年の平均相場を基準一〇〇として毎月指數を算出したものである。其材料は市内主要の組合又は卸賣店等より月三回報告せしめた卸賣價格であつて、十日間分を合計平均し、更に之を三回集めて三分し一ヶ月の指數を算出するの

である。其商品は最初は六部類五十二種を採用した。即ち植物性食料品十四(穀類六、同加工品八)、動物性食料品五、衣服原料及材料十二、金屬類三、燃料四、木材及板類七、雜品七である。此分類は大體倫敦スタチスト指數の分類法に基いたものであり、東京商工會議所自らいふところによると一般商況の参考用よりも寧ろ日常生活研究の資料に供することを目的としたものであるといふ。然し乍ら此指數は大正八年限り中止され新に大正九年から卸賣物價指數と小賣物價指數の二種を出すことゝなつた。前者は毎月一回の調査で大正九年下半年平均相場を一〇〇としてゐる。品目は穀類蔬菜十五、飲料及調味料九、肉類及魚類十、衣料品九、建築材料品二十、肥料及飼料七、雜類十一の七部類八十一品である。後者即ち小賣物價指數は毎月二回、一日、十五日の調査によるものであつて品目は六部類四十七品に上る。即ち穀類及蔬菜類十、嗜好品及調味料八、肉類及魚類八、雜食料品七、衣料品七、雜品七である。尙之は一般の指數の様に固定基準法によらず、連鎖基準法によつたのであつて(註參照)前年の同月同日を基準一〇〇としたものと、其期の直前の相場(例へば五月十五日ならば五月一日の相場)を一〇〇としたものとの二種の連鎖式指數を示してゐるのである。そして其平均方法は何れも皆單純算術平均によつてゐる。

(註)固定基準法とは或る一定期間の物價を基準一〇〇とし、其後は何時も之を基準として指數を算出する方法である。例へば、

明治三十三年	一〇〇、〇〇
同 三十四年	九五、九七
同 三十五年	九六、九〇
同 三十六年	一〇三、〇九
同 三十七年	一〇八、三六

の如く三十四年以後の指數は何時も三十三年を基準として算出されてゐるのである。然るに連鎖基準法とは基準が次から次へと順次に變つて行く方法であつて、例へば、

明治三十三年	一〇〇、〇〇		
同 三十四年	五九、九七	一〇〇、〇〇	
同 三十五年		一〇〇、九七	一〇〇、〇〇
同 三十六年			一〇三、二九
同 三十七年			一〇五、一一

の如く三十五年は三十四年を基準とし、三十六年は三十五年を基準とし……順次此の様に移行行くものである。商工會議所の指數表は此の例の様に直前の相場を基準としてゆくものと、間を飛んで一年前の同月同日の相場を一々基準にしてゆくものと二種があるのである。

(二) 東洋經濟新報物價表

東洋經濟新報社の物價指數は明治三十四年七月から開始されたが大正元年から二年の間に大改正を加へ品數を増加すると共に大正二年一月末を基準一〇〇とした。品目は穀物其他の食料品、織物及同

原料、金屬、雜品の五類に分ち更に其雜品を燃料、建築材料、工業用品、肥料、印刷料紙の五種に分つた。指數の基礎たるべき商品の相場は東京市中の信用ある製造業者又は商店より受けたる報告によるのであつて、相場決定の日附は大正八年九月までは各月末調であつたが其後幾多の改正を経て大正十四年六月以來は各月最終の火曜日によつてゐる。

第五項 物價指數算出上の注意

正當な物價指數を求める爲には適當なる貨物と價格を選ばなければならない。例へば貴金屬、骨董品の如き稀小性を有する貨物や火災時に於ける例外的價格を選ぶべからざることとは勿論である。而して此の選べるべき貨物並に價格に就ては一般學者の見解は殆んど一致してゐるのである。今左に順次之につき説明を試みよう。

(一) 價格の選定

指數計算に用ひる物價は商品取引所の公定相場によるか、又此相場を得ることが出来なかつたときは信用ある大商店の卸賣相場によらなければならぬ。蓋し取引所の公定相場は全國又は内外國に於ける需要供給を一ヶ所に集中し、多數の商人が互に競争して之を定めるものである爲め公平な眞實の價格と看做して差支ないからである。又此の相場は公然世間に發表される爲め容易に之を知り得る特長もあり、「エコノミスト」表、ソーアーベック表、スタチスト表等が共に此相場を用ひてゐるのも此等

の理由に基くのである。

又論者の中には物價の算定には小賣價格を以てすべしといふ者もある。其理由は社會生活と直接の關係を有する貨物の價格は、其貨物が實際直接に消費者の手に渡る時の價格でなければならぬ。従つて小賣相場こそは此目的を果す好適のものであると。然し乍ら此論は小賣價格の實際に觸れた論でない。小賣相場なるものは元來、場所の異なるに従つて非常に價格の相違を來すものであり、中央市場よりの遠近、土地の狀況等によつて各地方特殊の事情によつて變動を行ふものである故、標準的な性質を有せず、従つて全國一般の物價變動を調査する爲には不適當であるといはなければならぬ。然るに卸賣價格は一般的の需給關係によつて決定され、其相場の影響は各地に平均に及ぼし、其貨物の中心價格を形成するものである故、貨幣價值の測定といふ標準的な目的を果させる爲には此の卸賣價格によつて物價指數を算出した方が寧ろ適當であるといふべきである。ゼートベイヤが病院、救命院、陸軍經理部等の公共機關の買入れた貨物の代價を以て指數算出に宛てたのも、之等公共機關は寧ろ卸賣價格によつて商品を買入れることを常とするからである。

(二)貨物の選定

指數算出の爲に用ひられる貨物は第一に、

(イ)供給が豊富で而も永く市場に現はれるものでなければならぬ。

蓋し、供給に制限ある貨物の代價は其騰落が劇しく眞正の標準とすることが出来ないからである。既に第一の條件に於て取引所の公定相場又は卸賣相場によつて物價を算出すべしといふ以上は貨物も亦標準賣買の行はれるものであるべきは明かであつて、此條件は第一の條件に關聯して必要を生ずるのである。

(ロ)次に選ばれるべき貨物の數はあまりに少數であつてはならない。

指數計算の簡單を望めば貨物の數は勢ひ少數とならざるを得ないけれども、あまりに少數とすれば一貨物又は少數の貨物の特殊の變動によつて指數全體が左右されることとなり、正確なる物價指數を算出する爲には望むべからざることである。即ち貨物の數が多いときは或る貨物に起つた意外の變動も他の貨物に起る反對の變動によつて相殺されるが貨物が少數であるときは此作用を望むことが出来ない。尤もミツチエルは貨物の數及種類のみを異にする六種の指數を作製して貨物の數による指數の價値を比較した結果、少數の指數も多數の指數も其結果は大體同様であることを述べたが、正確に指數の變動を知る爲には商品の數がなるべく多數なるを以て良しとすることはいふまでもない。

(ハ)種類の異なる貨物を選ぶこと。

次に、選ばれるべき貨物は他の貨物と種類に於てなるべく重複しないやうに注意せねばならぬ。例へば棉花を選ぶと同時に綿絲及綿織物を選ぶとすれば棉花が上れば綿絲及綿織物も同時に上り物價指數

に三重の騰貴の影響を及ぼすに至るであらう。一八六三—六五年の「エコノミスト」の指數に於ては二十二種の商品の中、四種は棉花及其製造品から成つてゐた爲め南北戦争の際、棉花の輸入が杜絶して其代價が騰貴したときは棉花一種の騰貴により、其指數は過大に膨脹せざるを得なかつた。斯くの如きは物價の平準を計る物價指數の本質に違背するといふべきである。さて以上の如く製造品の場合には原料品と重複する虞があるから、其貨物の選擇には相當注意しなければならぬが、食料品の如き獨立の貨物をとるときは其の騰落は製造品ほど他に影響を及ぼさない故、計算を重複させる虞が少なう。

(二)時勢の進歩と共に品質が異動することなき貨物を選ぶこと。

又、貨物は時代の變遷に依つてなるべく品質に異動を生じないものを良しとする。蓋し貨物の品質は時勢の進歩と共に向上し、終に其價格を變動せしめること多きが故である。此傾向は特に製造工藝品に於て著しいものがあるから、此點から見れば原料品・食料品を指數算出に使用することは優れた方法であるといふべく各時代に於ける物價の高低を比較する爲には正確なる方法であると云ひ得る。

(三)時期の選定

(イ)算出の基礎となる時期は物價變動の劇甚ならざる時を選ぶこと。

指數算出の基礎とする時期は一般物價に於て最少の變動を現はす時期を選まねばならぬ。此見地よ

りいへば彼のエコノミスト社が基準とした一八四五—五〇年の六年間は恐慌の時期を包含してゐるから此要件に反してゐるといふべきである。

(ロ)指數は一年の平均相場に基くべきこと。

物價は一年の平均相場によるを以て良しとし、特定の時に現はれたものを取つてはならない。蓋し物價は時季により著しい變動があるからであつて、確實の標準を得る爲には數年の平均を以て之に充てることが適當である。此點に於てソーアーベック氏の算出法(一年の平均)はエコノミスト社の方法(一月一日と七月一日の相場のみをとる)に比べて勝つてゐるといふべきである。

(四)平均法の選定

次に物價指數の算出法として問題となるのは如何なる平均法によるべきかといふ問題之である。平均には算術平均、幾何平均、調和平均、中位數等があることは前章に略述した通りであるが之等の平均中、物價指數の算出には何の平均數が最も適當であるかといふことは學者間に於ても尙議論が一定してゐないのである。今記憶を新にする爲に各種平均の例を挙げれば例へば4と25いふ二數があるとき、其合計を二で割つた 14.5 は即ち算術平均である。幾何平均をとれば $\sqrt{4 \times 25} = 10$ となり、調和平均をとれば $\frac{1}{\frac{1}{4} + \frac{1}{25}} = 6.25$ となる。中位數とは各數字を大小の順に従ひ配列した場合に諸項の中心に位する數字をさふのである。例へば茲に8.10.5.13.9とさふ五個の數字がある場合に之を順次13.10

9.8.5に配列するときは9は即ち之等諸數字の中位數である。

是等の諸平均を物價指數の算出に應用するにつき其優劣に關して始めて論を起したものはジエボンスである。彼は一八六三年其見解を發表し、幾何平均を以て最も優れるものなりと論結した。彼の所説によれば例へばコ、アの價が二倍に騰貴し、クロープの價が半分以下落したときは貨幣價值はコ、アに對しては半分となり、クロープに對しては二倍となる故、二商品に對する貨幣價值は以前と變りがない筈である。然るに算術平均によるときは $\frac{200+50}{2} = 125$ となり二割五分の騰貴となるが幾何平均によれば $\sqrt{200 \times 50} = 100$ となつて騰落がない。之れ幾何平均の優る所以である。又幾何平均は算術平均よりも常に小なる數字を得る故、或る特別に生じた極端なる變動をして指數に小なる影響を及ぼし、斯かる變動を平均數の上に於て抑制することが出来る特長をも有すると。

ジエボンスの議論は直ちにラスパイレス教授によつて反駁された。今其の説く所をきけば要するに「ジエボンス氏の引いた數字に従ひ、コ、ア、クロープ各々百斤百圓（假に日本の單位で表はす）であつたものがコ、アは百斤二百圓となり、クロープは百斤五十圓となつたとすれば、價格變動後は各百斤を買ふ爲には二百五十圓を要することとなり變動前の二百圓に比し正に二割五分の騰貴である。之れ即ち算術平均 $\left(\frac{200+50}{2} = 125 \right)$ の結果と等しい。故に幾何平均よりも寧ろ算術平均の方が事實に則してゐるものである」と。

ジエボンスの論は其後ヴェスターガード、ウォルシュ氏等により是認せられ、ラフリン氏によつて反對され、未だ其優劣を斷することが出来ないのである。然しながら幾何平均は算術平均に比して變動が少く、従つて各價格の僅少の變動は鋭敏に表現し得ないといふ非難は免れ得ないのである。即ちソーアーベックは自己の指數につき之を試み左の如き結果を得た。

年	次	1893	1894	1880
幾何平均		60.4	60.9	87.0
算術平均		62.1	62.9	87.8
秤量算術平均		60.8	62.0	87.3

右の如く幾何平均は常に算術平均よりも低い結果を示してゐるのである。

調和平均は其計算が煩雜である爲め一般學者の迎ふる所とならないが、此方法を貨幣價值の測定に利用した人は伊太利の統計學者メッセダリヤ教授である。氏は調和平均は貨幣の一定量が購買し得る貨物の分量を表はすものであり、算術平均は貨物の一定量が購買し得る貨幣の分量を示すものであるとしてゐる。

中位數の効用を認めたのはエツヂウォース教授である。氏は多數の價格があるときは其の中位數をとるべく、此中位數は各數字間の差が甚しくなければ算術平均に近いのであつて、かゝる中位數は少數貨物の價格に著しい變動がある場合に於ては其勢力を殺ぐ利益があると云つてゐる。

今是等平均数の利害得失を見るに、算術平均は計算は簡單であるが相場に激變があつた場合には、著しい影響を受けて小なる數字を無視する傾がある。又幾何平均は計算が頗る繁雜であつて小なる數字の影響を受けること多く相場の變動を鋭敏に表はさない缺點を有する。調和平均は幾何平均よりも更に相場の變動を表はさないが例外的激變によつて影響を蒙ることの少い特長を有してゐる。又中位数は小なる數字が多く大なる數字の少いときに適當である。然し乍ら是等諸平均の中、何れが統計上合理的であるかは絶對的にいふことは出来ないものであつて、例へば物價にさしたる變動なく、而も二個の時期に各貨物の賣買せられる額に變化なしと認め得る場合に、其二個の時期に支拂ふべき公平の金額を知らうとすれば算術平均を以て最良とし、各貨物の賣買額の比例如何に拘はらず其全體に對する貨幣購買力の消長を知るためには幾何平均を以て良しとする。又諸貨物中、其少數のものゝ相場に激變があつて多數のものゝ相場に變動の少いときは調和平均を以て最も適當なりとするのである。

平均法の選定の中第二に問題となるのは指數算出に用ひる貨物について輕重の差別を設けるの可否である。思ふに貨物には一國經濟上に於ける關係の重大なものと輕少なるものとがあつて例へば米と煉瓦の重要さを同一に見ることは少くとも誤であらう。即ち米の値段が二割騰貴したと同時に煉瓦の値段が二割下落したとき兩者に重みをつけないとすれば此増減は互に相殺され何等の變動を示さないけれども米は國民日常の生活資料として最も重要な消費品であつて取引高も多く、其騰貴の關係の重

要なることは煉瓦の類と同一ではない。エコノミスト及ソーアーベック兩表に於ては輕重の差別を設けず悉く同一の重みを與へてゐるけれどもこれは其算出法の宜しきを得たものではない。故に單純に平均指數を算出せず各種貨物の國民經濟上に於ける關係の輕重に應じて相當の數を各種の指數に乘じ然る後に平均數を算出すべしといふ説がある。之はバルグレー氏が一八八七年商工業不景氣調査委員會第三回報告に於て發表した指數算出法であつて、氏は各種指數輕重の程度を區別する標準として内國に於ける消費量を用ひた。かゝる方法は所謂「秤量平均」と稱せられるものであつて實例を以て示せば、

初年	小麥	銀	肉	砂糖	綿	平均
1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
次年	77	60	90	40	85	70、4

右の表に於ては平均指數は1000から70、四に減少したが、此減少について有力なものは砂糖、銀、小麥である。然し乍ら銀の如きは國民消費に重大な關係のある貨物ではなく、又砂糖の如きものも一時的に暴落したのであるから確實な平均指數は寧ろ70、四以上でありといふべく、これを切實に表示しようとするのが即ち「秤量平均」の目的とする所なのである。即ち

次年度の指數	小麥	銀	肉	砂糖	綿	合計	平均
77	60	90	40	85	三五二	七〇、四	

4 " 1 "	100	25
	300	116.66
	100	38.88

然し乍らピアソンの此非難は普通行はれる單純な算術平均に對する非難たるに止まつて物價指數全部に對する非難といふことは出來ない。何となれば、ピアソン自身が正確なりとした前記の平均（一〇〇から五〇に下落したのが正當なりといふ平均）は物價指數に於ても亦行はれる總和平均法であるからである。

(□)幾何平均に對する非難

次にピアソンはジェボンスの主張した幾何平均をも次の例を以て排斥してゐる。

	變動前指數	變動後指數
(1) A 商品 50ターレルより 100ターレルに騰貴	100	200
B " 100 " " 50 に下落	100	50
(2) A " 100 " " 200 に騰貴	100	200
B " 100 " " 50 に下落	100	50
(3) A " 50 " " 100 に騰貴	100	200
B " 200 " " 100 に下落	100	50

幾何平均によるときは二の場合とも變動前には $\sqrt{100 \times 100} = 100$ 變動後には $\sqrt{200 \times 50} = 100$ となつ

て物價指數には變化がないこととなる。然るに實際の購買力の變化によれば(1)の場合は合計百五十ターレルより百五十ターレルとなつて變化なく、(2)の場合には二百ターレルより二百五十ターレルとなつて二割五分の騰貴を示し、(3)の場合には二百五十ターレルにより二百ターレルとなつて二割の下落を示してゐる。此の様に事實異つてゐるものを幾何平均の如く凡て變化なしとするのは誤であつて、従つて之を以て貸借の標準、延期支拂の標準とすることは不當であるといふのである。

(ハ)秤量平均に對する非難

最後にピアソンは秤量平均をも非難してゐる。即ちピアソンの擧げた例によれば、茲に等しい重要さを有する十種の貨物ありと假定し、此の中五種の貨物は二倍に騰貴し、他の五種の貨物は半額に下落したとする。此場合單純算術平均によれば、

$$\frac{5 \times 200 + 5 \times 50}{10} = 125$$

である。而して若し之等十種の貨物の重要さが價格の騰貴と同程度に反對に減少し、下落と同程度に反對に増加するとする。即ち數學的の云ひ方によれば、貨物の重要程度が價格の騰落の率と逆數的關係にあるものと假定すれば、理論上より云つて物價は何等の變化をも示さない結果となる筈である。

今例へば二倍に騰貴した(即ち二〇〇)貨物の重要程度が $\frac{1}{200}$ となり、半落した(即ち五〇)貨物の重要程度が $\frac{1}{50}$ となるとすれば理論上其結果は何等の變動をも見ず依然一〇〇であるべきであ

る。然るに物價指數に於ける秤量平均法の式

$$\frac{W_1 \times x_1 + W_2 \times x_2 + \dots + W_n \times x_n}{W_1 + W_2 + \dots + W_n}$$

によつて計算すれば

$$\frac{5 \times 200 \times \frac{1}{200} + 5 \times 50 \times \frac{1}{50}}{5 + 5} = \frac{5 \times 0.005 + 5 \times 0.02}{1.25} = 1.25$$

となつて理論に反するのである。のみならず或る人はパンは多く消費するが肉を少量しか消費せず、又或る人は煙草や酒を飲むが他の人は酒や煙草は飲まずに書物や繪畫を蒐集する等、各人の消費状態は種々雑多である。故に物價の變動が人々の物質上の事情に及ぼす影響を判断する爲には人々を凡ゆる部類に區分する必要があるであらう。何となれば貨物の人による重要さは、個々の人の欲望によつて異なるからである。之が一般の人に適用せんとする秤量法に對するピアソンの非難である。

以上の如く物價指數は諸方面に於て免るべからざる缺點を有するものとしてピアソンは「物價指數であると否とを問はず物價の平均變動を計算し、表示せんとする總ての企ては拋棄すべきである」との結論に達してゐるのである。

(二) エツヂウオースの物價指數辯護論

ピアソンの物價指數否定論は直ちにオックスフォード大學名譽教授エツヂウオース氏により覆された。エツヂウオースによればピアソンが否定の論證として掲げた總ての例は統計學成立の中心となる蓋然性理論を無視したものであり、誤差法則に於ける分布の傾向を最初から考へないものである。茲にエツヂウオースの云ふ所を要約すれば、

「ピアソンの反對論を煎じつめれば、畢竟物價指數は信じ得ない。何となれば使用されたる秤量法の標準の異なるに従つて著しく差異ある結果を來すが故であるといふことになる。而して此反對は人爲的に簡單化した指數についていへば眞理であるかも知れないが、吾々が實際に取扱ふ數字に就て云へば眞理ではないのである。又算術平均と幾何平均とを用ひることに依て計算の結果は著しく異るといふ反對論に對しても同様の答辯をすることが出来る。ピアソンの例は覆さんが爲に造り上げた想像上の例に於ては眞理であるけれども具體の場合に於ては眞理ではない。實際上に於て多種の貨物を多數に網羅した物價指數に於ては算術平均も幾何平均も大なる差異があるものではない。之れ實に大量觀察に於ては如何なる平均も、他の平均と殆んど大差がないといふ一般原則の一場合である。例へばエリオットの調査した例によれば、一千人の身長の算術平均は六八・二〇時であつた。然るに各人の身長を自乗したものの算術平均を開平したものは六八・二五であり、又各々を三乗したものの算術平均を開立したものは六八・三〇であつた。而して幾何平均は六八・一六となる。

又ジエボンスが三十九種の貨物につき算術平均と幾何平均とを試みた結果は次の通りであつた。

年	次	1851	1853	1855	1857	1859
幾何平均		92.4	111.3	117.6	128.8	116.0
算術平均		94.6	112.4	119.0	134.0	119.0

又ソーアーベックが四十五種の貨物に就て計算した結果によれば、

年	次	1880	1894
幾何平均		86.97	60.90
算術平均(單純)		87.82	62.93
算術平均(秤量)		87.30	62.00

斯くの如く多數の數字を含む實際の例について云へば幾何平均も算術平均も結果に於て甚しい差異あるものではない。即ちピアソンの假設した例は故らに取つた極端な例であつて物價指數の如く多數の數字を取扱ふ實際の場合には適當しないものといふべきである」。

(三)物價指數の效用を決定する標準

物價指數は其調製法の宜しきを得たりや否やと、其物價指數調製の目的に適合せりや否やとの二點に依て其效用の良否が決定される。即ち其調製上より云へば重要な總ての貨物を網羅し、最も精確に其相場を蒐集することを以て理想とするが、此様なことは、實際上到底爲し得る所でないから、出

來得る限り精確に近い表を作ることを以て満足しなければならぬ。然し乍ら自ら精密な表なりと思つて作つた表も尙種々の點に於て瑕疵を生ずる虞があるから其作製には餘程の注意を要するのである。

例へば其蒐集する相場は全國一般のものをとることが困難で特殊の一地方のものを採らざるを得ない場合が多いが、經濟事情は通常地方を異にするによつて甚だしく相違のあるのを免れない。依て一地方の物價指數表は他地方に於て直ちに適用し得べからざることは勿論、各地方の相場も折々突飛な地方的變動をなすことがある爲め數地方の平均相場も必ずしも適當なるものとは言ひ難いのである。

又物價指數表使用の目的が異れば自ら選擇すべき貨物の種類も異にしなければならぬ。例へば一般物價の趨勢を知ることが目的ならば、有形無形を問はず凡ゆる代表的物品を網羅しなければならぬけれども、其目的が勞働者の生活に對する物價の影響を調査するにあるならば、一般貨物を網羅した指數表は却つて其用をなさいのである。即ち此場合には勞働者階級の特に多く消費する物品を選んで之より指數表を作り上げなければならぬのである。

要するに、物價指數はよく其使用の目的に適ひ、調製宜しきを得て始めて其效用を完うし得るのであつて、今所要の條件を具備する表を作り得たと假定して其效用を擧げれば、

1. 長期に亘つて物價の大勢を知ることが得、及各時代に於ける經濟狀況を察知することが出来る。
2. 賣買交換等を不安なく行はしめる爲めの物價平準の標準を得る。

- 3. 長時期に亘る貸借を公平に辨濟せしめる標準を供する。
- 4. 各地方別若くは各階級別、職業別等の賃銀及収入の購買力につき其消長を測定する手段を供する。

第四節 物價の大勢

古代に於ける物價平準については資料に乏しい爲め其の詳細を知ることが出来ないが、過去數世紀間の物價は十九世紀の後半に比べて遙に低かつたことが明かである。ウイービーの報告によれば歐洲の物價は一四五〇年より一六五〇年までは一〇〇より一五〇迄騰貴したといふ。又ゼイトベヤによれば西曆八〇〇年カロリンガー時代以後十八世紀の中葉に至る歐洲の物價平準は約四倍の騰貴をなしたといふ。又他の學者の説によれば八世紀より九世紀に至る貨幣の價値は十九世紀に於けるよりも七倍乃至十倍大であつたといふ。ブレスラウ市の記録によれば十七世紀初には小麥一シエツフェル(約三斗)に對し二乃至三・五グロツシエンであつて之を一八〇五年の銀相場に換算すれば一二乃至二一銀グロツシエンであつたが二十世紀初には四四乃至一五〇銀グロツシエンに騰貴した故、此間四倍乃至七倍の騰貴があつたわけである。往時に於ける物價變動の特長を考へれば其動搖が甚しかつたといふことが出来る。即ち前述ブラレスラウ市の記録によれば(裸麥一シエツフェルの價格)

年次	價格	年次	價格
一四三五	七グロツシエン	一五七七	一二グロツシエン
一四三九	三〇	一六三九	四ギルダー六
一五四一	七	一七二一	二ターレル五
一五五一	四八		
一五七一	六八		

此の様な物價の動搖は十九世紀に入つて殆んど停止した。尤も今日に於ても物價の騰落はないことはないが往時に於ける様に突飛な變動は少なくなつたのである。即ち獨逸に於ても一八七一年より一九一三年迄の間の物價の開きは約一五〇%即ち一倍半であつて往時のやうに六倍、七倍といふ程の大なる開きはなかつたやうである。偶々物價平準を攪亂するやうなことがあつてもそれは主として貨幣信用の失墜から來てるのであつて、正當の價値ある貨幣を以て之を計量すれば甚だしい變動はなかつたといふことが出来る。而してかゝる現代の物價平準の安定性は何處から來てゐるかといへば、それは主として交通機關並に其方法の改善、商業の物價均衡の作用、世界經濟の發達に起因するものと解して差支がない。

歐洲戦前までに於ては一八七三年の物價が最高である。而して其後は如何といふに(一)一八七三年の恐慌の爲め不景氣となつたこと、(二)獨逸が普佛戦争後銀貨本位を捨て、金貨本位を採用したのを

始めとし、佛蘭西、印度、米國等各國競ふて金貨本位を採用し、金に對する需要が激増した爲め銀の價が下落し、曾ては金一に對する銀一五又は一五・五であつたものが金一に對し銀四〇といふやうな程度の下落をなした事、(三)機械工業が發達し、商品の供給從來に比して遙かに増加したこと等の爲め物價は漸次低落したのである。

然るに一八七九年以降金の採掘が盛となり其結果金の量が増加した爲め各國共物價漸騰の趨勢があつたが歐洲戰爭勃發して以來は空前の大暴騰を來した。即ち獨逸の如き例外は暫らく除くとしても最低戦前の二〇〇%最高は六〇〇%に迄の騰貴を見たのである。然るに戰爭終結と共に各國共物價は漸次下落の一途をたどり空前の不景氣を招來したと共に産業界の委靡沈滞、失業者の續出、諸多の金融恐慌を起し今や各國共其不景氣打開策に極力腐心しつゝある。

世界に於ける物價の趨勢は大略以上の如くであるが、かゝる波瀾重疊を極めた經濟界の事情を如實に精確に表はすものは實に本章に於て縷々叙述した物價指數であらねばならぬ。正確なる物價指數を照尺としてのみ始めて經濟界の状態は的確に判斷せらるべきものである。

第三章 外國貿易統計

第一節 我國貿易内容の發達

明治維新に至るまで我國が殆んど自給自足の國であつたことはいふまでもない。即ち徳川幕府の鎖國政策により和蘭・支那を除くの外は全く貿易を禁止せられ、而も蘭支兩國との貿易も年々の額が制限され、又貨物の種類も寧ろ珍奇なるものを主とし、國民一般の生活とは關係する所がなかつた。然るに維新以後は我國も世界商戰の競争場裡に入り自給自足の經濟組織を脱出して國民經濟の發展は全く外國貿易に依て支配されるに及んでは貿易の重要さも亦昔日の比ではなくなつたのである。産業上の地位よりいへば日本は日清戰爭以前に於ては農業國ともいふべく、其主たる經濟は農業によつて行はれ工業は未だ手工業若くは家内工業たる地位を脱しなかつたのであるが日清戦後に至り漸く近代式の工場工業が現はれ、次で日露戰爭を経て其發達は益々顯著となり、最後に歐洲戰爭を轉機として貿易上に於ては我國は遂に英米と同様、工業國と看做し得る地位にまで達したのである。こゝに貿易上に於ける工業國とは原料品を少なく、全製品を多く輸出し、原料品を多く全製品を少しく輸入するが

如き國を指すのである。今一九二〇年の統計によつて英米兩國と輸入品の率を比較してみると我國が決して兩國に劣らない工業國たることを知るであらう。

國名	原料品	食料品	半製品	全製品
日本	50.3%	16.1%	20.8%	13.0%
英國	39.6%	43.7%	—	16.3%
米國	40.4%	26.9%	19.5%	13.7%

斯くの如く我國は貿易上に於ては最早工業國とも看做し得るのであるが、尙我國貿易發達の状態を示す爲め明治元年以降の内地貿易額を示せば次の如くなる。

年次	輸出	輸入	合計	超過
明治元年	15,533,473	10,693,072	26,226,545	4,800,401
二	12,908,978	20,783,633	33,692,611	7,874,655
三	14,543,033	35,741,637	50,284,670	19,198,624
四	17,968,609	21,926,728	39,895,337	3,948,119
五	17,026,647	26,174,815	43,201,462	9,148,168
六	22,635,441	28,107,390	50,742,831	6,471,949
七	19,377,306	23,461,814	42,839,120	4,144,508
八	18,621,111	29,925,628	48,546,739	11,364,517
九	27,721,528	23,964,679	51,686,207	3,746,849

年次	輸出	輸入	合計	超過
明治元年	23,344,521	27,420,903	50,765,424	4,072,381
一	25,988,140	32,874,834	58,862,974	6,886,694
二	28,175,770	32,953,002	61,128,772	4,777,233
三	28,395,387	36,626,601	65,021,988	8,231,214
四	31,058,888	31,191,246	62,250,134	132,358
五	37,721,751	29,446,594	67,168,345	8,275,157
六	36,268,030	28,444,842	64,712,872	7,823,178
七	33,871,466	29,672,647	63,544,113	4,198,819
八	37,146,691	29,356,968	66,503,659	7,789,733
九	48,896,313	32,168,432	81,064,745	16,707,881
一〇	52,407,681	44,304,252	96,711,933	8,103,429
一一	65,705,510	65,455,234	131,160,744	250,276
一二	70,607,006	66,103,767	136,710,773	3,956,939
一三	56,603,506	81,788,581	138,392,087	25,125,075
一四	79,527,272	62,927,268	142,454,540	16,600,004
一五	91,102,754	71,326,080	162,428,834	19,776,674
一六	89,722,865	88,257,172	177,980,037	1,455,693
一七	113,246,086	117,481,955	230,728,041	4,235,869
一八	136,122,178	129,260,578	265,382,756	6,851,600
一九	117,482,761	171,674,474	289,157,235	53,831,733
二〇	163,135,077	219,300,772	382,435,849	56,165,695
二一	165,753,753	277,521,157	443,274,910	111,748,404
二二	214,929,894	220,401,926	435,331,820	5,472,031
二三	204,429,994	287,261,846	491,691,840	82,831,852

大正	昭和
三三	一四
三五	元
三六	二
三七	三
三八	元
三九	四
四〇	元
四一	四
四二	元
四三	四
四四	元
四五	四
四六	元
四七	四
四八	元
四九	四
五〇	元
五一	四
五二	元
五三	四
五四	元
五五	四
五六	元
五七	四
五八	元
五九	四
六〇	元
六一	四
六二	元
六三	四
六四	元
六五	四
六六	元
六七	四
六八	元
六九	四
七〇	元
七一	四
七二	元
七三	四
七四	元
七五	四
七六	元
七七	四
七八	元
七九	四
八〇	元
八一	四
八二	元
八三	四
八四	元
八五	四
八六	元
八七	四
八八	元
八九	四
九〇	元
九一	四
九二	元
九三	四
九四	元
九五	四
九六	元
九七	四
九八	元
九九	四
一〇〇	元

昭和	大正
一四	三三
元	三五
二	三六
三	三七
元	三八
四	三九
元	四〇
四	四一
元	四二
四	四三
元	四四
四	四五
元	四六
四	四七
元	四八
四	四九
元	五〇
四	五一
元	五二
四	五三
元	五四
四	五五
元	五六
四	五七
元	五八
四	五九
元	六〇
四	六一
元	六二
四	六三
元	六四
四	六五
元	六六
四	六七
元	六八
四	六九
元	七〇
四	七一
元	七二
四	七三
元	七四
四	七五
元	七六
四	七七
元	七八
四	七九
元	八〇
四	八一
元	八二
四	八三
元	八四
四	八五
元	八六
四	八七
元	八八
四	八九
元	九〇
四	九一
元	九二
四	九三
元	九四
四	九五
元	九六
四	九七
元	九八
四	九九
元	一〇〇

即ち歐洲大戰當時我國外國貿易の最も殷盛を極めた時の貿易額を明治元年に於ける輸出入額と對照すれば正に百七十倍弱に達してゐるのである。之を人口に割當てれば一人に付明治五年には輸出五十錢、輸入七十九錢に過ぎなかつたものが漸次其高が増加して大正八年には輸出三十六圓六十七錢、輸入三十七圓七十八錢となつてゐる。但し之は歐洲大戰を機として劇増した異常の現象とも見られるが戦後に於ても尙其額に多大の減少を見ないのである。(註)

(註) 大藏省の發表にかゝる明治初年以後の毎年の貿易額を其儘には比較することが出来ない。今其主なる理由を列擧すれば、

(一) 明治初年の各港運上所に於ける統計の不統一並に事務の不熟練。

(二) 幣制の變遷と之に伴ふ金銀貨の騰落。

明治元年より明治十一年まで輸出入商品の價額は凡て金圓を以て表示されたのであるが、明治十二年乃至二十年までは金銀圓混用、同二十一年乃至三十年までは銀圓のみを以て示され、明治三十一年以降現在に至るまでは金圓のみを以て表はされてゐる。之に加ふるに是等金銀圓の下落即ち物價の騰貴は輸出入品數量に非ずして價額を以て表はされた貿易統計の基礎を根本から紊亂せるものをいはねばならぬ。

(三) 輸出入品の評價の標準に變動ありたること。

明治初年には輸出入港に於ける實際の市價を以て輸出入品の評價標準となしたが、明治三十二年以後は輸入品價額は仕出港の原價に荷造費、運賃、保険料其他輸入港に至る迄の諸費用を加へた *C. I. F.* 價格によるものとなり、明治三十七年以後は輸出品の評價は輸出港に於ける價格に包裝費を併せた *F. O. B.* 價格を以て申告せしむることとなつた。

(四)特別貿易の計上法の一定せざりしこと。

特別輸出品としては内外船艦に供給する石炭其他の船用品、在外公館用品、特別輸入品としては海軍船艦及同材料、兵器彈藥、外國公館用品、本邦出漁船輸入品等を一般貿易の中に計上する方法が屢々變更せられてゐる。

以上四の事實の存する爲め、明治初年以降の貿易高を一貫して比較判定することは極めて困難である。されば如何にして之を補正すべきか問題である。(一)の不備なる點は到底精確に補正することが出来ないから唯單に推計に依り其誤差を正すより外に途がない。(二)に對しては總てを金圓に引直すことに依て補正することが出来る。(三)は總ての年度を通じて現制度たる *C. I. F.* 價格に還元するのが最も適當である。但し諸掛は推計によるより外ない。(四)の不備に就ては既に大藏省の累年貿易表に特別輸出入高を加算して更正したものが帝國統計年鑑中に掲げられてある。斯くの如くするときは明治初年以降の貿易高は可成に比較の出来る數字となるけれども貿易數量の不明なことについては未だ充分といふことが出来ぬ。

第二節 外國貿易の發達

古代に於ては各國共主として自足經濟を營んでゐたので國と國との間の交換の現象は殆んど行はれなかつたと云つていい。そして偶々行はれたとしてもそれは王侯貴族の求める贅澤品や珍奇なものばかりで一般人民の生活とは殆んど没交渉であつたのである。此點は前述した我國徳川時代の貿易についても、又王朝時代に於ける我國と唐との間に行はれた貿易品に就て見ても同様なことがいひ得る。

パステール氏の説く所によれば英國で行はれた十一世紀の貿易品も「皮、絹、高價なる寶石及金、種々なる衣類、顔料、酒、油、象牙、眞鍮、銅、錫、銀、硝子」等の如き當時としては上流の人士のみが用ひ得るやうな贅物ばかりであつたのである。獨逸の經濟學者ビュヒャー氏も、古代の人々は自己の作つた物品は自己の一部であるから之を他人の手に渡すのは取も直さず自己を惡魔の手に渡すのと同様だと思つて交換をすることを非常に嫌惡したと云つてゐる。此様に古代に於ける歐羅巴各國の貿易は今日とは比較にならない程幼稚なものであつたのである。

降つて中世紀に於ける歐洲の都市經濟時代も矢張古代と同様、主として自足經濟を營み他と交渉することを好まなかつた爲め外國貿易は依然として振はなかつたのである。然るに近世の初期に至り漸く近代的の中央集權的國家が現はれるに及んで、各國の政治家は國家を富強にする爲めには外國貿易に依ることの有利なるを覺り貿易の振興を企てたけれども尙當時は輸出のみを獎勵して輸入を抑壓し各國競つて極端な保護貿易政策をとつた爲め貿易は豫期した程の發展を遂げることが出来なかつた。こゝに於て經濟學の父と呼ばれるアダム・スミスは其名著富國論に於て大いに此保護貿易政策を攻撃し、爾來英國ではトーマス・マン、テンプル相踵ぎ前世紀の半頃に至りては有名なゴッセン氏出でて

貿易均衡の理を學術的に證明した。そして英國は事實上十九世紀の中頃から自由貿易國となり、一八六〇年代には歐洲諸國は擧げて自由貿易主義を謳歌せんとするの形勢を示したが、其後間もなく獨逸では愛國家リストが出でて、保護政策の價值と必要とを力説した爲めビスマルクが先づ之を實行したのを始めとし、英、蘭、白、丁の諸國を除くの外は悉く保護貿易政策に傾倒し現在に至つてゐるのである。而して自由貿易主義の魁たる英國の如きも近時は完全なる自由貿易を奉ずるものではなく精密機械及絹製品等に對する保護と、財政上の理由により關稅を徵收し、加之十九世紀の末葉に至つては英領殖民地との間に差別關稅をも實行するに至つた。歐洲大戰後開かれたブラッセル、ゼノア、ジュネーブの國際經濟會議に於ては何れも通商自由主義が強調されたが、些の效果を見るに至らず最近の形勢は寧ろ保護主義に傾かんとする傾向を有するのである。

次に外國貿易に就ては種々の點に於て模範的なる英國につき其發達の跡をたづねてみよう。最近英國の貿易額は二十億磅に達せんとする狀勢であるが、一三五四年即ち今を距る約六百年の昔に於ては、輸出は羊毛三萬一千六百五十一囊、羊皮、牛皮凡そ一萬一千貫（三〇三六ハンドレットウエイト）、粗毛布四千七百七十四反、毛絲八百六十一個以上價額合計金二十一萬二千三百三十八磅であり、又輸入は毛絲、蠟、葡萄酒、麻布、水銀、雜貨であつて其總額金三萬八千三百八十五磅に過ぎなかつたのである。以上は同國の稅關報告によつたのであるが斯の如きが正に中世紀英國に於ける外國貿易の實狀であつたのである。

然るに十七世紀に入つては所謂重商主義が旺盛を極め、英國に於ては既に「チュードル」王朝時代から内地工業の發達を獎勵し來つたのであるが此時代に至つて更に和蘭の故知に倣ひ、専ら輸出を獎勵し、海運業を鼓舞して海外の販路を確保せんことを期するに至つた。又此時代に入つては商業は漸次株式組織を以て大規模に行はれるやうになり、彼の一六一二年に設立された東印度會社の如きは即ち其典型的なるものであつて而も政府より絶大な獨占權を附與せられたのである。斯くて其當時英國の貿易高は左記の如き發展を爲すに至つた。

年次	輸入 磅	輸出 磅	合計 磅
一六一三	二、一四二、一五一	二、四八七、四三五	四、六二八、五八六
一六二二	二、六九三、三六	二、三三〇、四三六	四、九三九、七五〇
一六六二	四、〇一六、〇五	二、〇三三、八三三	六、〇三八、八三三
一六六九	四、一九六、一三九	二、〇六三、二七四	六、二五九、四一三
一六九九	五、六四〇、五〇六	六、七八八、一六六	一二、四二八、六七二
一七〇三	四、五二六、五七九	六、六四四、一〇三	一一、一七〇、六八二

然るに都市の膨脹、東印度貿易の解放、並に植民地の發達に促されて英國に於ける貿易額は駁々たる進歩を爲し、十八世紀の末葉から十九世紀の初期に亘る貿易額は左の如き多額を示すに至つた。

自一七七〇年至一八一〇年英國貿易額

年次	輸入 千磅	輸出 千磅	合計 千磅
一七七〇	11,001	11,141	22,142
一七八〇	9,956	11,363	21,319
一七九〇	16,398	17,636	34,034
一八〇〇	28,258	34,382	62,640
一八一〇	39,303	48,439	87,741

加之、英國工業の發達につれて輸入税殊に穀物輸入税の廢止運動が盛となり一八四八年には其頂點に達し有名なコブデン、ブライト等の非穀物條例同盟が成功し、穀物税を全廢して所謂自由貿易主義が凱歌を擧げるやうになつてからは英國の外國貿易は一層顯著な發展を見るやうになつた。即ち左表に示すが如くである。

年次	輸入		輸出		合計 千磅
	千磅	英國品 千磅	外國品 千磅	千磅	
一八五五	143,543	95,688	21,003	126,691	
一八六〇	210,531	135,891	28,630	164,521	
一八七〇	303,257	199,587	44,494	244,081	
一八八五	370,963	223,045	58,359	271,404	
一八八七	362,238	221,414	59,349	280,763	

爾來人口の増加、交通の發達、國際平和の促進等によつて外國貿易は一層其重要性を加ふるに至つた。

年次	輸入		輸出(内國品のみ)		合計 千磅
	千磅	千磅	千磅	千磅	
一九一三	659,160	555,245	430,721	1,184,405	
一九一四	601,161	384,868	1,376,699	1,031,882	
一九一五	752,831	506,280	1,357,230	1,376,699	
一九一六	850,940	501,419	1,521,567	1,786,625	
一九一七	994,487	798,638	2,260,048	1,786,625	
一九一八	1,285,206	1,334,469	3,044,365	2,260,048	
一九一九	1,461,410	703,400	1,647,033	3,044,365	
一九二〇	1,709,896	719,507	1,618,911	3,368,807	
一九二一	94,633	767,258	1,744,940	1,618,911	
一九二二	899,404	800,967	1,938,436	1,744,940	
一九二三	977,682	773,381	2,094,096	1,938,436	
一九二四	1,137,469			2,094,096	
一九二五	1,310,715				

更に世界列國に於ける貿易總額を調査したものをみるに前世紀の末葉即ち一八九〇年に於ては三十

六億磅であつて其内譯は左の通りである。

英帝國	輸出入		合計
	輸入	輸出	
英帝國	六八五、〇三三	五七七、七五六	一、二六二、七八九
* 歐羅巴	八三一、五七九	七四八、四〇六	一、五七九、九八五
ロシア及トルコ	九二、五〇八	九二、八七二	一八五、三八〇
亞細亞	四七、三四四	四八、一八二	九五、五二六
亞米利加	二二、五七	二二、二八六	四四、八〇三
亞弗利加	一四、一八二	一六、〇一八	三〇、一〇〇
總計	一、八八四、一六三	一、七二六、五三〇	三、六〇〇、六八三

* 英帝國、露西亞及土耳其を除く。

然るに歐洲大戰前の一九一二年に於ける世界の貿易額は實に左表の如き巨額を示すに至つた。

一九一二年世界に於ける國際貿易高

英帝國	海上		陸上		合計
	輸入	輸出	輸入	輸出	
英帝國	一、三四四、〇〇〇、〇〇〇	一、三三三、〇〇〇、〇〇〇	一、〇七六、〇〇〇、〇〇〇	一、〇七六、〇〇〇、〇〇〇	二、一五二、〇〇〇、〇〇〇
英殖民地及附屬國	九七六、〇〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇	二、〇七六、〇〇〇、〇〇〇
英帝國	二、三二〇、〇〇〇、〇〇〇	一、四三三、〇〇〇、〇〇〇	二、一七六、〇〇〇、〇〇〇	二、一七六、〇〇〇、〇〇〇	四、三四六、〇〇〇、〇〇〇
* 聯合國	四、三三〇、〇〇〇、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇、〇〇〇	二、六三〇、〇〇〇、〇〇〇
中立國敵國	六、六四〇、〇〇〇、〇〇〇	一、八〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一、八〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一、八〇〇、〇〇〇、〇〇〇	八、四四〇、〇〇〇、〇〇〇
合計	一、三四四、〇〇〇、〇〇〇	一、三三三、〇〇〇、〇〇〇	一、〇七六、〇〇〇、〇〇〇	一、〇七六、〇〇〇、〇〇〇	二、一五二、〇〇〇、〇〇〇

* 聯合國中に北米合衆國並にルーマニアが加盟せざりし當時の數字である。

此表と次表とは英國の Chamber of Shipping of the United Kingdom & Liverpool Steam-ship Owners' Association 發行の報告書に據つたものである。

國名	輸入		輸出		輸出入合計	
	一九〇四	一九二二	一九〇四	一九二二	一九〇四	一九二二
英本國	二〇・九七	一六・九七	一五・一七	一四・七九	一八・一七	一五・九二
英領諸國	一一・六八	一一・六〇	一三・三七	一一・九一	一一・五〇	一一・七五
英帝國合計	三二・六五	二九・五七	二八・五四	二七・七〇	三〇・六七	二八・六七
聯合國	二〇・四三	二二・七三	二二・一八	二〇・一七	二〇・七九	二〇・九九
中立國	三〇・七一	三三・二五	三五・四〇	三七・七三	三三・九七	三四・八八
敵國	一六・二一	一六・四五	一四・八八	一四・四〇	一五・五七	一五・四六
諸外國	六七・三五	七〇・四三	七一・四六	七三・三〇	六九・三三	七三・三三
世界合計	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇

以上は主として英國に就て特に長き説明を加へたのであるが、之を獨逸、佛蘭西、北米合衆國等に就て見るも亦大同小異であつて農耕國より漸次商工國家に移るに従ひ其貿易高は著しく多額に上るのみならず其輸出入の差額は輸入額の側に漸次多きを示すに至るの傾向がある。其理由に就ては後節(第六節)に於て詳述する通りである。

第三節 外國貿易統計の意義

外國貿易統計とは一國の經濟區域を出入する貨物の數量、價額等に關する統計であつて、其目的とする所は自國生産品の販路、數量、價額等を知ると同時に自國民の消費する商品の生産地、數量、價額等に就て詳細な知識を得、以て自國産業の發展並に其商業政策の遂行に資せんとするに外ならな

5。
茲に注意すべきは外國貿易統計に於て調査される場合の國境なるものは、一國の政治的境界ではなくて國民經濟區域の境界なることである。そして現在は何れの國に於ても、税關を設けてゐる爲め畢竟此經濟區域は關稅區域と一致するに至るのである。而してかゝる關稅區域は必ずしも一國の政治的境界と一致するものとは限らない。今其顯著な例は之を獨逸に見るのである。獨逸に於ては一八七九年七月二十日發布の法律により一八八〇年より一九〇六年に至るまでは獨逸帝國ではなくして、獨逸關稅區域の統計であつた。尙ほ詳言すれば獨逸帝國の領域から四自由港たる「ハンブルグ」「クックスハーフェン」「ブレーマーハーフェン」並に「ゲーエステンミュンデ」と「ヘリゴランド島」「エムデン」「ブレーメン」の三關稅除外地域と二三の瑞西境にあるバーデン町村を除き更にルクセンブルグ大公國及填國の二町村「ユングホルツ」及び「ミッテルブルグ」を加へた境界を指すのである。關

稅除外地たる「エムデン」「ブレーメン」は關稅法上では外國であるが貿易統計では自由港と同一の取扱を受け且つ保稅倉庫は關稅區域として之を取扱つてゐる。従つて此兩地との通商は一八八五年十月十五日關稅同盟に加盟以後關稅區域に對する貿易統計中に加へらるゝことゝなつた。然るに又一九〇六年三月一日以降は同年二月七日の法律によつて「ヘリゴランド島」と「バーデン」の二三町村を除く除外せる關稅除外地との貨物の取引は之を獨逸貿易統計に加へることゝなり同時に新統計貨物表を施行することゝなつた。而して此統計貨物表は一九〇六年十二月二十五日發布の關稅表に基いたものである。一九〇六年以後に於ける、獨逸外國貿易統計は獨逸帝國、ルクセンブルグ大公國並に填太利領「ユングホルツ」と「ミッテルブルグ」の二町村に跨つた獨逸經濟區域の統計である。而して此中には「ヘリゴランド島」及二三の「バーデン」關稅除外地を包含しないことは勿論である。

併し乍ら歐洲戰爭後、獨逸は少からず其政治的境界を削減せられた結果として其經濟區域も亦著しく狹隘となつた。即ち「アルサス・ローレン」「東及び西プロシヤの一部」「イランデンブルグ」「ボンメルン」「シュレージエン」「ボーゼン」及び「ライン」の一部は或は一九一八年に或は一九一九年に獨逸經濟區域から離脱し、従つて此等地方の貿易は一九二〇年より戰後に於ける獨逸貿易統計から全然除外せられてゐるのである。關稅同盟から脱退した「ルクセンブルグ」亦然りである。

以上の如くに現今貿易統計は其國民經濟區域即ち國境を出入通過する貨物に大量觀察を下して之に

統計的説明を爲さんとするものである。但し現今列國の貿易統計に於て見るやうに此種の統計は單に其輸出入に關するもの許りでなく之と密接の關係を有する事項即ち保税倉庫、保税工場に於ける貨物の出入、開港に於ける貿易船の出入等をも觀察するを例としてゐる。本邦の外國貿易年表に於て金銀輸出入表、保税工場貨物表、保税倉庫貨物表、加工品表、特別輸出入品表、外國貿易船、滯貨表、收税額表を調査するが如きも亦其一例である。

第四節 外國貿易統計材料

現在各國に於て發表される外國貿易統計は、其國の税關の蒐集する所であるが其計算の基本となる材料は何處から求めるかといふに、輸入の場合には荷受人の申告により、又輸出の場合には荷送人の申告によるのが普通である。然し乍ら荷受人は關税を課せられる關係上其價額を成るべく低く申告せんとする傾向がある、依て其申告價額を正確な價額に引直す爲には是等と利害關係上反對の立場にある税關吏の斧正を要するのであつて、畢竟外國貿易統計の材料なるものは荷送人、荷受人及税關吏の三者の協力によることゝなるのである。而して現今何れの國でも、貨物の輸出入に際しては輸出入申告書によつて必要の事項を申告せしむるやうになつてゐる。英國のやうに自由貿易を標榜する國でも尙統計の必要から輸出は勿論輸入の中無税品に就ても亦ビル、オブ、エントリー (Bill of Entry) を以

て申告せしめ、其商品の種類不明なるものは別にビル・オブ・サイト (Bill of Sight) と稱する書式によつて之を檢査するのである。又有税品の中密輸入を爲さんとして發見せられたものは國家に於て之を沒收し、輸入の中に加へない規定である又旅客携帯品の免税品は列國とも輸入品中に加へない。そして税關により貨物の通過に際し其檢査に精粗寛嚴の差があるから延て其統計の價値に影響を來すことあるは勿論である。

申告の事項に就ては關税法施行規則の示す所によると先づ輸出にあつては船舶の名稱、國籍、貨物の記號、番號、品名、箇數、數量、價格、仕向港及仕向地であり、又輸入にあつては船舶の名稱、國籍、貨物の仕入地、積出地、産出地又は製造地、記號、番號、品名、箇數、數量及價格である。以下是等の中重要なものにつき順次説明を試みるとしやう。

(一) 品名

品名は關税徵收上と貿易統計の材料に供する必要上、成るべく詳細に申告せしめる必要がある。例へば同じく油であつても魚油、菜種油、鑛油等を區別して記入せしめ、又物品の名稱だけでは其品質を表はし難いものは之を區別し、例へば砂糖ならば和蘭標本の番號及其種類を明記し、落花生ならば脱殻せざるもの、其他に區別し又織物ならば絹製、綿製、毛製又は絹毛交織等に區別記入せしめる必要がある。而して貨物は精製品なると粗製品なると、又品種の良否例へば絹製と綿製によつて著しく

關稅の差別を生ずるから獨逸、英國若くは我國の稅關統計項目は豫め之を類別して申告其の場合に參考に供することゝしてゐる。

(二) 數量

數量は從量稅の標準となり又貨物の性質及種類を明かにする一助とも爲るものであるから之を詳記せしめる必要がある。而して數量は成るべく貿易統計表所定の單位を以て記入すべきことは云ふまでもない。例へば毎斤又は毎百斤を以て徵稅するものは斤を以て、硝子板の如く毎平方米を以て徵稅するものは平方米を以て記入するが如きである。我國に於ては申告すべき數量の單位につき法規上の定めはないが稅關の内規上一定し、之に依つて輸出統計表を作製するものであつて、今之による物品の單位を示せば例へば次の如し。

- 擔^{ピコル}(玄米、精米、其他の米、大麥、落花生豆)
- 斤(大豆、小豆、小麥粉)
- 百斤(大多數の重量による貨物)
- 噸(石炭)
- 打(罎入麥酒、化粧石鹼、手巾)
- 哥(燐寸、鈕釦)
- 碼(羽二重、甲斐絹、縞子、ブランケット)

- 方碼(地氈)
- 反(縞木綿、緋木綿)
- 個(麻袋、行李)
- 千個(紙卷煙草、煙管)
- 束(眞田)
- 千束(燐寸軸木)
- 隻(船)

日本に於ては從量稅を主として、從價稅を加味し、米國に於ては從價稅を主とするが、英獨佛露の諸國の如きは凡て從量稅を用ひる故、かゝる國にあつては數量の申告が特に重要となるのである。

重量を單位とするものは我國初め各國共純量即ち風袋を除いた正味重量を以てするものが多いが、包装にも内装と外装との區別があり其何れを除いた重量をとるや、又包装を除くとするも其貨物の實際の純量によるか、或は法規上推定された風袋を除くか、國によつて一定しないから此點を明瞭にする必要がある。日本に於ては「内装等と共に秤りたる重量」と記載したものゝ外は總て純量を以てする規定であり獨逸に於ては主として法定純量に依つてゐる。

(三) 價格

申告價格は如何なる價格によるべきかといふに我國に於ては輸入品は輸入の際に於ける到着價格に

よるべきものとし、輸出品は輸出港に於ける本船渡価格 (F. o. b. Value) を日本通貨を以て記載すべきものとしてゐる。即ち輸入品の価格は商業上所謂シフ (c.i.f.) 価格に該當するのであつて原價に荷造費、積込費、運賃、保険料を加へた価格であり、又輸出品の価格は輸出港から積出されるときは價格である。是等の價格は要するに國境に於ける價格であるから、獨逸に於ては之を境界價格と云つてゐる。即ち理論上外國貿易統計は其國の國境を通過出入する貨物を觀察説明せんとするを目的とするからかゝる國境に於ける價格を捉へるのが最も適當といふべきである。英國に於ても亦此方法を採用してゐる。我國に於ては明治三十七年以來輸出品の価格は輸出港に於ける價格に包裝費を併せたものであつたが、明治四十五年以降は輸出港から積出さるゝ時の價格なりとした。又輸入品の價格は明治三十二年以前にあつては、仕入國元價であつたが、同年以後は前述の如く元價に荷造費、保険料、其他輸入港に到るまでの諸費用を加へたものとした。獨逸も亦之と同様であるが北米合衆國に於ては輸入價格は輸入國の製造地に於ける市場價格又は卸賣價格とした爲め運賃、保険料其他の諸費用を包含しない。又輸出にあつては其積出地に於ける當時の市場價格である。従つて又當該船舶に積込む爲めに必要な費用を加へないのである。

次に貿易統計に於ける價格につき注意を要することは其變動である。例へば獨逸に於ては歐洲大戰當時不換紙幣が夥しく發行せられた爲め著しく物價が騰貴した。従つて貿易統計に現はれた所を見るに輸出量は可成減退したに拘はらず其金額は却つて増加してゐるのである。故に獨逸統計年鑑は一九二二年迄は大部分紙幣マークによつて示されてゐたのを翌二三年以降戦後の貿易統計は之を一九一三年即ち戦前の金マークに換算して前後比較し得べきやうに改訂してゐる。斯くの如く貨幣額で表示することは必ずしも完全ではないが數量による表はし方には數量の項で述べたやうに種々の單位があつて之を打つて一丸とした單位を得ることは不可能であるから一國の貿易高を一見明瞭ならしめるには矢張貨幣の名稱を以てしなければならないのである。是れ外國貿易統計に價格の必要な所以である。然るに貨物の價格の表はし方には種々ある。即ち輸出地に於ける價格と輸入地に於ける價格との間には相當の開きがあるのみならず、彼の外國に於て「フランコ」と稱する價格の如きは買主の店舗に至るまで其運送に要する一切の費用をも包含するのであるから其價格は自ら高からざるを得ないが、之に反して現場渡の相場即ちオン・スポット (On Spot) と稱せられる相場は賣主の店頭に於てする價格をいふのであるから最も低い價格を示すであらう。斯くて種々ある價格中其何れを採るべきやに迷ふのみならず同一物品に就ても一月中の物價と七月中の物價と十二月の物價との間には差異があるであらうから一ヶ年を通ずる物價中又何れを採るべきやも疑なきを得ない。特に關稅の關係上、輸入者の中にはなるべく其價額を小ならしめんとして申告を詐るものを生ずるの虞があつて價格の決定は申告事項中最も困難な問題の一である。されば國によつては價格の申告を命じない所があり、或は其一

部分の申告を命ずるが他の一部分は故らに申告せしめざるの主義を採用してゐる國がある。瑞西、ポ
リビヤの如きは斯る折衷主義を採用してゐる。全然價格の申告を不要なりとするものは、年々開催す
る外國貿易統計諮問會或は専門家を以て組織する委員會の決議に依つて、年々之を改訂するのである
が、或は今日尙和蘭に於て一部の輸入品に就て行はれるやうに一度決定した價格を比較的長期間に亘
つて用ひる所もある。斯の如く價格の申告を不要とする主義を稱して評價主義といひ、之に反し我國
の如く輸出入業者に全部申告せしむる方法を稱して申告主義といふのである。

英獨兩國に於ては此二つの主義に關してやゝ變遷があつた。即ち獨逸では一九〇九年五月一日から
一九一一年三月末までは輸出品目千三百三十六個(總品目の七一・一%)又輸入品目三十二個(總品目の
一・六%)に就てのみ其價格の申告を命じてゐたが同年四月一日から輸出品目に就ては其全部につき、
又輸入品目に就ては其中六十個(總品目の約三%)を申告すべきものと改めた。但し此價格申告は一旦
輸入した貨物で自由區域で加工し更に之を外國に輸出するものに就ては右の規定を適用しないものと
した。然るに歐洲大戰後一九二一年三月一日からは更に輸入品目の全部につき申告主義を採用するこ
とに改正し、若し申告を缺いた場合には統計諮問會に於て之を評價することゝなつた。

英國にあつては一九九四年の公定價格を以て一八五三年までの輸入及再輸出の價格に對して適用し
た。思ふに其當時は物價の變動も頻繁でなかつたから斯る標準價格も亦敢て不合理ではなかつたやう

である。輸出價格に關しては如何といふに英國では十八世紀の末葉に佛國と干戈を交ふるに及び自國
商船の警護を爲すの必要から輸出税の一種たる護衛船税を課するの必要を生じた時、當時の公定價格
では到底不合理なることを發見した爲め一七九八年以後は輸出商人をして其價格を申告せしめること
ゝなり茲に初めて申告制度を發生するに至つたのである。爾來英國では一方に於ては公定價格を以て
示し、他方に於ては申告價格を以て表はされることゝなつた。而して前記の如く輸入に就ては一八五
三年までは從來の公定價格を用ひたけれども一八五四年以降は専門家を以て組織せる委員會に於て其
價格を決定することゝした。然るに一八七一年に至つては輸入品に就ても亦申告主義をとつた。斯の
如く英國に於ける申告主義及評價主義の變遷は全く偶然であつて獨逸の如く理論上から評價主義より
申告主義に移つたものとは趣を異にする。其他の國々に於ても亦評價主義から申告主義に移つたもの
がある。近年に於ては瑞典が其一例である。即ち同國では從來商務省に於て相當の商人に諮問して其
平均價格を求め、之を總輸出入數量に乗じて輸出入價額を得たのであつたが、一九一四年一月一日か
らは一切の貨物に對して申告主義を採用することに改めたのである。日本に於ては現在輸出入共申告
主義によつてゐる。即ち輸出の場合には荷送人が *C. I. F.* 價格による輸出申告書を税關に提出し、又輸
入の場合には荷受人が *C. I. F.* 價格による輸入申告書を同じく税關に提出することゝなつてゐるのであ
る。

る。斯くの如く沿革から見れば現今は既に評價主義から申告主義に移つた様に見えるけれども評價主義と申告主義との理論上の優劣は俄かに判断することが出来ないのみならず、實際上申告主義にあつては其申告価格に虚偽を交ふるの虞れがあり、評價主義にあつては實際上の価格と相距るの缺點がある。尤も申告価格を詐るものに對しては税關が之を國庫に沒收することを規定する國、又は之を買上ぐることを得べき規定がある國があるけれども(註)一切の輸入品について其正確なる価格を知らうとするが如きは何人にも不可能である。

(註) 我國の關稅法規によれば虚偽の申告又は虚偽の添付書類に關する罰則としては特別の規定を存しないけれども一般の關稅罰則の適用によつて貨物の沒收並に脫稅額の三倍の罰金が課せられることになつてゐる。

又諸外國にあつても相當嚴罰を以て之に報いてゐるのである。例へば

(一)米國、虚偽の申告を爲し、虚偽の書類に署名し、尋問に對し不誠實に答辨し、虚偽の書類を作り且之を使用する者は五千弗以内の科料及び二年以内の禁錮に處し且つ商品を沒收す。

(二)英國、同上の場合には百磅の科料に處す。

而して又他方に於て評價委員會の決議も決して完全無缺だといふことは出来ぬ。例へば一ヶ年の中間にのみ輸入のあつた商品については一層其評價に不公平の生ずることを免れないであらう。又公定價格の如きものに至つては現今のやうに物價の變動頻繁な時代にあつては到底之を採用し得ないこと明かである。

さて以上の如く輸入價格に就ては虚偽の申告をなす者があるが輸出價格については關稅の賦課がない爲め租稅遁脱の意圖を以て虚偽の申告をなす者はないであらう。依て税關吏は其價格につき疑ありと認められた場合でも之を寛大に取扱ふの傾があるから、輸出價格は輸入價格のやうに責任を以て評價を経るゝない短所を有してゐる。

我國に於ては關稅法第三十二條により輸入申告者は必ず仕入書を添付しなければならぬことゝなつてゐる。尤も之を添付することの出来ない正當の理由があることを税關吏が認めるときは此の限りでない。而して此仕入書は貨物の仕入國に於て作成し貨物の賣渡人の署名あるものなることを必要としてゐるのである。獨逸に於ては送狀を提出せしめ得るといふ規定を有してゐるが、實際は必ず之を添付せしめ、又英國にあつては輸入商をして船荷證券、送狀若しくは商品に關する其他の書類を提出せしめることを得、又申告後十二ヶ月以内の間は何時にても是等の書類を要求し得べき規定を存してゐる。米國は價格百弗以上の場合は常に送狀を添付せしめ、而も輸出國に駐在せる米國領事の證明を要するものとしてゐる。然し乍ら實際にあつては領事館の書記生は單に商人の申立を其儘證明書に記入するに止まること多き故其効果は疑はしいものであるといふ。而して斯くの如く各國が輸入商に對し仕入書其他の書類を提出せしめるのは、申告價格の眞正なることを證明し以て關稅徵收の的確ならんことを期するのであるが、輸出に就ては關稅徵收の問題を惹起しないから、各國共かゝる證明書類の添付

を要求してゐない。我國亦然りである。

(四) 仕入國及仕向國

外國貿易統計は常に外國全體との一般貿易状態を知らんとするのみでなく、更に各國との通商關係をも知ることを目的としてゐる。是れ仕入國、仕向國を調査するの必要ある所以である。而して仕入國として記入さるべき地名には、(一)貨物の生産地、(二)仕入地並に、(三)積出地の三があり得る。例へばブラジル産の珈琲が白耳義 經て英國商人の手に依つて輸入せられた場合は即ち之である。又仕向國としては、(一)仕向地、(二)販賣地、(三)消費地の三場合がある。例へば猶逸の「レース」が瑞西を經て伊太利商人の計算によつて「チュニス」にて販賣せられるやうな場合は其一例である。而して仕入國に就ては其原産地を知ること最も大切であるが之を知ることには比較的容易でない。特に其貨物が轉販して多數の商人の手を經た場合は確實なる商標を附しない限り到底之を確め得べきものではない。之に反して積出地及び仕入地は比較的容易に之を知ることが出来る。然るに積出地を以て一九〇四年迄の英國の規定のやうに船積港とするときは瑞西、ポリビヤの如き海岸線を有しない國々から輸入された貨物は之を他の船積地から輸出せられたものと爲すの虞がある。次に仕向國に就ては消費地を知ることが緊要であるが之を知るとは亦容易でない。然るに他の二者即ち販賣地及仕向地は之を確め易い。仕向地は之を仕向港と區別するを要すること積出地と船積港とを區別するの要あると同じ

である。而して理論上は二者の中、販賣地を以て之を決するのが良策である。本邦に於ては前段記したやうに輸入の場合には貨物の積出地、仕入地、産出地又は製産地、又輸出の場合には仕向港、仕向地を申告せしむることとしてゐるのである。獨逸にあつては一九〇六年二月七日の法律によれば同年三月一日からは仕入國は其産出地を記載すべく、仕向國は消費國を申告すべしと規定してゐる。然るに一九〇六年前の法律の規定は仕入國は其貨物の購買地を以てし、又仕向國は之が販賣國を以てすと規定してゐるのである。後の主義は獨逸と各國との通商關係を知ることが主眼としたものである。之に反して佛國は仕入地、仕向地を以て其標準としてゐる。斯くの如くに是等の諸點に於ても亦現今主要國の間に於てすら其主義慣例を異にするから、統計技術上各國比較の困難が存してゐるのである。次に以上の主義に従ふ我國の實際の數字につき仕向國及仕入國に對する状態を示してみやう。

國別輸出額(内地)

國名	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年
○亞細亞洲	九〇三、四一五	八四四、五三四	八三四、九三四	九一五、三三三
支那	四二一、八六一	三三三、一八三	三七三、一四一	三四六、六五三
關東州	九八、六〇六	九一、二七〇	一一〇、一九〇	一二四、四七六
香港	五三、九七三	六六、五三八	五六、二〇四	六一、〇六五
英領印度	一五五、九五二	一六七、五八〇	一四六、〇〇六	一九八、〇五七

海峽殖民地	四一、四九七	三六、六五七	二〇、四九九	二七、九二八
蘭領印度	七四、七五四	八二、五八一	七三、四二四	八七、二六
佛領印度支那	六、二〇六	五、八七三	四、一二二	二、六九五
露領亞細亞	五、二九九	七、七七六	一一、一九七	一五、〇三三
フィリッピン	二七、八二二	二三、八三四	二九、〇五四	三〇、五九七
暹羅	九、二七〇	一一、一四六	五、七六三	一〇、六三三
その他の諸國	八、一七三	八、一〇一	五、三九九	一〇、九七〇
○歐羅巴洲	二九、四二〇	一四七、八九二	一六〇、三四五	一四七、二四九
英吉利	五九、四九三	六四、九二九	五八、九〇四	六三、一八三
佛蘭西	四二、四一一	五四、〇四五	六三、四〇八	四四、四九五
獨逸	八、三一一	一〇、六一二	一一、五八一	一三、四四七
白耳義	一、一六八	二、二〇五	二、八六九	二、八九〇
伊太利	五、二五一	三、八六五	六、一九〇	六、一〇八
瑞西	四九五	一、四一六	一、二七九	六四八
奧地利	三五二	一〇四	一〇四	六二
チエツコスロバキヤ	五	五	九	一五
和蘭	二、四九六	三、三八七	六、九一四	六、九一八
瑞典	四六八	四九七	八二二	八六五
那威	二八	五九	七二七	三六六
露亞	二、五〇一	八六九	一、一九七	二、三〇四
波蘭	四	七	一一	一四
西班	九五〇	八六六	八六九	一、二五九
丁抹	六〇八	一、三八八	一、五八〇	一、〇三四

土耳其	四、三四	二、九四七	三、四三〇	二、五五一
葡萄牙	八	五	九	一七
その他の諸國	八〇八	五三八	四五五	一〇七三
○北亞米利加洲	八九〇、一〇二	八六六、七四八	八八八、五九八	九四七、七五五
合衆國	八六〇、八八〇	八三三、八〇四	八二六、一四一	九一四、一〇二
加奈陀	二四、七五三	二七、四〇一	二七、〇四七	二七、〇七九
墨西哥	一、一四五	一、二六五	一、三二二	一、三四三
キューバ	七二	一、〇六一	六一	一、二五六
その他の諸國	二、六〇九	三、二二五	三、四八六	三、九五五
○南亞米利加洲	一六、八三二	二〇、八八六	二一、一三〇	二三、〇二六
ペルー	一、九五二	一、三三二	一、七八五	二、六〇二
チリ	一、九二六	二、〇六三	一、八八四	二、七一九
アルゼンチン	六、三三三	九、五二八	六、九七〇	八、五八〇
ブラジル	一、五九七	一、二五〇	一、九八二	一、五七三
ウルグアイ	—	—	四、六八〇	四、四六七
その他の諸國	五、〇二二	八、八一九	三、八二六	三、〇八六
○亞弗利加洲	四三、一五四	五二、一三四	四三、九二四	六〇、五三四
埃及	二三、〇九八	二九、〇〇六	二三、七二四	三一、三五二
喜望峰及ナタル	一〇、七四一	一一、六四〇	一一、六九四	一三、一七九
東部アフリカ	—	—	六、四二六	一三、二四
その他の諸國	九、三一五	一〇、五八八	二、〇八八	二、八七九

商業統計の常識

○其他の諸洲	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年
濠洲	六、八〇二	六、一〇二	五、〇二一	五、八四三
ニュージールランド	五、六一一	五、〇五六	四、〇〇〇	四、〇七五
ハワイ	二、九四五	三、三四七	三、〇九七	四、〇九五
その他の諸國	六、七〇〇	六、八九四	六、四六六	六、二七一
	五四五	二二四	四五六	四〇二

國別輸入額(内地)

國名	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年
○亞細亞洲	一、〇一七、五八一	八七二、九一〇	九〇三、一四四	八五七、九五四
支那	二二九、四一〇	二二六、〇三四	二三四、五四七	二〇九、九七五
關東州	一五七、〇三三	一三三、四四七	一五〇、四三九	一六六、三三二
香港	一、四二六	一、五九八	一、二二三	六〇八
英領印度	三九一、一三六	二七〇、五九二	二八五、四七〇	二八八、二〇〇
海峽殖民地	三九、八七二	三五、八七三	三七、四〇四	四一、六三四
蘭領印度	一〇三、〇七七	一〇三、七七五	一一二、〇三八	七七、三四六
佛領印度支那	二四、五一九	三三、一七八	二〇、三五五	九、五九一
露領亞細亞洲	二三、八八三	二四、五六二	二一、九一六	二二、八七五
フィリッピン	一八、七一四	一七、八四一	一六、三四二	一八、〇四四
暹羅	一四、三五八	二二、二六〇	一九、〇六七	二〇、八二二
その他の諸國	四、四八八	四、七八一	四、四三八	二、六二七
○歐羅巴洲	四一六、三〇三	三八七、七三九	四〇三、七〇三	四一九、八四七

英吉利	佛蘭西	獨逸	白耳義	伊太利	瑞西	奧地利	チエッコスロバキヤ	和蘭	瑞典	那威	露亞	波蘭	西班牙	丁班抹	土耳其	葡萄牙	その他の諸國	○北亞米利加洲	合衆國	加奈陀	墨西哥	キューバ
一七〇、二七四	二四、五四五	一四五、二二〇	一四、二四〇	六、七四六	二一、八一九	三、二八五	五六〇	四、七二六	一三、九四六	五、二六三	七、九三三	二、二八四	一、〇四九	四四〇	四八三	一二九	四九二	七五五、四九八	六八〇、一八五	六三、九二九	一三九	一〇、六四六
一五三、二七一	二七、三〇九	一三、三九〇	一四、三一八	六、三二七	一八、〇九五	二、八五七	二、八〇五	三、九八一	一〇、八八九	四、二二四	一、六〇六	七、五七二	一、三四三	八四四	三〇一	四一九	一九〇	七三九、九七二	六七三、六八五	五五、六六九	一九	一〇、三二〇
一六四、八四〇	二四、〇〇六	一三、五三三	一四、四九七	九、三三四	一九、九四〇	一、七二四	一、三八二	四、七七二	四、五三八	二、一四一	八、三三五	一、三三二	一、七七五	二四七	四四五	五〇七	六九三、六二〇	六二五、五〇三	六六、四九八	二三四	九五四	
一五三、〇五一	二六、一八五	一五七、二七四	一五、八二八	七、五五〇	一七、五七〇	一、七一九	一、九六一	五、四六一	一一、〇二五	四、六一一	三、〇八一	五、四八七	七、四九	六、〇五〇	二〇二	一、二五四	七二四、三四七	六五四、〇五五	六八、七三〇	七〇一	七五八	

第三章 外國貿易統計

○南亞米利加洲	一、九四三	一〇、五七九	一一、一九九	一四、二六三
ペル	一七四	一六八	九三五	五九
チリ	八、六九〇	七、八六八	六、二六六	一〇、四一五
アルゼンチン	二、四九六	二、〇〇三	四、六七三	三、二二六
ブラジル	一五二	二九四	二二九	三八一
ウルグアイ	—	—	五一	一五四
その他の諸國	四三〇	一四三	三三	一八
○亞弗利加洲	四一、二八六	三六、四〇一	三二、二〇九	四二、五三七
埃及	三二、九五八	二四、六三三	二〇、三四〇	二五、八二四
喜望峰及ナタル	九二六	一、〇八一	一、三四一	一、四四七
東部アフリカ	—	—	六、二六一	一、四〇六
その他の諸國	八、四二〇	一〇、六八五	四、二六六	三、八六〇
○その他の諸洲	一三三、一七三	一二七、三三五	三六、五九六	一三八、六〇一
濠洲	一一八、三九六	一一三、八四〇	三〇、四九四	一三三、六〇一
ニュージラント	六九〇	四二〇	七九六	六七七
ハワイ	一三〇	一〇四	一七五	一四六
その他の諸國	二、九四五	三、八六〇	五、一三〇	五、一七七
○保稅工場	一、七二五	三、五五四	一四、四七八	一八、三八四
○國別不詳	九八三	八七〇	三六三	三〇六

以上は單に通商關係の厚薄を表はす爲め各國別輸出入の總額を掲げたのであるが、尙ほ國家の政策上又は商業上、實際の應用に資する爲には各國別の輸出入商品の詳細を掲げなければならぬ。或は少くとも原料品、食料品、半製品及び全製品別の各國別の數字を掲げなければならぬ。かくするとに依て本邦産業の指針又は關稅政策決定の基礎が樹立されるのである。然し乍らかかる詳細な表はあまりに煩雜に亘るからこゝには省略することとする。

第五節 統計材料の編纂

第一項 一般貿易及特別貿易

外國貿易統計編纂上、第一に注意すべき問題は輸出入品の意義及範圍是である。例へば同じく輸入品といふも國內で消費せず加工して再び海外へ輸出する目的を以て輸入された商品は完全なる輸入品とは稱し得ないし、又貨幣の原料となる地金銀の輸出入は一般の商品の貿易と全く同一に視ることは出来ないであらう。かくて英、米、佛、獨等多數の諸國は何れも外國貿易を一般貿易と特別貿易とに分つて輸出入の性質を明かにすることとしてゐるのである。今英國倫敦大學教授パウレー氏の説明を藉りて此關係を示せば次の如くなる。

一九二五年英本國外國貿易額

輸入		輸出	
商 品	一、三二一A <small>百萬磅</small>	英國生産品	七七三B <small>百萬磅</small>
地 金	五二	外國生産品	一五四
總 計	一、三七三	合計(商品)	九二七C
		地 金	六二
		總 計	九八九
通過貿易額	二九G <small>百萬磅</small>		

右の中普通 A を輸入額と稱し、B を輸出額といふ。而して其一旦陸揚げせられた貨物であつて之を保税倉庫内に保存するに過ぎないときは別に通過品と稱して申告せしめるを普通とする。G 即ち是である。而して通過貨物は輸出入の何れにも屬せしめない。斯くの如く一旦税關を通過した貨物は國內に於て之を消費するか、若くは更に加工して之を他の國に輸出するものであるけれども一般に之を輸入といふ。然るに一旦輸入した貨物で再び之を他國に輸出したときは之を外國品又は殖民地生産品として申告するから A は更に之を分解するときは

商 品 の み	一、一六七D <small>百萬磅</small>
消費の爲めにする輸入品	一五四E
再輸出の爲めたする輸入品	

合 計

一、三二一

となる。即ち英國內地に於て一九二五年度に於て事實上消費せられた高は十一億六千七百萬磅である。而して E を以て示した輸出額は英國で之に加工したのであつて、英國人の勞力其他の取扱上から價格を増加せしめたものであるから、上記の如く一億五千四百萬磅はやゝ多額に失するといふべきであるが、今他に之を調査するの手段がないから此數字は自ら概算的ならざるを得ない。斯くて英國にては外國貿易表は之を左の如くに表示するのである。

一 般 輸 出	C + G	九五六 <small>百萬磅</small>
特 別 輸 出	B	七七三
一 般 輸 入	A + G	一、三五〇
特 別 輸 入	D	一、一六七

獨逸に於ても亦其外國貿易は之を分つて一般貿易、特別貿易及び固有貿易の三とする。一。般。貿。易。と。は輸入にあつては外國から其國民經濟内に輸入せられた貨物と直接通過貿易品とを含むものをいふのである。固。有。貿。易。とは一般貿易品の内から直接通過貿易品を除いたものである。而して特別貿易とは輸入にあつては外國、關稅除外地、自由區域、保税倉庫等から内國への輸入、及内國に於ける計算を以てする加工の爲の輸入(尤も此中には漢堡自由港に於ける加工又は精製を含む)及消費の目的を以てする關稅除外地への輸入、外國行獨

逸船舶に積載せらるゝ外國船用品を含み、輸出にあつては内國市場から外國への輸出（此中には官廳の手で消費税又は印紙税を賦課せらるゝ貨物、麥酒、ブランデー、鹽、シヤンペン、カル）を意味し、又内國の計算を以てする加工品で消費税又は印紙税を賦課せらるゝ貨物、麥酒、ブランデー、鹽、シヤンペン、カルを意味し、又内國の計算を以てする加工品及漢堡自由港に於て内國の計算にて製造した商品の輸出を包含するものである。而してこゝに所謂直接通過貿易は輸入の際既に第三國に再輸出せらるべき通過品の謂であつて國民經濟とは直接何等の關係を有しないから其價額を輸出入價額中に加算しないのである。是れ固有貿易額中から之を除外した所以である。然るに間接通過貿易とは、（一）内國市場に一度は、入り來るのであるが更に其仕向地を變更して他の第三國に輸出せらるゝもの、（二）内地の貨物と混合して外國に輸出せらるゝもの、（三）内國にて加工又は精製の上別種の商品として輸出せらるゝものゝ三を指すのである。右の三場合の何れも皆無税品の場合には内地に於ける貨物と區別することなく輸入せられるが、有税品の場合に其原狀の儘又は始めより加工の目的を以て輸入したものを更に再輸出する時は關稅技術上特別の取扱を爲すに至つた。即ち保稅及び加工として特に無税とするものは是である。

以上は獨逸に於ける調製方法であるが、我國に於ける外國貿易統計は特別貿易であつて直接通過貿易を包含しない。而も尙ほ實際に輸出又は輸入した貨物で貿易表中に掲げられないものがあるのである。

輸出。帝室御用品、在外公館用品、外國公館用品、外國艦船用品、博覽會出品、外國航行内國船用品、海軍艦船

輸入。御用品、外國公館用品、海軍艦船及同材料、兵器彈藥及爆發物、商品見本、博物館及陳列所用品、勳章賞牌、記錄文書類、本邦より出漁せし船舶の捕獲採集せる水産物、燃料用鑛油（軍用）、博覽會出品積戻品、再輸入）

右の如く本邦に於ける外國貿易年表中に掲げられた特別品輸出入なる名稱は前段の特別貿易及一般貿易なる稱呼と同一でないことに注意するを要する。是等の貨物に對しては右年表中特別の一表を設定して其價額を記載し、本表中には除外してゐる。但し年々内閣統計局より出版する日本帝國統計年鑑には之を合計した表に改訂してゐる。

今大藏省發表の我國貿易表の形式を示せば次の如し。

摘要		昭和四年	昭和三年	増減
食料類輸出	一六、〇一八	一五、六二〇	三三八	
原料類輸出	八、八七三	八、八五八	一五	
全製用品類	八八、三七五	八二、三七四	六、〇〇一	
其他の品類	九三、七三〇	八二、二四九	一一、四八一	
再輸出	三、三七七	三、〇二五	七五二	
全輸出品計	二〇、三七六	一九、一七六	一、一九〇	
食料類輸入	四、四八三	六、〇八九	一、五二六	△
原料類輸入	二四、八六一	一九七、一九五	一七、六六四	△
計	二七、一五六	二九、八五四	二、七三九	
計	二二、三九七	二一、五九八	五、八七九	

輸出入	銀貨	金貨	貨幣	輸出入	輸出入	再輸	其他	全製	原料
入出	及及	及及	及及	入出	入出	全輸	輸	製	用
超超	銀地	銀地	地金	超超	超超	入	入	品	製
過過	計金	計金	銀過	計金	計金	計品	計品	計品	計品
輸入	輸	輸	輸	輸	輸	輸	輸	輸	輸
二八七八	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三
二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三
二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三
二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三	二八七三

第二項 品目の分類

次に貿易統計編纂上注意すべき問題は輸出入品の品目分類に關する事項である。前記の如く、外國貿易上より觀察して其國の産業狀態が農業國なりや工業國なりやはかゝる品目分類によつてのみ明瞭に了解し得られるのであつて、又私經濟的見地よりすれば各種商品の生産者又は商人は輸出入商品の

細目及數額を見ることに依つて事業經營方針の好資料を得らるゝのである。本項に於ては分類法に關する詳細の説明はあまりに煩雜となる故之を避け、専ら我國大藏省發表の具體的な分類表のみを掲げておくこととしやう。

食料	豆類	水産	其他	製糖	麥類	寒天	鹽類	其他	原料	其他	除屑	石炭
甲粗	乙計	乙計	乙計	乙計	乙計	乙計	乙計	乙計	乙計	乙計	乙計	乙計
及生	及生	及生	及生	及生	及生	及生	及生	及生	及生	及生	及生	及生
品	品	品	品	品	品	品	品	品	品	品	品	品
類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三
一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三
一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三
一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三	一、〇九三

原料	探油	生油	智利	硫磺	燐	實油	其	羊	石	鐵	木	穀	其	皮	草	牛	苛	人	毛	製	銑	紙	其	鉛	錫	亞
用品	油	油	硝酸	酸	燐	油	他	他	鐵	鐵	鐵	其	其	皮	草	牛	苛	人	毛	製	銑	紙	其	鉛	錫	亞
原料	油	油	硝酸	酸	燐	油	他	他	鐵	鐵	鐵	其	其	皮	草	牛	苛	人	毛	製	銑	紙	其	鉛	錫	亞
計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他
三、〇七七	三、三八八	一、〇〇五	四、八〇六	一、三四五	七、五九二	五、三〇一	二、九三九	一、〇一六	四、二九七	二、八八三	八、八三八	一、二三四	一、三九一	一、二八四	七、二八九	五、〇二一	一、一三四	八、九四四	一、八七五	一、三四八	二、八四三	二、九八八	一、四〇二	一、五〇六	九、二〇三	八、一九四
二、一八二	二、七八九	六、〇七八	三、六三四	一、一九七	八、六八二	五、四九二	二、九三九	一、一八七	一、〇八二	二、〇八二	一、〇〇八	一、四三三	一、〇六二	一、〇四七	七、七二七	五、〇〇七	一、三三四	九、九二四	三、二〇七	一、四三三	二、五五五	四、〇三四	一、〇〇九	一、四七二	一、〇九三	一、〇九三
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
八、九五五	五、九八八	三、九七三	一、一七八	一、四七七	一、〇九八	二、三〇四	一、五七七	一、〇〇五	六、〇〇三	五、〇二六	二、二七〇	一、八五三	三、五八五	二、七四三	四、三三四	三、八六	二、〇五〇	九、八〇〇	一、三三二	一、〇三二	三、八二一	一、〇四六	八、〇二二	二、〇四二	三、四八一	二、七四三

第六節 外國貿易差額と國際貸借

全類	揮發油	石油	毛織	印織	自刷	發動	其他	其	再	輸	輸
計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他	計他
七、四二七	三、四八八	八、五七四	一、九四一	三、六五九	七、四八五	一、三五八	三、四九三	一、七〇四	二、二八二	二、二八二	六、七六二
九、八四三	六、五八二	八、四三四	三、二二三	五、五二三	七、四三二	八、四七三	一、二六六	一、四五六	二、二九〇	二、二九〇	三、四三〇
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
二、四二六	二、四九四	三、九九五	一、一四〇	一、二七二	一、八六四	一、三六三	二、八〇五	一、三六九	一、二四七	一、二四七	一、五、七三九

重商主義時代にあつては各國の爲政家が専ら輸出超過額の多からんことのみを希望し、輸入超過は國民經濟衰退の原因なりと考へ、極力貿易差額の改善に資すべき政策を樹てたことは前述した所であ

英領マラカ	三三五	三六九		三三
比律賓	一一〇八	一一三五		二七
英領アフリカ	二二九	二二六		三二
英領南アフリカ	二九〇	三三七		三三
加奈陀	七九四	一〇七〇		二八
合衆	三、七五五	四、四九八		九三
墨西哥	一、五七六	二、四九八		九三
キルギス	二八八	四三三		一四
ブラジル	三〇三	四三三		一四
アメリカ	六五〇	七九三		一四
アゼルバヤン	二二〇	二二〇		九
智利	一、六五三	一、六八八		九
其他	二八、九七四	二七、八五三		一、二三

斯くの如く歐洲各國の内、其主なるものは、何れも輸入超過なること明かである。而して今世界列國を通じて其輸出額よりも輸入額の多いこと、一九二五年度に於て實に十一億二千二百萬弗に上るのである。其理由の一是第四節の説明によつて明かな通り、現今多數の國では輸入價格に對しては *c.i.f.* を以てするに反し、輸出價格には *f.o.b.* を以てするのであるから、假令輸出入額に於て同一であつても運賃、保険料だけは輸入價額を増加する爲めである。英、澳、獨、伊等の諸國は前表で示すやうに何れも輸入超過額遙かに大であるが、就中英國の如きは既に前世紀の中葉以後から引續いて、輸入超過を示したことは、第二節に於ける同國の外國貿易表に明示した所の如くである。是れ英國が多年外

國に多額の資本を投下したばかりでなく、船舶の運航から生ずる運賃、保険料等外國から受取るべきもの亦甚だ多額に上り、而も是等の利子、運賃、保険料等は何れも其國々から貨物の形を以て返済の代償として輸入せられるのであるから、自ら輸入額を膨脹させる結果を來すのである。獨逸に於ても亦略々同様の過程を経てゐる。即ち獨逸帝國の成立した一八七〇年代には最早輸入額は輸出額を超過してゐたのである。即ち

輸入	輸出
一八七二 三四六四、六	二四九二、二
一八七九 三八八八、一	二八二〇、八
一八九一 四四〇三、四	三三三九、八

歐洲大戰後獨逸は多額の賠償金を支拂ふべき義務を負担してゐるのであるから、理論上から云へば輸出超過國たるべき筈であるが、事實は正に反對で戦前と同様輸入超過國となつてゐる。

輸入	輸出	輸入超過
一九二〇 三九四七、一	三二二四、〇	二二三、〇
一九二一 五七五〇、七	三〇〇六、六	二七四八、一
一九二二 六三一、五	六一九九、四	一一二、一

(但し一九一三年の單位價格に換算したもので本表はチヌカ氏經濟統計論に據る)

斯の様な矛盾した結果を示した理由に就ては、特に説明を要するのであるが今暫く之を措き、戦前

迄の歐洲の主要なる國々を見れば何れも輸入超過國だったのである。斯くて獨逸も亦伯林大學教授ゾンバルト氏の云つたやうに「獨逸は過去百年の間に輸出國から輸入國となつた。農業國から工業國となつた。農耕國から勞働國となつた。而して又自然國から人工國となつた」のである。

斯く考へ來ると、輸入超過は必ずしも、其國民經濟の疲弊困憊を物語る徴候ではなくて、寧ろ其國商工業繁榮の程度を示す指針なりとも云ひ得るのである。従つて彼の貿易上の差額が借方勘定に存するからと云つて、直ちに其國の國民經濟が薄弱なりとの結論をなすことは出來ぬ。否戦前に於ける英佛、獨諸國の如く常に其差額の借方勘定に存するものゝ方が却つて隆々たる進歩の跡を示したものといはざるを得ない。蓋し是等の各國は戦前に於て外國に投下してゐた資本額は各々數十億磅に達してゐたのみならず、數千萬噸の商船を以て世界航運の大部を占め、有力な多數の保險會社が各國に散在して多額の保險料を收得するなど、其國民經濟の發達は勢ひ貨物の形態による輸入額を多からしむるに至つたものである。之に反して北米合衆國（戦後に於ては全く反對の状態となつた）英領印度、露西亞、アルゼンチン、ブラジル等の諸國はまだかゝる境地に達してゐないのは勿論で、外國の資本により外國の機械知識をかりて國際貿易に従はねばならなかつたのであるから、其借入資本に對する利子は自國の生産品を以て之に充てなければならぬのみならず、露西亞のやうに海外旅行者の數が年々多數に上る所にあつては、勢ひ是等の支拂をなすに當つても亦自國の貨物を輸出しなければならぬ

いのである。

斯る次第であるから、右述べたやうな意味の輸入超過國であるならば、國民經濟上寧ろ理想的なりとすべきであつて輸入超過を以て必ずしも其國民經濟上憂ふべき現象だと斷じ去るのは早計といはねばならない。往時、重商主義思想の旺盛であつた時代に、佛、獨、英、伊の諸國の經濟學者又は政治家が擧つて輸出を鼓吹し、反對に外國生産品の輸入に障礙を與へるやうな方策にのみ腐心した所以は當時にあつては怪しむに足りない適當な政策であつたが、今日に於ては最早かゝる理論も實際の事情も全く一變して了つたのである。即ち貿易均衡の現象は必ずしも國民經濟の盛衰を測る尺度とはならなくなつたのである。而して此理は英國に於ては已に前世紀の中葉に至りゴツシエンによつて證明された所であつて、重商主義時代の貴金屬偏重の思想は支拂の差額と貿易の差額（商品のみ）とを混同した誤である。即ち貿易上の差額は前段に述べたやうに單に貨物輸出入の差額に過ぎないのであつて、他國に對する債權債務の關係、即ち國際貸借なるものは右の外の種々なるものより成立してゐるのである。特に最近百年間に於て國際間の經濟關係は日に月に親善となり、資本市場は内外共通の傾向が極めて顯著となつた爲め資本の移動が容易となり、有價證券の發達は此傾向を益々助長した。之と同様勞力の移動も亦極めて自由となり旅行者出稼人の出入も往年に比べれば甚だしく旺盛を極めるに至つた。以上國際貸借に於ける諸原因を分析すれば凡そ左の如くである。

- 一、商品に對する債權
- 二、賣却済有價證券に對する債權
- 三、投下資本に對する債權
- 四、資本的債權即ち利子、配當、利益等
- 五、勤勞給付に對する債權即ち運賃、保險料等

以上五項目中外國貿易差額は、(一)商品に對するものゝみを稱するに過ぎないのであるから入超過額が如何に多額であつても、(二)以下に於て受取るべき債權の額が之を超過すれば其國の國民經濟は繁榮に赴くべき道理である。故に(二)以下の貿易外受取勘定を稱して「目に見えぬ輸出」と名けてゐるのである。唯貿易上の差額は事の上國際貸借に於ける重要な一要素であるといふに過ぎない。曾てダブリン大學教授であつたバスターブル氏が有名な英國經濟辭典中の國際貿易に關する中に解説した所を藉りて當時の状態を記せば次の如くである。

英國に於ける前世紀末葉一九八〇年の貿易高は

商地	輸 入		輸 出	
	金	銀	金	銀
計	四二〇、八三五、六九五	三三三、九五三、七〇八	三二七、八八〇、〇七六	二五、一九七、〇七二
輸入超過額	四五四、八三九、四〇三		三五八、〇七七、七四八	一〇一、八三九、四〇三

附 記

輸入超過額	
一八八七年	八二、〇〇〇、〇〇〇
一八八五年	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇
一八八〇年	一二一、〇〇〇、〇〇〇
一八七〇年	六九、〇〇〇、〇〇〇
平均超過額	九〇、〇〇〇、〇〇〇

即ち一八九〇年の英國に於ける輸出入總額は、四億五千萬磅以上に達してゐるが、此中には寶石類の價額は全部算入せず、又輸出の中外國に賣却した船舶の價額も亦含まない。依て今夫れく是等の價格を五百萬磅と見積つて其双方に加算する。而して氏は其差額を説明するに當つて第一に注意すべき事項は運賃、保險料は輸入價額に加へたが、輸出價額には加へないこと、従つて其差額は輸出の方に加へなければならぬこととして之を九分に計上してゐる。又英國商船の取得する運賃額は之を四分とみるときは合計四千七百萬磅となる。以上の外、内國資本を外國に放下了た高は銀行雜誌(バンカース・マガジン)一八八〇年の推計によれば約七千萬磅である。夫より十ヶ年後の一八九〇年には之よりも一層増加したものと見ても必ずしも不當ではない。蓋し本國よりの放資高が假令小額であつたとしても其殖民地からの放下資本が多額に上つてゐるからである。以上を綜合して一八九〇年に於ける英國の國際貸借の關係を見れば左表の如くなる。

商業統計の常識

一五〇

借方		貸方	
*輸入(前記の通り)	四五五、〇〇〇、〇〇〇 磅	輸出(前記の通り)	三五三、〇〇〇、〇〇〇 磅
*同上(推計)	五、〇〇〇、〇〇〇	同上(推計)	五、〇〇〇、〇〇〇
	二〇、〇〇〇、〇〇〇	船舶運送賃額	四九、〇〇〇、〇〇〇
		外國放資額	七五、〇〇〇、〇〇〇
計	四八〇、〇〇〇、〇〇〇	計	四八〇、〇〇〇、〇〇〇

*借方に於ける此二者の合計と下記貸方勘定との差額二〇、〇〇〇、〇〇〇磅は恐らく英國放資額の増加によるものであらう。

最近英國に於ける國際貸借關係を調査するに、大戰によつて可成傷手を負つたに關らず最早恢復して戦前と同じく優勝の地位に到達したやうに思はれる。今パウレー教授の著書から數字を藉りて説明しよう。

貸方		借方	
生産物輸出	八三二 百萬磅	生産物輸入	一、二一九 百萬磅
地金銀輸出	三六	地金銀輸入	四一
投資による利子	二七〇		
運賃	一四〇		
其他の勤勞による受取る*	七八		
	一、三五六		
		計	一、二六〇

(注意) *純差額である。即ち英國の支拂ふべき債務に屬するものと、英國の受領すべき分とを差引したる残額である。△北米合衆國に支拂ふべき利子は獨逸より受領すべき賠償額其他と相殺し得るものと看做して計算した。

即ち此表によると英國の受取るべき債權額換言すれば英國の貸借關係に於ける貸方残高は九千六百萬磅即ち邦貨に換算すれば約九億六千萬圓の巨額に達するのである。英國の國富の偉大さは之を以ても窺ひ得る。而して是等の残高はやがて又外國に放資し得べき額でなければならぬであらう。今又歐洲大戰前の獨逸に就て見るにプラウト氏のいふ所によれば左の如くである。

獨逸平均支拂差額 (單位百萬馬)

年次	海運	鐵道運賃及内國外運々賃	配當及利子	手数料及口錢	旅行	支出差額順差	貿易差額逆差(但地金銀を含む)	支拂差額殘
一八九八	一八〇	五〇	六八五	九二	一	一〇〇〇	九八七	一三
一八九九	二七〇	六五	八〇〇	一二五	一	一二〇〇	一七三	一八七
一九〇〇	三五五	八〇	八九五	一七〇	一	一三五〇	一四七	一三三
一九〇一	四七五	一〇〇	九六五	二〇〇	一	一四九〇	一八四	三五三
一九〇二	五四〇	一二〇	一〇〇〇	三四〇	一	一六〇〇	二〇八	五九二

右プラウト氏の表によるに一九一三年即ち歐洲大戰直前の同國々際貸借關係は良好であつて差引貸方残高五億九千二百萬馬克の多きに上つてゐる。尤も其前年迄の平均残高は却つて借方勘定の方に多かつたのである。されば之を英國の財政的優勝の地位に較べれば大なる懸隔があつたことが分る。而

して大戦後獨逸は強いても大なる輸出超過を計らねばならないに拘らず、最近一九二四年も二五年も引續き輸入超過の現象を呈してゐる。是れ蓋し獨逸は巨額の賠償額を負擔してゐる上にマーク貨の著しい低落によつて内國物價の暴騰を促がし之が爲に却つて高き原料品を外國より求めなければならなかつたに由るのであらう。一九二三年末に至つては同國貨幣本位制度に徹底的治療を加へて改正したに拘らず尙其外國貿易は上述の如く逆調を示してゐるのである。之に反して北米合衆國は戦前より既に債務國たる境界を脱してゐたが歐洲大戦により俄然絶大な債權國となつた。且又歐洲諸國は所謂債務國たる地位に墜ち乍ら全く其給付能力を減退した爲め、米國は其豊富なる貨物特に製造品を自國に於て消費することを得ず、其餘剰を海外に輸出せざるを得ない状態にある爲め債權國にして然も輸出超過國たる現象を呈してゐるのである。故に歐洲諸國が戦前の状況を恢復するのぞなければ少くとも現狀を打開して健全なる發展を爲すことは出来ないであらう。

翻て本邦に於ける外國貿易の趨勢を見るに明治元年以來長足の發展を遂げたことは前第一節に於て述べた通りである。即ち明治元年に於ける輸出入合計は二千六百萬圓であつたものが昭和四年には約四十四億圓に達してゐる。然るに之を輸出入の差額に就て檢すれば明治二年から同十四年までは僅かに明治九年を除き何れも輸入超過を示したけれども明治十五年より一轉して同二十六年に至るまでの間は輸出超過を示した。然るに明治二十七年即ち日清戦争の當時より大正二年に至るまで明治四十二

年と同四十三年の二ヶ年を除き孰れも輸入超過を來したから當時世人は痛く本邦の外國貿易を悲觀し若し尙かゝる趨勢を持続すれば我國は早晚破産の淵に沈淪せねばならぬと論ずる者さへ出づるに至つたのである。然るに大正三年から同七年即ち歐洲大戦の期間に於て本邦の輸出貿易は未曾有の盛況を呈し、大正五年には三億七千萬圓、同六年には約五億六千萬圓、翌七年には約三億萬圓の輸出超過に達し此數ヶ年の間に貸方貿易差額のみを以てしても約十數億萬圓に上るのであつて、其他民間に落ちた金額丈けでも約二十億圓を下るまいと推計せられてゐる。然るに之が爲めに一方に於ては内地の物價は法外の騰貴を來したばかりでなく、他方に於ては國民の日常生活に奢侈贅澤の風を誘導する結果になつた等、其經濟上道徳上に與へた不利も亦顯著であつた。斯くて大正八年には既に輸入超過約七千五百萬圓の趨勢に轉じ爾來引續いて輸入超過のみを示してゐる。而して之と相殺せらるべき國際貸借の關係を見るに從來は兎も角最近は此點に於て極めて不利な状態を示すに至つた。換言すれば貿易外の收入を加算して其計算を立つるも尙能く貿易上の差額を相殺し得ざる状態を呈してゐるのである。之れ目下國論を沸騰せしめつゝある所以であつて各種の財政的、經濟的、社會的若くは軍事的諸問題の叢々たる所以なのである。今参考の爲め日本に於ける貿易外收支勘定を示せば次の如くである。

大正十二年以降貿易外收支明細表 (單位千圓)

項目	大正十二年				十三年				十四年				大正十五年			
	一	二	三	四	一	二	三	四	一	二	三	四	一	二	三	四
(一) 經常的収入	460,720	500,810	549,939	590,810	460,720	500,810	549,939	590,810	460,720	500,810	549,939	590,810	460,720	500,810	549,939	590,810
(二) 外國證券利息及配當等	28,017	20,359	28,812	29,912	28,017	20,359	28,812	29,912	28,017	20,359	28,812	29,912	28,017	20,359	28,812	29,912
(三) 內國債利息	9,548	10,682	11,714	12,806	9,548	10,682	11,714	12,806	9,548	10,682	11,714	12,806	9,548	10,682	11,714	12,806
(四) 其他外國債利息	5,404	5,914	6,386	6,812	5,404	5,914	6,386	6,812	5,404	5,914	6,386	6,812	5,404	5,914	6,386	6,812
(五) 外國株式配當金等	1,065	1,177	1,244	1,312	1,065	1,177	1,244	1,312	1,065	1,177	1,244	1,312	1,065	1,177	1,244	1,312
(六) 海事業及勞務利益	112,039	123,044	134,049	145,054	112,039	123,044	134,049	145,054	112,039	123,044	134,049	145,054	112,039	123,044	134,049	145,054
(七) 海運業純利益	59,778	65,777	71,776	77,775	59,778	65,777	71,776	77,775	59,778	65,777	71,776	77,775	59,778	65,777	71,776	77,775
(八) 出稼人等仕送及持歸金	52,261	57,261	62,261	67,261	52,261	57,261	62,261	67,261	52,261	57,261	62,261	67,261	52,261	57,261	62,261	67,261
(九) 海運關稅	164,681	174,779	184,877	194,975	164,681	174,779	184,877	194,975	164,681	174,779	184,877	194,975	164,681	174,779	184,877	194,975
(十) 輸出入貨物運賃	58,681	63,681	68,681	73,681	58,681	63,681	68,681	73,681	58,681	63,681	68,681	73,681	58,681	63,681	68,681	73,681
(十一) 輸出入貨物運賃	44,354	49,354	54,354	59,354	44,354	49,354	54,354	59,354	44,354	49,354	54,354	59,354	44,354	49,354	54,354	59,354
(十二) 外國間輸送貨物運賃	13,336	18,336	23,336	28,336	13,336	18,336	23,336	28,336	13,336	18,336	23,336	28,336	13,336	18,336	23,336	28,336
(十三) 外國旅客運賃	9,400	14,400	19,400	24,400	9,400	14,400	19,400	24,400	9,400	14,400	19,400	24,400	9,400	14,400	19,400	24,400
(十四) 外國船客運賃	6,777	11,777	16,777	21,777	6,777	11,777	16,777	21,777	6,777	11,777	16,777	21,777	6,777	11,777	16,777	21,777
(十五) 外國船客運賃	5,008	10,008	15,008	20,008	5,008	10,008	15,008	20,008	5,008	10,008	15,008	20,008	5,008	10,008	15,008	20,008
(十六) 外國船客運賃	4,000	9,000	14,000	19,000	4,000	9,000	14,000	19,000	4,000	9,000	14,000	19,000	4,000	9,000	14,000	19,000
(十七) 外國船客運賃	3,000	8,000	13,000	18,000	3,000	8,000	13,000	18,000	3,000	8,000	13,000	18,000	3,000	8,000	13,000	18,000
(十八) 外國船客運賃	2,000	7,000	12,000	17,000	2,000	7,000	12,000	17,000	2,000	7,000	12,000	17,000	2,000	7,000	12,000	17,000
(十九) 外國船客運賃	1,000	6,000	11,000	16,000	1,000	6,000	11,000	16,000	1,000	6,000	11,000	16,000	1,000	6,000	11,000	16,000
(二十) 外國船客運賃	1,000	5,000	10,000	15,000	1,000	5,000	10,000	15,000	1,000	5,000	10,000	15,000	1,000	5,000	10,000	15,000
(二十一) 外國船客運賃	1,000	4,000	9,000	14,000	1,000	4,000	9,000	14,000	1,000	4,000	9,000	14,000	1,000	4,000	9,000	14,000
(二十二) 外國船客運賃	1,000	3,000	8,000	13,000	1,000	3,000	8,000	13,000	1,000	3,000	8,000	13,000	1,000	3,000	8,000	13,000
(二十三) 外國船客運賃	1,000	2,000	7,000	12,000	1,000	2,000	7,000	12,000	1,000	2,000	7,000	12,000	1,000	2,000	7,000	12,000
(二十四) 外國船客運賃	1,000	1,000	6,000	11,000	1,000	1,000	6,000	11,000	1,000	1,000	6,000	11,000	1,000	1,000	6,000	11,000
(二十五) 外國船客運賃	1,000	1,000	5,000	10,000	1,000	1,000	5,000	10,000	1,000	1,000	5,000	10,000	1,000	1,000	5,000	10,000
(二十六) 外國船客運賃	1,000	1,000	4,000	9,000	1,000	1,000	4,000	9,000	1,000	1,000	4,000	9,000	1,000	1,000	4,000	9,000
(二十七) 外國船客運賃	1,000	1,000	3,000	8,000	1,000	1,000	3,000	8,000	1,000	1,000	3,000	8,000	1,000	1,000	3,000	8,000
(二十八) 外國船客運賃	1,000	1,000	2,000	7,000	1,000	1,000	2,000	7,000	1,000	1,000	2,000	7,000	1,000	1,000	2,000	7,000
(二十九) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	6,000	1,000	1,000	1,000	6,000	1,000	1,000	1,000	6,000	1,000	1,000	1,000	6,000
(三十) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	5,000	1,000	1,000	1,000	5,000	1,000	1,000	1,000	5,000	1,000	1,000	1,000	5,000
(三十一) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	4,000	1,000	1,000	1,000	4,000	1,000	1,000	1,000	4,000	1,000	1,000	1,000	4,000
(三十二) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	3,000	1,000	1,000	1,000	3,000	1,000	1,000	1,000	3,000	1,000	1,000	1,000	3,000
(三十三) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000	2,000
(三十四) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(三十五) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(三十六) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(三十七) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(三十八) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(三十九) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(四十) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(四十一) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(四十二) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(四十三) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(四十四) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(四十五) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(四十六) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(四十七) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(四十八) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(四十九) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
(五十) 外國船客運賃	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000

項目	大正十二年				十三年				十四年				大正十五年			
	一	二	三	四	一	二	三	四	一	二	三	四	一	二	三	四
(一) 經常的収入	460,720	500,810	549,939	590,810	460,720	500,810	549,939	590,810	460,720	500,810	549,939	590,810	460,720	500,810	549,939	590,810
(二) 外國證券利息及配當等	28,017	20,359	28,812	29,912	28,017	20,359	28,812	29,912	28,017	20,359	28,812	29,912	28,017	20,359	28,812	29,912
(三) 內國債利息	9,548	10,682	11,714	12,806	9,548	10,682	11,714	12,806	9,548	10,682	11,714	12,806	9,548	10,682	11,714	12,806
(四) 其他外國債利息	5,404	5,914	6,386	6,812	5,404	5,914	6,386	6,812	5,404	5,914	6,386	6,812	5,404	5,914	6,386	6,812
(五) 外國株式配當金等	1,065	1,177	1,244	1,312	1,065	1,177	1,244	1,312	1,065	1,177	1,244	1,312	1,065	1,177	1,244	1,312
(六) 海事業及勞務利益	112,039	123,044	134,049	145,054	112,039	123,044	134,049	145,054	112,039	123,044	134,049	145,054	112,039	123,044	134,049	145,054
(七) 海運業純利益	59,778	65,777	71,776	77,775	59,778	65,777	71,776	77,775	59,778	65,777	71,776	77,775	59,778	65,777	71,776	77,775
(八) 出稼人等仕送及持歸金	52,261	57,261	62,261	67,261	52,261	57,261	62,261	67,261	52,261	57,261	62,261	67,261	52,261	57,261	62,261	67,261
(九) 海運關稅	164,681	174,779	184,877	194,975	164,681	174,779	184,877	194,975	164,681	174,779	184,877	194,975	164,681	174,779	184,877	194,975
(十) 輸出入貨物運賃	58,681	63,681	68,681	73,681	58,681	63,681	68,681	73,681	58,681	63,681	68,681	73,681	58,681	63,681	68,681	73,681
(十一) 輸出入貨物運賃	44,354	49,354	54,354	59,354	44,354	49,354	54,354	59,354	44,354	49,354	54,354	59,354	44,354	49,354	54,354	59,354
(十二) 外國間輸																

六、預金、利息、勞務利益	一、三二五	六、一五〇	二、一〇二
七、外國人内地事業及勞務利益	六、二四〇	六、六七六	三、一〇二
八、事業純益	三、九八〇	三、一〇〇	八、四七四
九、海運及持歸金	三、一四〇	三、五二六	四、六〇五
一〇、船舶會社海外支店經營費	六〇〇、八七	六、六八二	六、九〇〇
一一、船舶會社海外支店經營費	九、六八七	七、二二四	七、二四九
一二、船舶會社海外支店經營費	三、七四一	二、八三三	二、九七三
一三、船舶會社海外支店經營費	一、二九七	一、八九一	一、九一六
一四、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
一五、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
一六、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
一七、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
一八、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
一九、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
二〇、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
二一、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
二二、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
二三、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
二四、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
二五、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
二六、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
二七、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
二八、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
二九、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
三〇、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
三一、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
三二、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
三三、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
三四、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
三五、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
三六、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
三七、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
三八、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
三九、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
四〇、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
四一、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
四二、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
四三、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
四四、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
四五、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
四六、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
四七、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
四八、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
四九、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三
五〇、船舶會社海外支店經營費	一、四三六	三、三三〇	二、七三三

二九、本邦國債(内債外債)買戻	五〇、六一八	一七、七五二	四四、二九〇	五四、九七四
三〇、同地方債社債買戻	三、六一七	三、八六三	一、六七八	二、二二三
三一、同株式買戻	七、一一〇	九、六三三	一、一六二	二、一五〇
三二、本邦人海外放債	一九九、九一九	七、一七四	一、一五〇	二、一五〇
三三、外國債應募及購入	一五八、三九七	七、一七四	一、一五〇	二、一五〇
三四、外國地方債社債購入	二九、九六一	八、〇〇〇	一、一五〇	二、一五〇
三五、海外株式投資	六、七一一	九、〇九一	二、三六七	一、一五六
合計	一六九、七九六	七、八八二	五、八四一	四、四二五
第一、經常的受拂超過	二一四、六八二	一、六四二	一、五四九	一、五〇七
第二、臨時的受拂超過	三八四、四七八	二、五五三	二、八二二	二、七五七
合計	三八四、四七八	二、五五三	二、八二二	二、七五七

(備考) 右表は昭和三年十月二日開催の經濟審議會第二部特別委員會に大藏省より參考資料として提出されたものであり、かゝる細目内容までが發表されたのは始めてである。

尙ほ最近の數字を示せば、

(一) 經常的收支	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
受拂取	五二九	五五〇	六〇〇	二六二
差引	三七一	三八九	四一九	二四三
受拂取超過	一四八	一六一	一八一	一八
(二) 臨時的收支	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
受拂取	二〇〇	三四三	三六八	三三五
差引	二八七	二五八	四五八	三七一
受拂取超過	八六	二五	九〇	一四六

(註) 表中△印は支拂超過を示す。又昭和五年度の分は昭和四年度以前と集計方法を異にした爲め数字が著しく減少した。

右の中注意すべきことは臨時的収入又は支拂と稱せられるものは主として債権債務の元本の移動關係のみを示すものであつて損益を表はすものでないことである。例へば臨時的収入が如何に多大であつても、それは單に外國からの資本の借入額の大なることを示すに止まり、何事かの後には返済すべき性質のものである故、此の額が多額であつても國民經濟上決して喜ぶべき現象ではないのである。之と同様の理により臨時的支拂の多額なることは決して憂ふべき現象ではなく、其内容が本邦借入金額の返済又は本邦人の海外放資なる意味に於て寧ろ喜ぶべき現象といふべきである。然るに經常的収入又は支拂は會計學上の損益勘定に該當するものであつて其収入の大なることは本邦の利益の大なることを示し、又支拂の大なることは本邦の損失の大なることを示すのである。依て國際貸借狀態の良否は貨物輸出入と經常的收支の差額が受取勘定にありや支拂勘定にありやに依て決せられるといふべく今此關係を前二表に依て見れば、本邦は經常的收支に於て常に受取超過を示し、之によつて漸く貿易入超狀態を緩和してゐるのである。

貨物貿易入超額 經常的收支受取超過 差引支拂超過	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
		百萬元 二四九 一四六	百萬元 三三四 一七三	百萬元 一七一 一八二

(註) △印は受取超過。

右表に依ても知られる様に、日本では貿易外の經常的收支勘定に於ては常に受取超過を示すに拘らず貨物の入超額が巨大に上る爲め、昭和四年を除けば常に支拂超過となつてゐるのである。而して其の決済は如何にして行はれるかといへば臨時的收支の受取勘定超過及び金銀の出超又は在外正貨の減少によつて行はれてゐるのである。即ち一家の經濟に譬へれば財産の減少及借入金によつて収入の不足を補つてゐる如きものである。かゝる現象はまことに憂ふべき現象なることいふまでもないが、ただこゝに吾人の意を強うするに足るものは邦人の海外に於ける發展、殊に出商業による利益の獲得である。出商業とは例へば日本人が印度の棉花を歐洲に販賣し利益を收めるが如き、外國間の商業を指すのである。今昭和四年度に於ける本邦人の出商業の取引高を示せば次の如し。

商品	外國間	同一國間	總計
棉花	72.3	40.5	112.8
絲	3.8	105.0	108.8
大豆	49.3	11.0	60.3
棉布	37.8	10.6	48.4
麻布	5.7	37.3	43.0
石炭	22.1	7.8	29.9
砂糖	3.9	23.2	27.1
麥	18.3	5.3	23.6
袋	18.2	4.3	22.5
生絲	16.2	5.3	21.5
小麥粉	19.2	0.5	19.7
米	13.2	5.0	18.2
大豆	12.0	5.2	17.2
油	12.8	4.0	16.8
麻	11.0	1.2	12.2
機械	11.0	0.3	11.3
金物	2.4	8.7	11.1
雜	2.5	4.3	6.8
其他	33.8	22.5	65.5
計	365.5	302.0	676.7

(單位百萬圓)

即ち昭和四年度に於ける邦人の出商業の額は六億七千萬圓に上り此中二%が手数料として本邦へ送金せられるものとすれば約一千三百萬圓が受取勘定となるわけである。本邦の如き國土の狭小な國家にあつてはかゝる出商業又は保險海運關係によつて國際貸借の改善を圖るより外に途はない。而して外國貿易統計はかゝる國民的自覺を促がすべき任務をも有してゐるのである。今此章を完結するに當り、チスカ氏著「經濟統計」によつて歐洲大戰後に於ける各國の外國貿易に関する一表を轉載して參考の用に供しよう。

國名	1920			1921			1922			
	輸入	輸出	超過	輸入	輸出	超過	輸入	輸出	超過	
獨逸	98,130	69,311	- 2,888	4,015	2,401	- 1,614	6,200	3,970	- 2,230	
同	百萬元	3,947	3,224	- 223	5,751	3,007	- 2,748	6,312	6,199	- 112
英國	千磅	1,932,649	1,554,222	- 375,427	1,086,687	810,248	- 276,439	1,003,918	824,274	- 179,644
佛國	百萬	49,905	26,895	- 23,010	23,549	21,553	- 1,995	23,901	20,642	- 3,259
伊國	百萬	15,862	7,804	- 8,058	20,058	9,224	- 10,834	-	-	-
瑞西	百萬	4,243	3,277	- 966	2,248	1,763	- 484	1,915	1,690	- 225
和蘭	百萬	3,332	1,702	- 1,630	2,240	1,370	- 871	2,027	1,221	- 806

丁	扶萬クローネ	3,142	1,816	- 1,326	1,635	1,467	- 169	1,505	1,242	- 263
白	耳義百萬フラン	12,942	8,862	- 4,080	10,055	7,147	- 2,907	9,377	6,110	- 3,268
西	班牙百萬ペセタ	1,435	1,010	- 425	1,261	498	- 462	-	-	-
瑞	典百萬クローナ	3,374	2,294	- 1,080	1,266	1,100	- 166	1,164	1,152	- 12
希	臘百萬ドラクマ	2,131	664	- 1,467	1,674	817	- 857	-	-	-
芬	蘭百萬フラン	3,620	2,907	- 714	3,583	3,386	- 197	3,953	4,461	+ 508
米	國百萬弗	5,279	8,229	+ 2,949	2,587	4,427	+ 1,841	-	382	-
カ	ナダ百萬弗	1,337	1,303	- 34	800	803	+ 3	712	898	+ 136
アラ	ジール千磅	125,005	107,521	- 17,484	60,468	58,597	- 1,881	-	-	-
日	本百萬圓	-	-	-	1,614	1,253	- 361	1,859	1,595	- 264

獨逸に於ては第一欄 1920年の分は百萬紙幣マーク，1921年及 1922年の分は百萬金マーク，第二欄は凡て 1913年の單位價格に換算したものである。

第四章 商業經營統計

第一節 商業經營統計上の諸問題

街角で笛を吹き鳴らして子供を聚める飴賣りの爺さんも商人なら、今を時めく百貨店デパートも亦同じく商人である。しかし飴賣りの爺さんには何の企畫も統制もないのに反し、百貨店に是がなければ一日もその經營を續けてゆくことは出来ないだらう。飴賣りの爺さんにも或は日頃の經驗で賣上の程度は略々分つて居り、飴の仕入れにも大體の標準はあるだらう。けれどそんな頼りのない標準では百貨店の經營はつゞけて行かれない。凡そ經營と名のつくほどの商業には、もつと精確な標準と自分の活動の統制とが是非とも必要である。殊に現代の此の激しい生存競争の唯中にあつては、斯ういふ標準によつて立てた企畫と統制の無い經營は、正に暗夜に灯なくして嶮山をゆく類たぐひに他ならない。此危險を除くために生れ出たのが此處に述べようとする經營統計である。よく世間で叫ばれて居る科學的經營法も、つまりは經營統計を中心とする經營管理法に他ならない。

此處では經營とは何かと言ふ様な面倒な議論をすることを避けよう。そして唯、經營とは經濟的活動をする一つ一つの單位であるとして置かう。其經營が集り集つて一國の經濟が出来上るわけである。その經營にも經濟活動の種類に従つて色々の種別がある。農業や林業や水産業などを行ふ原始産業經營あり、加工精製する工業經營あり、また商品の分配流通を司る商業經營あり。それらの中、更に各種部内によつて數多くの經營種類が分れて来る。此處で取扱はうとするのは其最後の商業經營に就いてある。

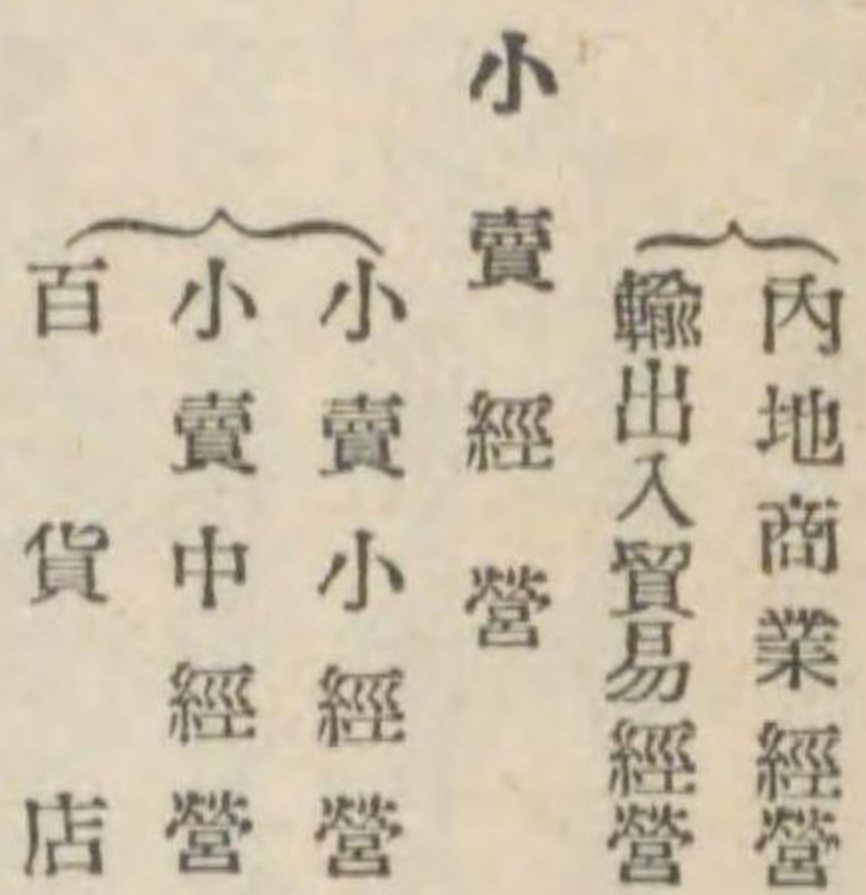
商業經營統計とは此商業經營の統計的研究であると要約することが出来る。つまり、第一章で述べた所の統計方法を商業經營の諸活動に適用して、統計方法の有つ微妙な働きによつて商業經營の中に潜んで居る色々の法則を見つけ出し、それによつて個々の經營の活動に標準を與へ、方針を授けようとするのである。商業經營は其形こそ種々異なれ、要する所、財の分配流通を行つて利を收めてゆく經營である。此場合の財とは吾々人間にとつて何らか値打あるもの即ち價値を有して居るものを意味することは經濟學の説く所であるが、値打あるもの、例へば商品なり無形の奉仕サービスなりを適當に社會の中に配分することによつて生命を續けてゆくのが商業經營である。ところが其財は通常、金額か數量で表はされて居るので、商業經營の活動も數字で之を掴むことが出来る。故に其處に商業經營の統計的研究が成立つわけである。

普通、どの經營に就てもいはれることであるが、商業經營の中にも何らか法則めいたものがあるに

違ひないと考へられて居る。勿論、それは彼のハレー彗星が七十五年目毎に屹度現はれるとかいふやうな自然法則ではない。經營の種類により、其規模の大小により、又時と所によつて夫々ちがつた法則であるかも知れない。故に法則といふよりは寧ろ、繰り返しとか通例とかいつた方が適はしいものであるかも知れない。兎も角も、斯うなれば普通斯うなるといつた様な通則が商業經營の中にも潜んで居ると思はれて居る。例へば廣告と賣上高との比例關係だとか、ストック商品の品種の構成と利潤との關係とか、經營種別によつて異なるだらうけれど兎も角、さうした一種の原理が存在するやうである。商業經營統計は其鋭い數字の武器によつて斯うした通則や原理を研究し、夫々の經營に活動の標準を與へようとする。そのためには同一種別に屬する經營を多數網羅して、それらの經營活動が與へて呉れる多くの數字的材料から統計的分析を行ふ場合もある。又、或一個の經營に就いて長年月の觀察を行ひ、其經營獨特の原理を統計的研究の結果見出す場合もある。唯、統計的研究である以上大量觀察に基づかなければならないことは第一章に詳しく述べた所である。

さて、商業經營の中にも、先に述べた様に色々の種別がある。銀行經營あり、保險經營あり、運送經營あり、倉庫業經營あり、商品販賣經營あり。更に又、其中でも最も數の多い商品販賣經營を細分して見れば次の様になる。

卸賣經營



斯ういふ區別に従つて其統計的研究にも夫々若干づつの相違が生れて來るのは當然である。けれど此處では夫等に就いて一々述べ立てることは出來ない。此處では唯、一つの理想的な商業經營といふやうなものを考へて、それに就いて統計的研究を行ふ上に如何な問題が起きるかを眺めてゆくばかりである。

商業經營統計には一體如何な部分があり、如何な問題が起きるのであるか。商業經營統計の部門や問題を大體洩れなく眺めてゆくために此處では次の様な見方を採るのが最もよいと思ふ。

すべて商業經營は財の分配流通を司る經營であるから、商業經營の活動の一切は財即ち値打あるもの（價值）の動きに關係して居るといへるだらう。商品といふ財が商人の手によつて或場所から他の場所へ移つたといふ場合、商品の動きは商業經營の活動であつた。銀行によつて或る經營が資金の融通を受けたといふ場合、信用といふ財の動きはやはり、商業經營の活動であつた。斯のやうにして吾々

は、あらゆる経営活動は財の動きを見れば分ると言ふことが出来ると思ふ。従つて、経営の統計的研究は財の動きの統計的研究といふことになつて来るし、商業経営統計の色々な問題も、財の動き或ひは価値の流れの中に渦捲き起つて来るわけになる。

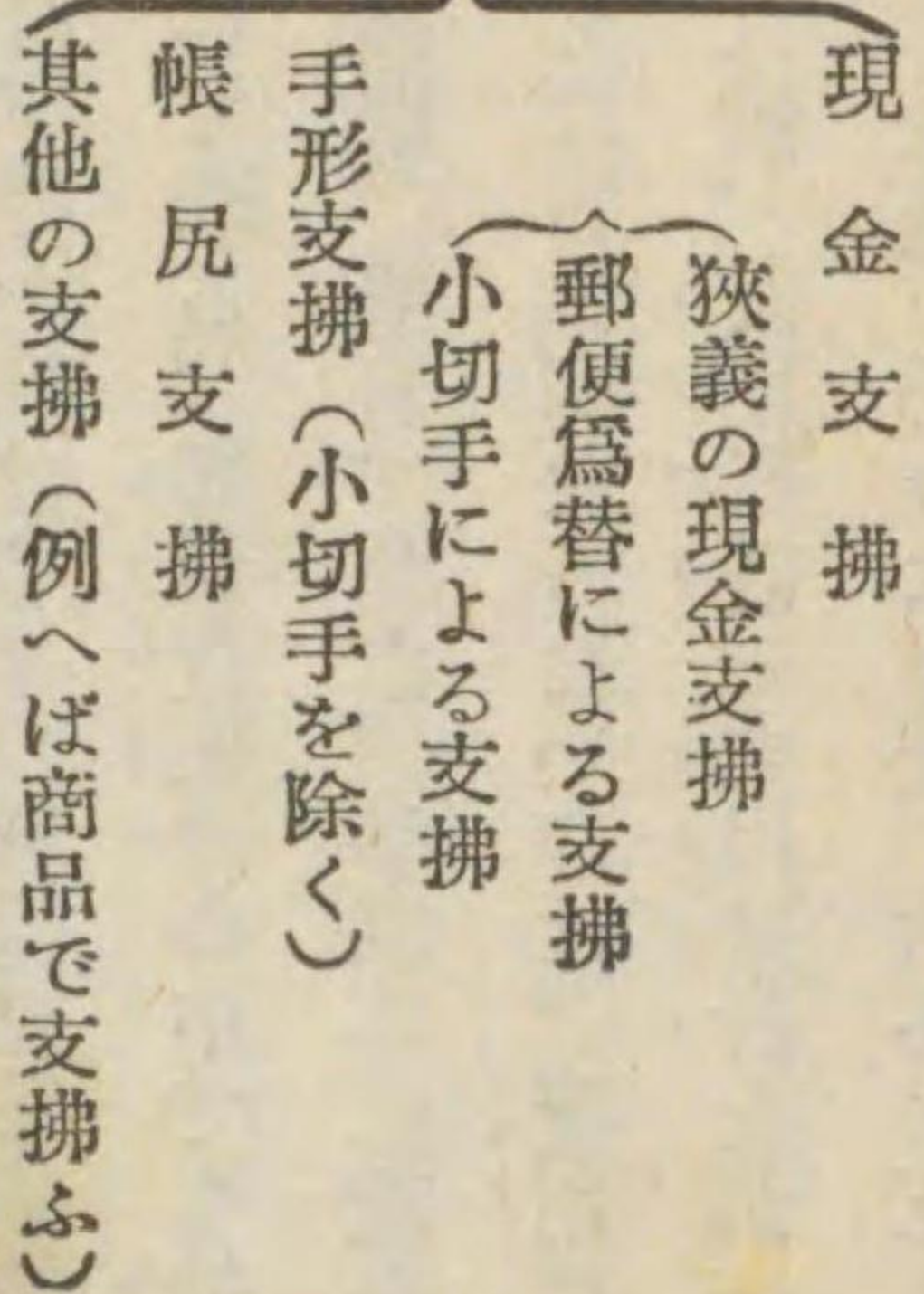
ところで此『価値の流れ』は、一つの経営に就いて見る場合、二種類に分れる。即ち一つの経営には其経営の中だけでの流れがあるばかりでなく、其経営が外部の他の経営と取引する時起つて来るところの価値の流れがある。商業経営にとつては此後者が殊に重要であることは勿論である。外部との取引なしに如何して商業経営が成立つてゆかうか。故に吾々は、此外の価値の流れを先づ眺めて見よう。そこに如何な商業経営統計上の問題があるだらうか。

(一)供給と支拂

一つの経営から何らかの種類の(物品或ひは奉仕^{サービス})供給が他の経営に向つて出てゆく。それによつて何等かの形の支拂が其経営に何時かしら入つて来る。と同様にして、他の経営から何かの種類の供給が入つて来れば、其経営は他日何らかの形式で支拂をせねばならない。斯ういふ風に、一つの経営の外部的な価値の流れはすべて供給と支拂の形に直されて了ふ。

今、商品販賣経営に例をとらう。経営から外へ出てゆく供給は即ち商品の賣捌きであり、経営が受ける供給は商品の仕入れに他ならない。だから其處に賣上統計と仕入統計の問題が起き、又それらに

附隨して價格統計の問題も生じて来る。更に支拂の方面では、支拂が通常分れて、



となるから、それに従つて現金統計、手形統計(是は更に分れて手形振出統計、手形引受統計等となる)、信用統計などの問題が起き、それに附隨しては金利統計の問題も生ずる。是等を總稱して販賣統計とするならば、販賣統計の中でも最も重要なのは賣上統計である。賣上統計は通常、金額と數量の二形式で表はされる。又、賣上げと言ふ以上、買ふ者がなくてはならないし、賣上げを活潑にするためには廣告の必要もあらう。そこで顧客統計及び廣告統計の問題が起きて来る。是等の諸統計が如何いふ形式で又どういふ風に研究されるかは、経営の種類によつても違つて来るし、それを一々此小著で詳しく述べることは出来ない。唯其中の極めて特殊なものだけが第三節で述べられて居る。以下現れて来る統計の諸部門に就いても同様である。

(二)費用と効果

經營の外部の價値の流れがすべて供給と支拂の形に直されるやうに、經營内部の流れは費用と効果の形ですべて表はすことが出来る。是は主として原價計算の問題であるから、商業經營よりも寧ろ工業經營で重要な問題である。例へば一定の生産に對して原料品が幾何、賃銀が幾何、燃料が幾何、といふ様に其處に用ひられた費用コストの分析と、次いで其結果どれだけの生産物がどれだけの價値を持つて現はれたかといふ効果の問題である。併し商業經營でも特に銀行經營あたりでは預金原價コストの問題など非常に重大であるし、通常の商品販賣經營でも次の様な形で現はれて来る。それを直ちに統計上の問題として記せば斯うなる。即ち、給料統計、仕入費統計、配達費統計、旅費統計、通信費統計、保険料統計、税金統計等々の所謂經營費統計。勿論此處に先の仕入統計、廣告統計も費用コストの見地から再び現はれて来る。經營費統計の中でも給料統計は所謂使用人統計であつて、是に關しては使用人の分類、移動、罹病、死亡、争議等に就いての統計も問題となつて来る。最後に此の費用と効果に關して注意しなければならぬのは、費用は支出とは一應別な考へであることである。けれど商業經營に於ては大體、費用統計と支出統計とが一致する。

(三)最後に吾々は經營の内外に互る價値の流れを或る一時點で切斷して見よう。といふと六ヶ敷く聞えるが、是はどの經營でも常に見られることである。月末の決算や、半期毎の決算時を考へて見よ。經營は其活動の斷面圖、即ち價値の流れの切斷面を貸借對照表として發表し、其期の經營成績を損益計算書として發表する。併し價値の流れの切斷は、何もさういふ時に限つた譯でなく、いつ何時でも行ふことが出来る。(一)の供給(例へば商品供給としよう)を隨時に切斷して見るならば、そこに商品在高が現はれて來、是は直ちに在庫品統計、或ひは倉庫統計の問題となる。

併し乍ら經營統計の問題として最も興味ありと思はれるのは貸借對照表統計及び損益計算書統計である。前者は特に資本構成比の問題として近來各方面で研究され始めた。即ち同一種類に屬する經營を多數網羅して、其發表する貸借對照表バランス・シートにより夫々の經營の資本が如何に構成されて居るか即ち例へば固定資本は全體の幾パーセントに當るか、流動資本は如何といふやうな研究を大量的に行ひ、以て資本の大小と資本構成との關係、更に又、利潤との關係などを見てゆかうとするのである。我が國では商業經營に就いて此の研究の行はれたのは未だ聞かないが、工業經營に就いて先年來、名古屋高商の調査室で我邦紡績業の資本構成比が研究されて居る。

後者、損益計算書統計或ひは損益統計では特に經營費と利潤、賣上高と純益などの問題が重要である。

商業經營統計は以上のやうな諸問題と諸部門とを有する。其研究の結果は必ず其經營に多大の利益を齎らすにちがひない。けれど是とても少からざる費用を要する仕事であるから、小經營では採算上

むしろ之を行つて居ないものが多いだらう。併し中經營以上殊に百貨店とか大銀行とか一流保險會社とかの大經營になれば其の利は費用を償つて餘りある程であるから、我が國でも各々調査課、統計課を設置して之を行つて居る。唯、その調査研究の結果をあまり發表しないのは事經營の機密に觸れるためか。若しも各經營が出来るだけ其結果或ひは資料を公の調査機關あたりに提供して、從來の、單に縦だけに細い經營統計から縦にも横にも宏澤な大量研究へ移ることが出来るとすれば、經營統計は漸く本格的になつたといひ得るだらう。

第二節 商業經營統計の資料

第一節に述べたやうな種々な問題と部門とを持つて居る商業經營統計も、それが統計的研究である限り、其材料になるところの數字、即ち經營の活動を實際に表はしたところの數字がなくては問題にならぬ。然らば、さういふ數字は何處から獲られるのであらうか。商業經營統計の資料は何處にあるのだらうか。

眞つ先に思ひつくのは經營の書類である。書類といつても先づ簿記の帳簿である。次には原價計算のための諸記録が思ひつかれるかも知れない。經營は其活動の跡を是等の書類に几帳面に書き付けてある。簿記は其の時其の時の經營活動を記録して其の期間に於ける財の變動、収益の如何を知ること

を目的として居る。原價計算は其期間或ひは其商品に關して原價を計算して價格形成の標準を與へよるといふ目的で記録されて居る。しかし目的は何でもよい、經營統計の欲しがつて居るのは數字なのだ。經營の活動を記録した數字なのだ。故に簿記や原價計算の數字を經營統計は喜んで利用する。けれど統計は簿記や原價計算とは目的が異なつて居る。簿記や原價計算は全く其時限りのために數字を記録する。是等にとつて他の期間の數字などは全く用をなさない。ところが統計の目的は之と反對に一つ一つの期間の數字にあるのではなく、それらのすべての期間を通じての數字、換言すれば經營が過去に歩んで來た道の一切の數字、も一つ言換へれば時間的にも空間的にも局限されて居ない廣汎な數字を求めようとするのにある。さういふ數字を通じて、經營の辿つて來た長い歴史的發展や、經營内に度々繰返された通則や、従つて又、今後經營が歩むべき道の見透しなどを研究し見出さうとするのにある。故に經營統計は、一方に簿記や原價計算の數字を利用するけれど、そのみで決して満足するものではない。簿記にも原價計算にも現はれて來ない數字、例へば使用人又は勞働者の生活狀態に關する數字などは、直接に經營統計のために調査される必要がある。

要するに經營統計（經營の統計的研究）のために必要な資料、即ち經營活動に關する統計には二種類ある譯である。即ち統計學でいふ所の第一義統計と第二義統計と。第一義統計とは全然或ひは主として統計的研究の目的で調査された資料に基づくものを謂ひ、第二義統計とは其資料を獲る時に統計

的な目的が全く考へられて居なかつたか或は副次的にしか考へられて居なかつた場合の統計をいふ。
今(商業) 經營統計の資料が獲られる所を分けて見ると次のやうになる。

(一) 直接の調査 (第一義統計)

(二) 既存の資料の利用 (第二義統計)

(甲) 組織的簿記帳の利用

(乙) 補助帳簿の利用

(丙) 原價計算用記録の利用

(丁) 經營活動に關する其他の記録

(例へば取引上の書信)

(戊) 外部統計の利用

是等の源泉による資料は經營内部のあちらこちらに散在して居るので、經營統計研究者は單に經營の全組織、全部署をよく理解し、用ひられて居る所の夫々の型式を知り盡して居るばかりでなく、其事業の精神一般や簿記・原價計算に至るまでに通曉して居る必要がある。さうしてこそ始めて、實際の場合に必要なつて來る資料が果して經營内にあるか否かを知ることが出来るし、さうしてこそ始めて、そこにある資料がどの程度まで利用し得るかを判定することが出来るといふものである。
以下前に掲げた順に其説明をしてゆかうと思ふ。

(一) 直接の調査

經營統計に於ては直接の調査はあまり行はれて居ない。唯、社會的な問題例へば使用人の給料とか家族關係とかの調査が行はれるのみであり、それも人名簿などに豫め記入されてない場合に限られる。斯のやうに是非なければならぬものに限つてしか之を行はない理由は、直接の調査には費用が掛かるからである。此費用問題は實の所、經營統計發達の上から深く留意しなければならぬ重大要素なのであつて、此ために簿記や原價計算の形式を統計の目的に合する様にし、而も簿記や原價計算本來の目的を害はぬやうな努力が拂はれて居るわけである。

(二) 既存の資料の利用

此處に出て來る例は必ずしも商業經營の例に止まらない。説明の便宜のため工業經營の要素をも可成りに取り入れた。

(甲) 組織的な簿記帳の利用

簿記法は經營活動に關する價値の流れを組織的に一定の型の中へ收めて記録しようとする。統計法も亦價値の流れを組織的に把まへようとする。だから簿記の帳簿は統計に對して豊かな資料を與へて呉れる。此際兩者の目的が違ふことは既に述べた所である。

簿記數字が統計資料として利用されると言つても、帳簿記入の際に統計的目的が顧慮せられたか否かによつて、其程度が著しく異なつて來る。だから先にも述べた様に此二つの違つた目的を出来るだ

け一つの骨折りで果して了ふといふことが經營統計家の一つの任務となつて來るわけである。けれど他方で又、帳簿記入を極めて細かい點まで統計の目的に沿ふ様にする時は、簿記本來の簡潔明瞭たるべき目的を害ねる危険が生ずる。従つて此利害如何は個々の場合に就いて夫々充分考究されなくてはならない。

簿記の數字をより、容易に統計資料に用ひるのに二つの工夫が考へられる。其一は簿記で所謂綜合、記入をば元帳其他の勘定口座を細分することによつて分割記入にする方法、其二は個々の勘定口座の中でもつと欄を増設して區分を立てる方法である。例へば斯んな例があるとする。或經營が毎月二萬圓の給料と五萬圓の勞銀を支拂ふ。そのうち給料は上級使用人に對する八千圓と下級使用人に對する一萬二千圓とに分れ、勞銀は男工の三萬圓と女工の二萬圓とに分れ、而も勞銀は毎月五回拂である。之を給料及び勞銀といふ一箇の口座に一度に記入して了へば次の様な體裁となるだらう。

給料及勞銀

6.日	現 金	10,000.—
12.	"	10,000.—
18.	"	10,000.—
24.	"	10,000.—
30.	"	10,000.—
30.	"	20,000.—
		<u>70,000.—</u>

之を今、統計への利用の目的に副ふべく第一法に従つて分割記入とすれば次の様になる。

以上のいづれかの形式を採ることによつて、簿記に於ける給料勘定及び勞銀勘定の數字は容易に給

		給 料		
		上級使用人	下級使用人	總 計
30.日	現 金	8,000.—		
30.	"		12,000.—	20,000.—

		勞 銀		
		男 工	女 工	總 計
6.日	現 金	6,000.—	4,000.—	10,000.—
12.	"	6,000.—	4,000.—	10,000.—
18.	"	6,000.—	4,000.—	10,000.—
24.	"	6,000.—	4,000.—	10,000.—
30.	"	6,000.—	4,000.—	10,000.—
		<u>30,000.—</u>	<u>20,000.—</u>	<u>50,000.—</u>

又、同じものを第二法に従つて示して見れば給料勘定、勞銀勘定の借方は次のやうになる。

		上級使用人給料	
30.日	現 金	<u>8,000.—</u>	

		下級使用人給料	
30.日	現 金	<u>12,000.—</u>	

		男 工 勞 銀	
6.日	現 金	6,000.—	
12.	"	6,000.—	
18.	"	6,000.—	
24.	"	6,000.—	
30.	"	6,000.—	
		<u>30,000.—</u>	

		女 工 勞 銀	
6.日	現 金	4,000.—	
12.	"	4,000.—	
18.	"	4,000.—	
24.	"	4,000.—	
30.	"	4,000.—	
		<u>20,000.—</u>	

料統計及び労働統計の資料となることが出来る。勿論、其分割方法は多種多様であつて何も上の形式に限るわけはなく、又、勘定口座の増設、分割は元帳に就いてのみ行はれるのでなく仕譯帳其他の帳簿にも同様に行はれるものである。

此分割法は殊に商品勘定で重要な働きをする。商品勘定は普通、其借方に期首在高、仕入高、戻り品高などが記入され、貸方に賣上高、返送品高、時價による評價損、期末在高などが記入されるので、一つの勘定口座の中に實に複雑な総合記入が行はれて居るわけである。此まゝでは到底是は商品統計(特に賣上統計、在庫品統計等)の資料となることを得ない。此場合、先の様な分割方法は此の弊を救つて呉れる。

(2) 補助帳簿の利用

各經營は其組織的簿記帳と並べて種々の補助帳簿を持つて居る。是には簿記帳簿の記入のみでは知り得ないところの數量關係(例へば商品の個數、容積、重量、商標、品質等による計算)とか、信用關係(元帳から貸借額を抽いて來て、出した信用と受けた信用との平衡つりあひを見る等)とか、經營狀態殊に労働狀態とか、法律關係(例へば代理人關係)とかを記入する。従つて是は又、經營統計にとつて貴重な資料を提供して呉れる。例へば、數量統計の基礎としては、

原料品、半製品、精製品、商品一般、有價證券等の在高帳。

機械、設備等の棚卸帳。

郵税帳。

手形帳。

送金管理帳、など。

信用統計の基礎としては、

貸借信用比較帳。

預金通帳。

顧客先名簿。

仕入先名簿。

法律關係の統計の基礎としては、

代理店名簿。

手形支拂期限記入簿。

經營管理、殊に労働狀態に關する統計の基礎としては、

賃銀簿。

請負簿。

労働者名簿。

人名簿、など。

是等の補助帳簿はカード式を採用することによつて益々統計資料を容易に供給することが出来る。

(丙)原價計算用の記録の利用

原價計算と經營統計とは特に密接な關係を持つて居る。一方に於て原價計算が費用と効果に關する統計の資料を與へると同時に、他方に於て統計が原價計算に必要な種々の數字を提供する。

原價計算制度は經濟的價格を立てるために是非とも必要な所から、特に工業經營で行はれて居る所の計算制度である。商業經營では銀行經營などの一部門を除いては原價計算制度の利用が工業經營ほど盛んでない。其理由は商業經營に於ては買入値段或ひは市場價格が屢々經濟的價格形成の充分なる基礎を與へて呉れるからである。

兎も角、原價計算制度の行はれる處では、原價計算の基礎をなす多くの記録、例へば原料引渡報告書、間接費割賦表、勞銀割賦表、原價計算表などが經營統計に資料を提供して呉れて居る。

(丁)經營活動に關する其他の記録の利用

以上の他、各經營には取引上の書信其他の中に、統計資料を供するやうな多くの記録がある。例へば顧客の注文状などは此好例であらう。但し此場合、其經營が顧客から注文を受ける際に、いつも一定の型式の傳票を用ひるといふ様な制度になつて居ない以上、完全な統計資料を供給することが出来ないのは、此の種の記録にとつて残念なことである。

(戊)外部統計の利用

是まで述べた所は夫々の經營内部に存して統計資料となるべきものであつた。従つて各經營が夫々自分の機密として夫々の經營内だけに止めておき、之を外部に發表することを嫌ふ傾向の多いものであつた。此秘密主義は營利を目的とする經營にとつては一應尤もなことではあるが、經營統計の發展上一つの大きな障害、否、根本的な惱みの種であることは確かである。夫々の經營はそのため唯自分の經營内に求められる資料をしか利用出来ない。

それは兎も角として、經營統計はさうした個々の經營内部で獲られる資料だけでは満足しない。個々の經營を立ち越えて、經濟界の大勢をも經營統計は採り入れて來なければならぬ。例へば内外物價の高さ、一般賃金の高さ、諸産業の形勢、金利、爲替相場、關稅、積送貨物の状態等を考慮に入れて、經濟界の大勢に順應した經營方針を編み出さねばならぬ。是等の資料は唯外部からのみ獲られるのである。

斯ういふ外部統計には官廳の發表するものと公私諸調査機關が發表するものがある。其發表せられる數字は主として完成した統計、殊に指數になつて居るものが多い。それだけに利用の便もあれば又利用者の要求に副はぬ弊もあらう。

斯ういふ外部統計を用ひて實際に經濟界の大勢を統計的に分析し、景氣の循環その他を研究するこ

とは本書第五章に譲ることにして、此處では唯現に我が國で發表されて居る外部統計資料の主なるもの若干を掲げて讀者の参考に資するに止めよう。

- 金融事項参考書 (大藏省)
- 銀行通信録 (東京銀行集會所)
- 大藏省年報 (大藏省)
- 本邦經濟統計 (日本銀行)
- 重要經濟統計月報 (東京商工會議所)
- 本邦財界情勢 (三菱資料課)
- 大日本帝國統計年鑑 (内閣統計局)
- 全國公債社債明細表 (日本興業銀行)
- 東京株式取引所統計月報
- 株價指數 (東京株式取引所)
- 大日本外國貿易年報及び月表 (大藏省)
- 主要貨物統計年報 (鐵道省)
- 會社統計表 (商工省)
- 倉庫貨物 (日本銀行)
- 是に就いては尙大日本倉庫聯合會の調査あり。
- 商工省統計表 (商工省)
- 工場統計表 (同)

- 保險年鑑 (同)
- 東京物價調べ (日本銀行)
- 卸賣物價調査月報 (商工省)
- 勞働統計實地調査報告 (内閣統計局)
- 勞働統計 (日本銀行)
- 賃銀物價統計月報 (内閣統計局)
- 賃銀統計月報 (商工省)
- 其他、東洋經濟新報、エコノミスト、ダイヤモンド等の經濟雜誌には夫々の社の調査せる統計資料を掲載して居る。

第三節 統計方法による經營諸法則の發見

經營の活動を統計的に研究すること、即ち經營統計は次の様な要素から出來上るわけである。

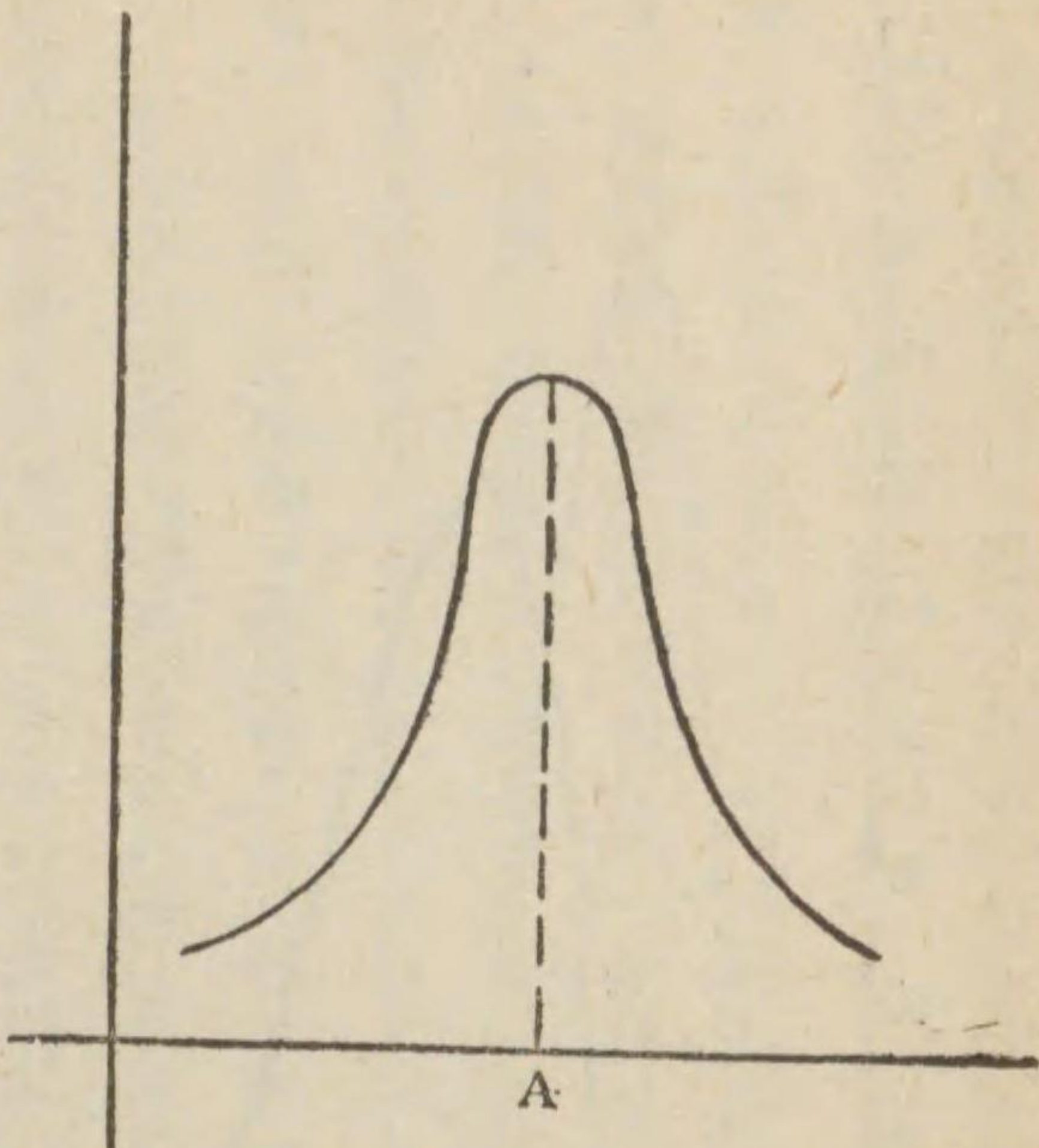
- 問題——經營活動に關して如何なる事が統計的に研究さるべきか (本章第一節)
- 材料——其問題を研究する資料 (本章第二節)
- 方法——其材料を使つて其問題を解く際の研究方法、即ち統計方法 (第一章)

此三者が組合はさつて出來上る所の統計的研究は實に千差萬別の姿を示すだらう。其の全部が經營統計なのである。だから此處では其ほんの一例を、重要と思はれる一例を擧げるに過ぎないことゝな

此處では大數研究と比率研究と相關研究の三つを選ぶことゝした。即ち經營統計に用ひられる主要な方法三つを實例によつて解説するわけである。けれど此三つの方法以外にも長期趨勢の研究とか循環變動の研究とかの、是等に劣らず重要な統計解析法がある。だが是は便宜上第五章で解析することにした。だから第五章はつまり第四章の延長である。

第一項 大數研究

是は要するに、吾々が第一章で知つたところの大量觀察を經營研究に應用したものに他ならぬ。いふまでもなく經營統計と名の付く以上は其根柢に常に大量觀察がなくてはならぬ。それなのに殊更此處で大數研究といふ表題を掲げるわけは、デーヴェスは此研究方法を説明して曰く、「最近急速に發展した大數研究の方法といふのは、つまり統計學や確率論で知られた大數法則に基づいたもののである。或る現象に就いて極めて數多く觀察した材料があるとすると、それは大數法則に従つて通常一つの値の周圍に群がつて来る。その一つの値と言ふのは其の多くの觀察の結果一番頻繁に現はれた値であり、其現象にとつて正常な値として特に眼に付く値である。……」と。つまり或る現象の大量觀察の結果を、第一章で説明した所の統計曲線で表はすとすると、その曲線が一つの峻しい山を作り、一



つの最も高い點が現はれると言ふのである。

即ち圖のA點の値がそれである。此A點の表はす値が此現象の正常な値であると言ふのである。斯ういふ種類の統計曲線を統計學で度數分布曲線と言ふから、デーヴェスの所謂、大數研究とは要するに度數分布曲線による研究なのである。次に此大數研究の實例を擧げよう。

それは二つの小賣店の毎日の賣上高を一年間記録して行つた大數研究の實例である。その小賣店は二軒とも同じ都會にある同種類の小賣商であるが、一方は役人街まちにあり他方は勞働者街にあつた。此二つの店の一年間の毎日の賣上高を夫々次のやうにして度數分布曲線に描いて見た。即ち毎日の賣上高は日によつて異なるから、先づ之を一日二十五圓以上五十五マルク迄賣れた日が幾日あつたか、五十五圓以上八十五圓迄賣れた日が幾日あつたかと言ふ風に階段分けにし、次に圓高を横軸、日數を縦軸にした方眼紙に今の値を描き入れて行つたのである。すると其結果は次圖のやうな二つの度數分布曲線となつて現はれた。圖で例へば五五―とあるのは賣上高五十五圓から八十五圓迄を現はし、其の點の縦線にそれだけ賣れた日數を取るのである。